里見八犬傳　第四輯　巻一

特別
へ13
4304
4

N13
4304
4

<2001-306>

八犬傳第四集叙

狗之守夜也性矣敬主識主也亦性矣諺曰跖狗吠堯此非其狗之罪臣子之於亂朝善守其職而無私者亦當爲是何者殷三賢不忠於西伯然周不敢罪之故孔氏曰君雖不君臣不可以不臣父雖不父子不可以不子葢比干箕子等之謂歟由是

饗庭文庫

觀之其性所捷雖狗無以異人也嗚乎與夫食君之祿而令父母愁夫妻相虐兄弟為讐遠舊迎新狺々呀々走利者大有逕庭宜國有賢相則無姦佞之賓家有良狗則無窺窬之客於是四鄰可不勉而衛比屋可高枕而睡也是余之為八犬傳所以寤蒙昧抑取義於茲其書若干卷既刊布于世頃又継編至於第四集刊刻之際書肆山青堂屢来而徵序甚急每編有自序今不可辭因附增數行以塞譴云

文政三年庚辰冬十月端四書于著作堂

西廂山茶花開處

飯台　曲亭蟫史

南總里見八犬傳第四輯目録

巻壹

第三十一回　水閣扁舟資二両雄一　江村釣翁認二雙狗一

第三十二回　除二杪欏一少年得レ號　試二角觝一修驗解レ争

巻貳

第三十三回　小文吾夜喪二麻衣一　現八郎遠求二良藥一

第三十四回　栞崎房八齎二宿恨一　藁塚犬田緩二窮難一

巻三

第三十五回　念玉戲借レ笛　妙真哀返レ娘

第三十六回　破レ怨犬田與二山林一戦　含レ怨沼藺傷二害四大一

巻四

第三十七回　病客辭レ藥延レ齡　俠者殺レ身得レ仁

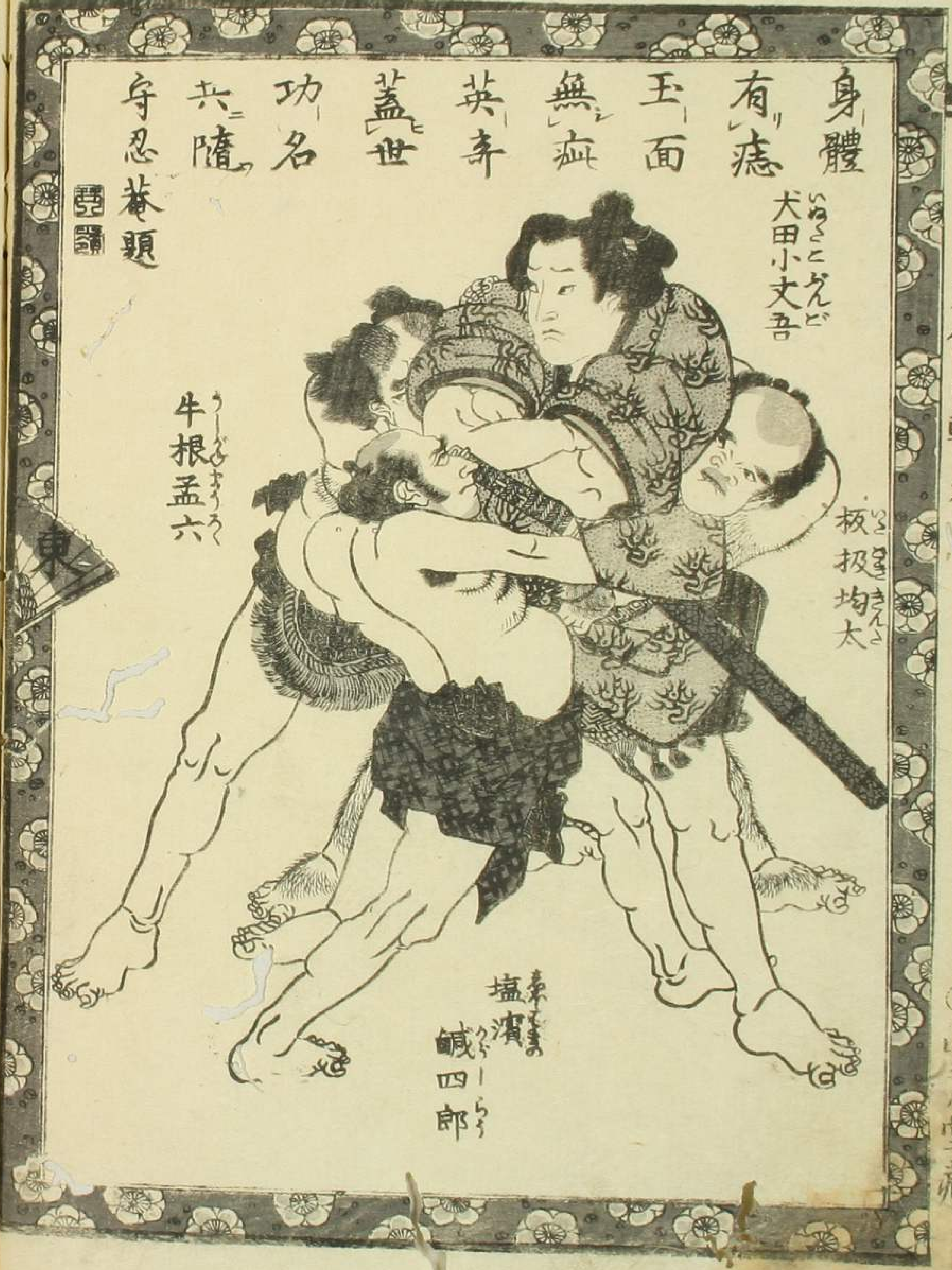
第三十八回　戍二戸外一犬拉二間者一　返二徵書一四彦辭二來使一

巻五

第三十九回　浮二一葉一壯士送二両友一　起二雲霧一神靈奪二小兒一

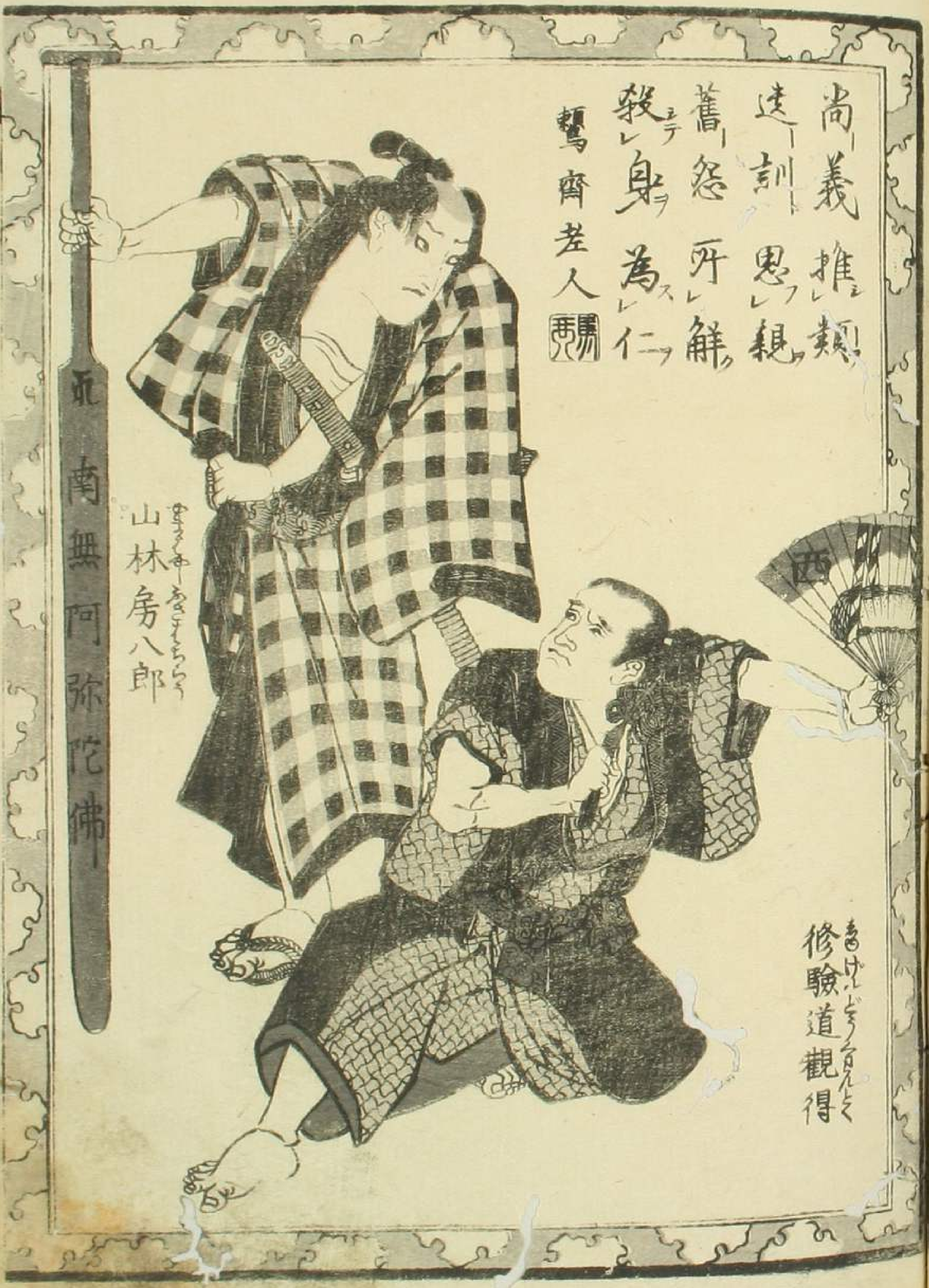
第四十回　誣二額藏一奸黨逞二殘毒一　射二羣小一豪傑鬧二法場一

八犬傳第四輯目録畢（第三十回已上目録見二前集巻端一）



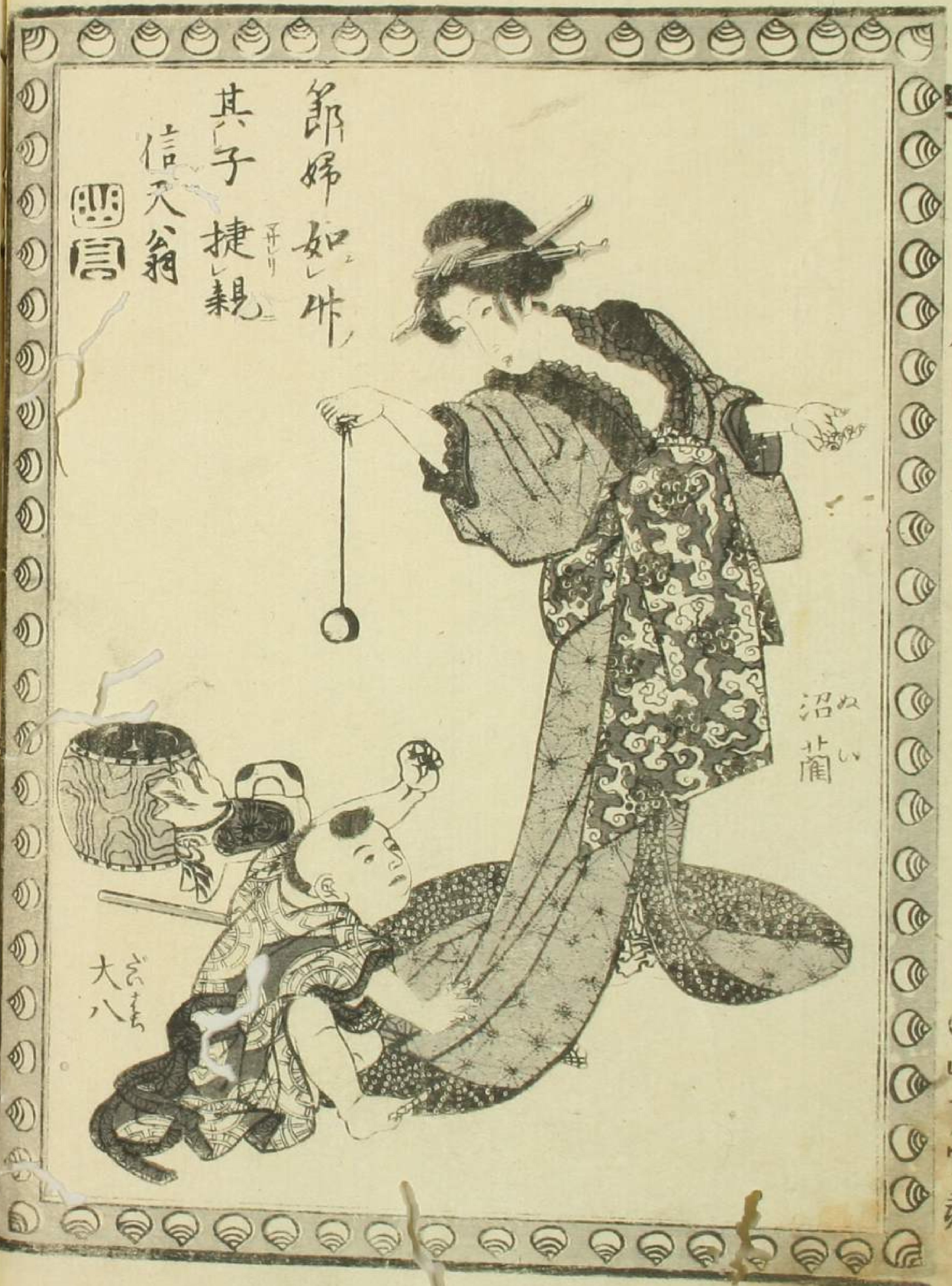
身體有瘡
玉面無疵
英才蓋世
功名共隨
守忍菴題

犬田小文吾
牛根孟六
板扱均太
塩濱鹹四郎



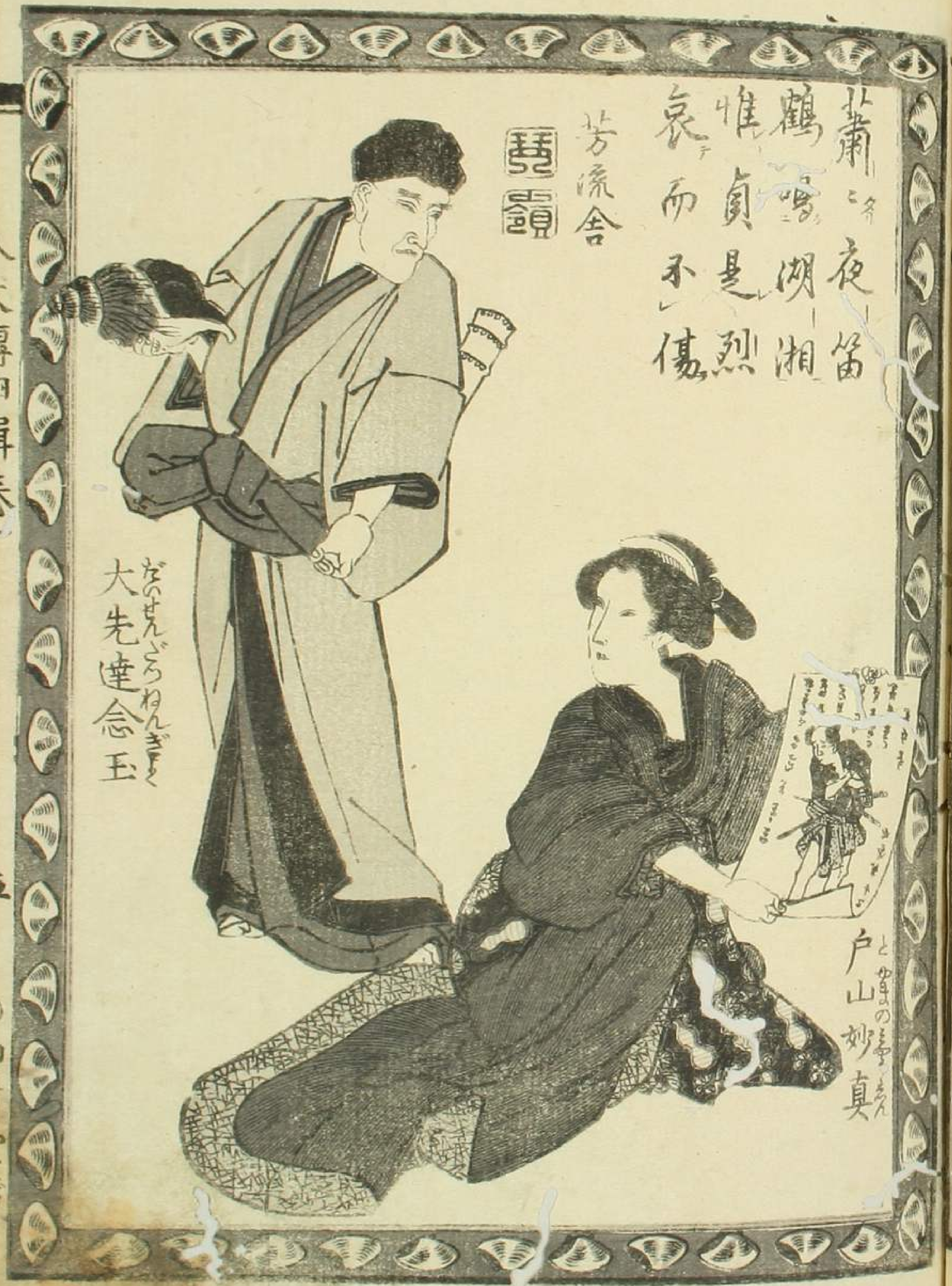
尚義推類
迷訓忍親
舊怨所解
殺身爲仁
鶯齋差人

南無阿弥陀佛
山林房八郎
修験道観得
西
東



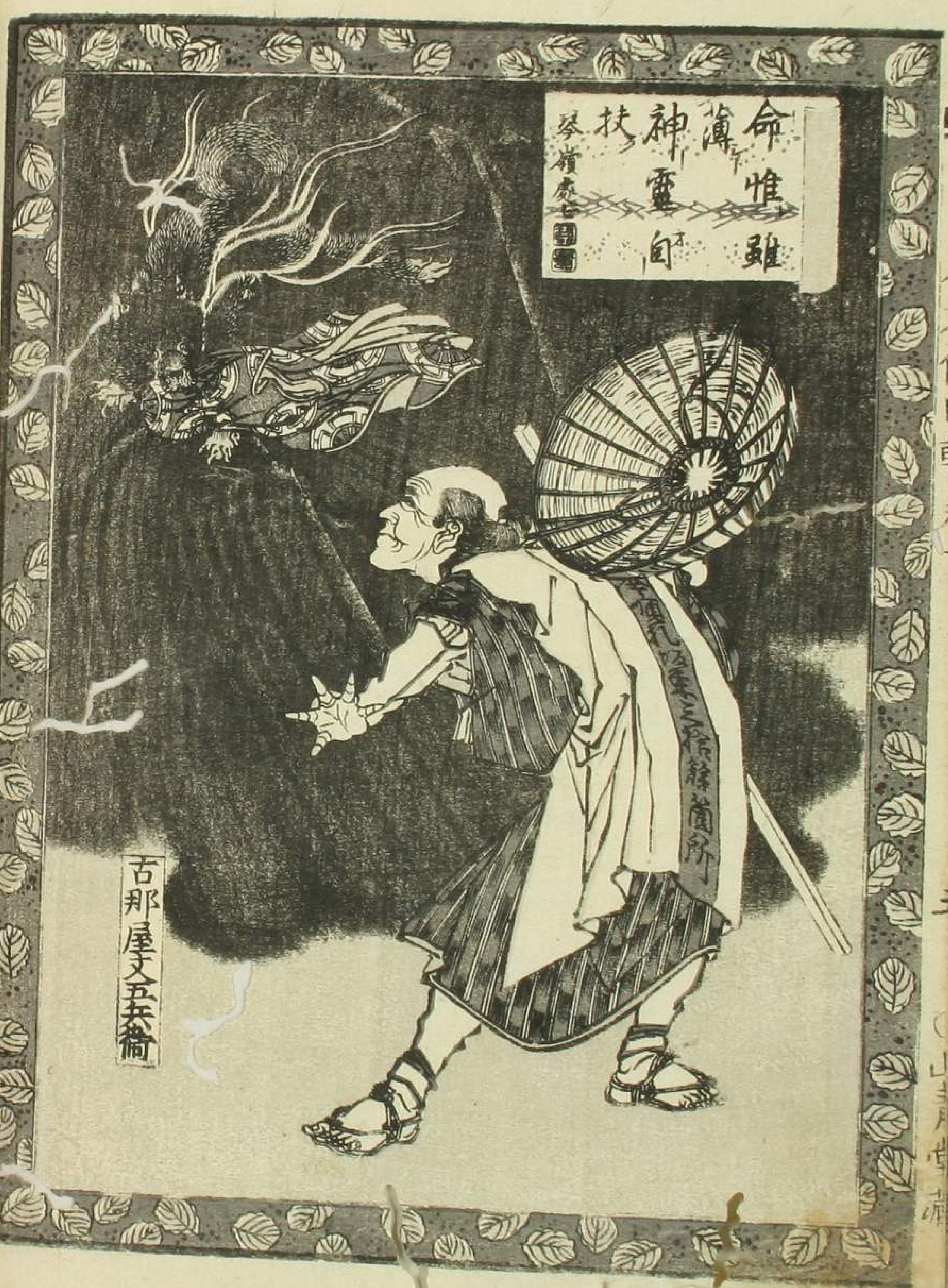
節婦如レ竹
其子捷レ親
信天翁

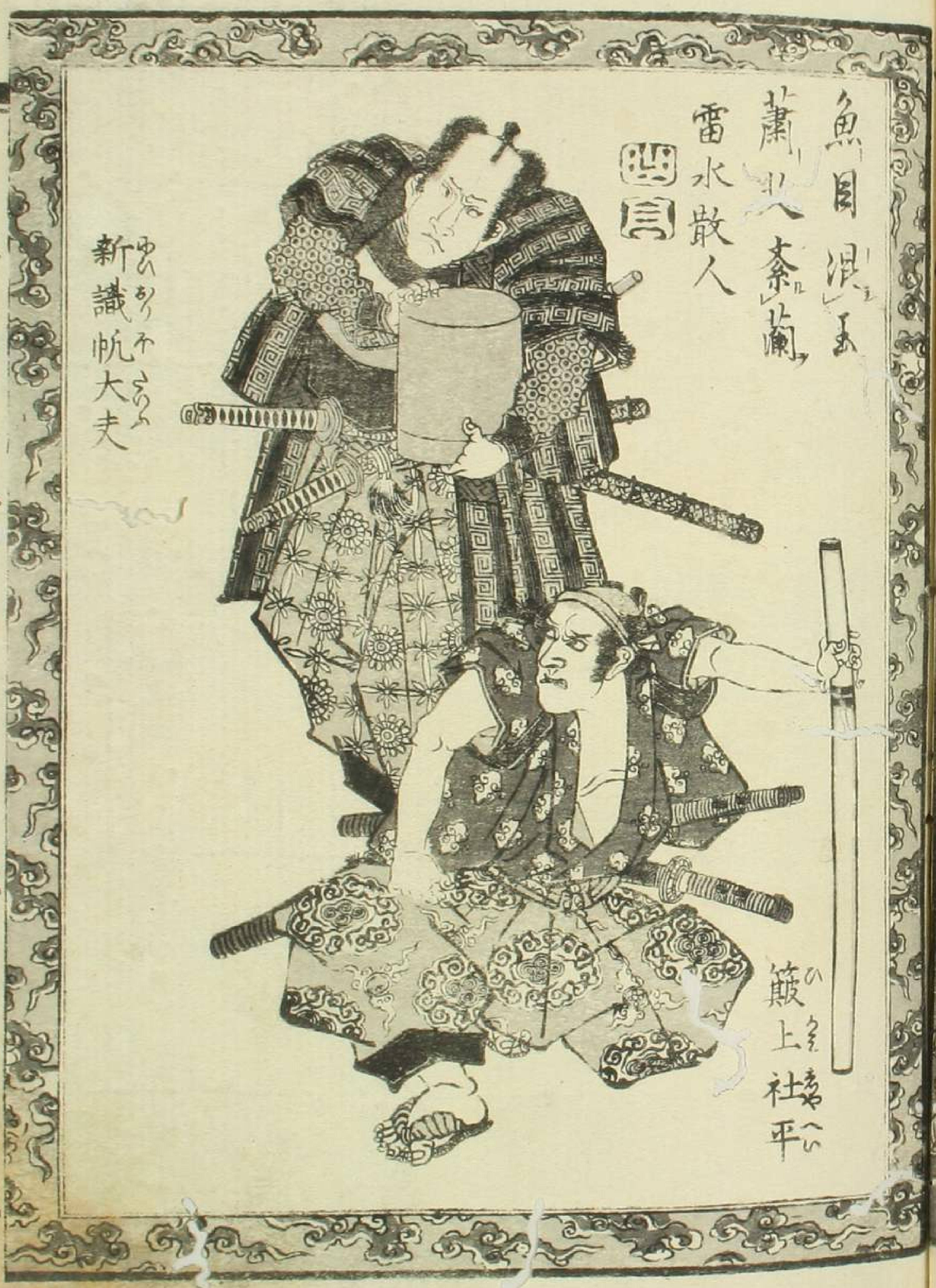
沼藺（ぬい）
大八（だいはち）



蕭々夜留
鶴唳湖湘
惟貞是烈
哀而不レ傷
芳流舍

戸山妙真
大先達念玉（だいせんだつねんぎよく）


命惟雖薄神靈自扶
琴嶺處士
古那屋文五兵衛


魚目混玉
蕭艾秦蘭
雷水散人
新織帆大夫（にいおりほだゆう）
簸上社平（ひかみしやへい）

一犬當戸鼠賊不能進矣犬乎犬乎勝於猫兒似虎

ぬすびとの夜をもる犬は猫よりもあたまのくろきねずみはばかる

鶇齋閑人狂題

南總里見八犬傳第四輯卷之一

東都　曲亭主人編次

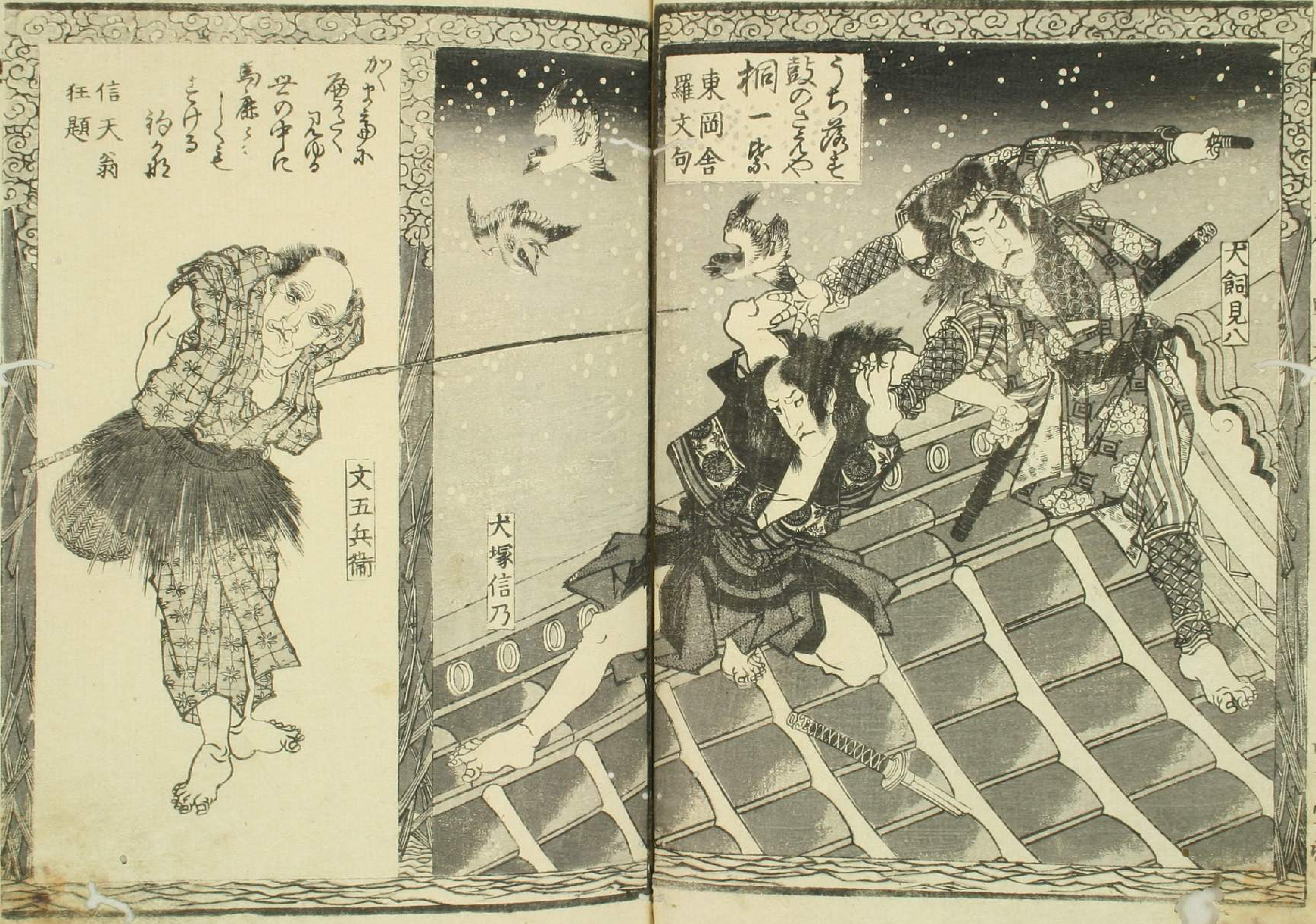
第三十一回　水閣の扁舟両雄を資く　江村の釣翁雙狗を認る

いにしへの人いはずや禍福は糾纆の如し。人間萬事往として塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所将禍の伏する所彼にあり此にあり。とはいへども豫これを誰かよくその極を知らん。憐むべし犬塚信乃は親の遺言紀の名刀心に占て身に傳り。艱苦の中に年を經て得たる時を過さずとて滸我へ齎して名を揚家を興さんとせしが。その福は禍となりかはりたる村雨の刀は舊の物ならざりしかば。身を碎く讐とぞなりし。憾をまくに釋よしもなく。綷急にして意外にあり。僅に當座の辱を避ばやとおもひたるに戰の圍を殺開して。芳流閣の屋の上に。

攀登れども左右に脱るべき道のなければ其処に必死を究めたる心の中はいかなりけん想像るだにいと痛まし。されば又犬飼見八信道は犯せる罪のあらざりしに月来獄舎に繫れし。禍は今恩赦の福。我が縛の索解て人にぞかゝる捕手の役義犬塚信乃を搦めよとて。愬に擇出されつ。他の憂を自の面目に今更用ひられんは願しからずと思へども推辞て許さるべくもあらぬ君命重く。弥高き彼楼閣まで三層へその二層めなる檐の上まで身を霞せて登りつゝ見まはせば足下遠く雲近く。照る日烈しく堪がたき旹は六月廿一日となりにけり。乾蒸の鬱熱をさへたる敷瓦は凸凹隙なく。波濤に似て下には大河滔々たるに。生死の海に朝る潮洄は名に負ふ坂東太郎。水際の小舟揖を絶て。進退既に谷まりし。敵にしあればいづれ繫留んと縋の樹侍ふ如くさゝくと登果る二層の屋背まで目紫翳しもなく迭に遠を窺のみ。疾視あふて立る形勢。浮圖の上なる鸛の巣と巨蛇の竃に似たりけり。廣庭には成氏朝臣横堀史在村に老黨若黨圍繞せし。牀几に尻をうち掛て勝負怎生と向上る。亦只閣の東西まで身甲したる許多の士卒鎗長刀を晃めかし。或は箭を肩ひ弓杖突立組で落なば搦留んとて項を反しつゝこれを観る加旃外面は縣連として杳なる河水遶りて舟を浸せば借使信乃武芸長發力衰へずとも見八に提得らるとも墨氏が飛鳶を借さずは虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲梯なければ地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも羅に入りぬ獣ならずも待場に在り。三寸息絶ざれば繂まで休ん脱れ果じとおもひ定めける。當下信乃おもふやう。初層二層の屋の上まで追登らせとせし兵を砍落しつる後は絶て近つくものとてなきに今只ひとり登来ぬるぞよに勇しえある力士ならん這奴は是膳臣巴提便が虎を暴にする勇あり欲又富田三郎が鹿角を裂く力ある欺遊莫一個の敵へ引組で刺迭へ死せるに難からん

あるよりは。敵にもそのぎをしらしめ且目に物見せんと。血刀を袴の稜もて推拭ひ。高瀬の如き方桴に立て。儘に寄するを俟ば見八も亦衆に異なり。彼犬塚が武藝勇悍素より萬夫無當の敵なれば然りとても擒にし難く他の援を借るときは獄舎の中より。この役に擢出されし甲斐もなし。擒捕るとも撃るゝとも勝負を一時に決せんものと。おのれのみにけふ些も擬議せず。御諚ざふと呼びかけて。合する十手を閃して飛が如くに方桴の左のかたより進登りて組んとすれども寄つけず。おそろしかるを鋭大刀風に響を發し。と受留て拂ば透さず數刀尖を挂て流を一上一下。寄る甍を踏駐て頻に進む捕手の秘術。彼方も劣らぬ手煉の働き。山岌よりおとゝき大刀筋をあちこち外を虚に實にいまだ勝負を判ざれば廣庭なる主従士卒ハ各手に汗握ざるもなく。瞬もせず気を龍てみるめもいとゞ向へる程に犬塚信乃ハ侮られし見八が武藝に敵をなしけりと思へば勇気弥倍て。刀尖より火出るまで寄ては返し。

大刀音ハ破戸。両虎深山に挑むといへども鏘然として風發り。二龍青潭に戦ふ時沛然として雲起るもかくぞあるべき。春なれバ峯の霞歟夏なれバ夕の虹歟とまがふ可あるいは高閣の棟にして死を争ひし為体よのつねに未曾有の晴業なれバ見八も被籠の鏁肱當の端を裏欽やそでに切裂れしかど大刀を抜まで信乃ハ刀の刃も續けで初の浅痍を肩ひしより漸々に疼を覚れども足場を揣て撓おぼえず畳うけて撃る大刀を見八右手に受ながら。かへさで拳につけ入りはやッと被る声と共に眉間を望て礙と打十手を丁と受留る。信乃が刀ハ鍔際より。折て遥に飛失せしかば見八得たりと無手と組む。その随左手に引著て迭に利腕捷と拿やすき撲倒さんと曳声合して捩ぞ捩るゝ。ちから足。此彼齊一踏辷して河邊のかたへ滾滾と身を輾せし霹車の米苞坂より落るに異ならず。高低險しき桟閣に削成たる甍の勢ひ止るべくもあらざれば。迭に合手たる拳を緩めず幾十尋なる



犬飼見八
犬塚信乃
文五兵衛

うち落も
鼓のさえや
桐一葉
東岡舎
羅文句

かくやまあに
庵らく
見ゆる
世の中に
馬鹿らゝ
しくも
さける
狗ろ杖
信天翁
狂題

屋の上より末遥なる河水の底には入らで程もよし。水際に繋る小舟の中へうち累りて撞と落れば傾く舷と立浪に汆と音を水烟纜丁と張断て射る矢の如く早河の真中へ吐出されつ。亦も追風と虚潮に誘ふ水なる回舟往方もしらずなりにけり。かゝりける為体に士卒等すく騒立ちて。是首級彼首級と罵る程に。閣中の番卒の窓より件の光景をよく認たりけれバ躬く云云と報つるになん。成氏等ハ且怒り且疑ふて霎時もわかず。みづから閣に進み入り窓よりして見おろすに。現頃日魚獵の為にとて外面に繋せし一艘の快船なり。只張断る纜の末は岸の杭に遺されたれバとて縡止べきにあらざれバ横堀在村下知を伝へて。俄頃に暫門を推開し。準備の快船四五艘に分配して士卒を乗せみづからも乗りて。艪を連ね楫を操して飛が如くに追蒐されど今ハしを時移りぬ。二三里が間にハ影も猶見えず跡も猶認めず。この河一條なる

あのうち。吻に他領へうち入りて人を捕んハさすがにて。権威に誇る在村も今更早に施すべき計あらねバ。徒に怒を移して士卒を罵り其処より船を返しつ。さて成氏にまうしけり。信乃見八が陥りし船を追留ざりしかども。彼木へ数刻の苦戦に疲労しく贐高閣の棟より組ながら儘に落されて肉傷れ骨摧けて死ざることハゆるさじ。そのなれる果を見究めざりしハ遺恨なるぞ。彼河下ハ葛飾なる行徳の浦に出。其処より南ハ安房上総北ハ武蔵の江戸。芝濱或ハ水戸浦銚子口半ハ御方の地にしあれバ索求るに便よし。再び士卒を遣して水陸共に穿鑿せバしらるべうものをといふに。成氏等うち領き汝が臆念予が意に称へり。されども纔に一個の癖者所以に鄰郡を騒すべからず。是侮を招くの端なるぞ。よし他領よりうち入るとも。しのびくに往方を索て信乃が存命さらんにハ計略をめぐらして。縡穏便に搦捕せよとくとのたまへバ在村ハあらぬ果て

遽く退出ぬ。本藩の武者頭新織帆太夫敦光を追捕の大將に撰定めらく。件の君命を速傳ふ。癖者信乃が相貌ハ和殿よく認りつらん。又その武藝剽技ハ和殿のよく知る所なれバ容易捕物ならぬぞ。ちからを極めて征せんより。智をもてものせんと謀るぞよろしけれ。縱渠船中にて死するとも。その首級捕て進らせるべし。駿馬の骨を買ふに勝ん。縱日ハ暮るゝとも通霄路次を急ぐべし。遅さえて罪を得らるゝなと嚴に掟しかバ帆太夫うけ給はりて異議に及ばず。俄頃に行裝を整へて。日ハ西山に傾く比。軍兵三十餘名をゐて。滸我の城下をうち立ちつゝ坂東河原の下流に添ふて葛飾のうらに赴けり。不題下總國葛飾郡行德なる入江橋の梁麓に古那屋文五兵衛といふものありけり。渠ハこの土地に年まそる居停主人なり。妻も一昨歳身まかりて。子ども只二人あり。冢子の名を小文吾といふ。今茲ハ既に九歳ありぞ。身長ハ五尺九寸。宍堅く。骨逞しく。膂力ハ百人にも敵すべく。器量ハ絶て市人に似ず。性として武藝を好ミ。総角の比よりして親に隱し。友に離れ師に就て拔を磨く程に。劍術拳法相撲の手まで習得ざるものなし。その次ハ女子にて十九歳になりぬ。その名を沼藺と喚れたりしを。年二八の春の比。鄰郷なる市川の舟長山林房八郎といふ壯佼に帰ぎしが。その年の尾にやゝ男児を産りけり。その大八と名づけたる。今茲ハはや四才なるべし。さても這文五兵衛ハ貨殖の吏に疎けれバ。その家素より富饒にあらねど。足ることを知れバにや。衣食の欲寡しく。暇あるをりをりハ入江に立て。釣するをのミの楽なりとおもへり。時ハ文明十年六月廿一日。この濱邊なる牛頭天王をうつし祭るよし。あかく日ハ江山に没るころ。里人浦人うち雜りて。船に神輿を乘まゐらせ。濱邊澳邊を漕廻しつゝ。吹鼓儛踏てさまざまに疫鬼を禳ひ。或ハ海の幸を祈す。或ハ塩濱の繁昌を禱ること。土地の恒例なりけれバ。戸毎に酒を置て遊樂に暇なき日なれバ。文五兵衛も

さほどにも耽らず。客店のるすにしあれば日間は特に徒然て、祭祀は曛昏よりなれば書寐して倦んも無益し。霎時なりとも楽んとて釣竿を携て宿より入江に立出つ。蘆を折布きて坐を占て餌を串鈎をおろせしかども時は下晡に近つきぬ。虚潮の最中なれば小鱗ひとつの獲もなけれど好む事とて立も得去らず。夏を忘て浦風に蘆葉戦ぎて夕陽の影を紊し。水や天なる走帆に沙鳥も飛らく。江山の雲に入る。江に臨みて石に坐まるとて萬事只無心なり。竿を揚綸を垂てとて三公にも換じと古人のいひしも宜なるかな。一波動けば萬波皆従ひ細鱗踊りて巨魚あるを知る楽いまだ央ならざるに。ふと見れば、あなたより放舟潮に引れ波に揺れて河源より流来つ。水澪木に堰れて招くが如く、こなたの岸に著たれば。舩中に両個の武士あり。此彼倒れて死せるが如し。かゝるものをまつらに置ば土地の煩労あるべしと思へば竿をとり直して衝流さんとて熟視るに倒れてある一個の武士は茶褐色なる麻衣に縹色なる麻袴の下折揚て臑を顕し。頭髻を乱して齒を切り。左の肘と右の股に負たる浅痍二个所あり。又倒れてある一個の武士は細鏁の著籠勒肚あつく平金の篠籠手に亀甲入たる脚楯あてたる。[illegible]を切裂れて。是も左の肩尖に浅痍一个所負たるが月額の迹長く伸て髻結断離し鬢の毛の紊れて顔にかゝれども右の頬尖に痣ありて形牡丹の花に似たる。是なん豫て認るその人ならずやと思へばうちも措れて怪しみ、繂乃為体に。うち騒ぐ胸を鎮めて江水に引くその纜に釣鈎をうち掛て。やをら手下に引よせて汀渚の石に繋留め、躬てその舩に乗移りて又これ彼つく〳〵と見て倩想像るに氣息は絶るが如くなれども正しく死べき深痍にあらず。舩なる人と戦ふて両人共に砍倒されし欲。さらずば此彼戦ひて齊一倒れしものなる欲。呼活[illegible]縁故を知る[illegible]頬に痣ある

人を抱起して。声高やかに呼いけ勤れども。さらにやゝしばらく呼吸復らで困じ果て又臥させしめ躬づから宿所へ走り往て薬を取て来なばやとて立とせし程に。素肌なる倒れし武士の腹膣をしたゝかに踢ければ。死活の法にや称ひけん。忽地に云と声立て。身を起して四下を見かへり。抑こゝは何国の浦ぞ。和殿は亦是何人ぞと問れて驚く文五兵衛は小膝を突て額きつゝ。戍る処ありて呼活らる。その人はさもあらで識らぬおん身が生て存欲あらんは下総葛飾なる行徳の入江なり。某は是里の旅店文五兵衛と呼るゝものにて。この蘆原に釣をせし折。この舩へ流れ寄たり。その頰尖に痣ある人は。滸我の御所なる走卒。犬飼見兵衛ぬしの一子見八信道なりと豫て認めたりし。われはうちも措れず。舩を引よせ。扶させまゐらするに勤る程に。おん身がやうやく生かへり。同藩中の朋輩なる鉄舩に倒れてよりてうちまで。流れ来ぬる故。その事の顛末をいはぬぞやと問へば。

ながく嘆息し。後難を憚て苟も偽飾んと欲するは。武士たるものゝ本意にあらず。いでや真の實を告ん。某は武蔵の江戸にちかき大塚村に由緒ある郷士犬塚信乃戍孝といふものなり。祖父匠作三戍は成氏朝臣の兄におはせし春王安王両公達に傳へまつりて結城にて戦歿なしたり。父犬塚番作は深痍によりて行歩かなはで廢人となりしかば舊領大塚村に退隠し。齢四十五歳にして文明二年に身まかりぬ。そのとき吾儕は十一歳なりしを伯母なる丈の家をあるじに年を経て。此度滸我へ赴かん。親の遺言なればぞ。彼公達のおん像見まつる村雨の名刀を。祖父匠作より相傳して吾儕まで三世に及べり。時到らば滸我殿へ進らせよといはれし親の志をいかで嗣んとおもひて。年来守りて腰にはなさゞりき。なれば時を得てしかなど滸我へ齎せしに。豈はからんや件の宝刀は人の為に抜かへられて。見參の日に知るものから。許るよしもなく敵がたよりの間諜者歟と疑れしかば

わが身の薄命。虚実も糺さず狐疑ふかき横堀史が下知に従ふ当坐の力士数十人生拘んとてむら立たり。これ阿容々々と手束て縛を受獄舎に繋れ。無実の罪に命を隕さば。わが身ひとつの恥ならず父祖の名をもけがすべしと思へば危窮を脱れん為に已ことを得ず血戦して広庭に走出檐より檐に伝ひつゝ。いと高き屋の棟に登りて且く息を吻く程に。この犬飼見八と喚る和殿によりてその名を知りぬ。只ひとり追登来つ。時移るまで挑戦ふに。大刀竟に折れしかば。引組で撲あふ程に。齊一足を踏辷らして組たる儘に外面なる大河の岸に繋ぎたる舩中に落にきと思ひしのみ。その後をしらず人も我も息絶て流されてこゝに来ぬるを今さらおもへば落ぬるときに。その纜は張断て潮のまに〳〵流されけん。不思議といへば。是のみならず初戦にはそれとしも心つかざりし。今見八が面部の痣の牡丹の花に似たるを見れば。それ歟と思ひ合さるゝ事あり。わが故郷なる

大塚に糠助と喚れたるいと貧き百姓ありけり。わが父いまそかりし時間ちかく住しかば朝夕に左右につけて疎からず。父なくなりて後はわが孤になりし我を憐に忠心大かたならざりしかば。これも亦誠ありて安らぬとのみ思ひしかくて件の糠助は。去歳の七月某の日に時疫に染て身まかりぬ。これ又その折々に聊薬餌の料を贈りて。老病貧苦を資る恩を感じ。義に仗てやその臨終にいへることあり。その言は如此々々の箇様々々と。糠助が安房を追放せられし比行徳の入江橋より嬰児を抱きて身を投んとしたる折。武家の馬脚に推禁られその諭により。乞食に任して纔に二歳の一子をその人に贈りて。事の趣を説示し。当時件の武家の馬脚は成氏朝臣の御内人と伝へらるのみにて名字を問ず。糠助も亦名告らずして。そのまゝに別れしとぞ。かゝれば親子再会のよすがあらじ。されども糠助が子の乳名を玄吉とぞ名つけたる。その生れながらにして右の頬尖に

痣あり。牡丹の花に似たりといふ。今この犬飼見八が面部の痣もその形これ彼符節を合する如し。只是のみならず、糠助が子を養ひとりし一件の趣は君命を稟奉り。安房の里見へ赴きしかへるさまあれば、私に稚児を携へて、このところの定宿ありし家あるじに相譚て、其奴に預置、再び迎とるべしといひおかれしものありと聞り。和殿はこの地の客店なるこの見八を豫てより認りといへば、八も亦そのおもかげを、この地なる證にもなりぬべきのあれど、その人なくば誰かなるべき。見八が祖父は鎌倉の持氏朝臣の舊臣なりし。彼糠助はこのよしをよく知れるのみならず、吾儕一時到りて許我殿へ参ることあらば、その子は今も彼御内にありやなしやを訊ねてぞといひ送せし。人の恩愛情義にはいまも亦感悟せることあれど、外のことならねば此度彼処へ赴くからに、親と友との遺言を果さんとのみおもひしに、持氏の宝刀の仇とぞなりし。玉を抱て罪なく咎あり。とまでに憂をいふにせん寄る人にはあらねどもおもひものから、祖鞭をせしまゝ生てその人死せり。親の為には不孝なるべく、友の為には約束負くに似たる命運の程なるべきのみならず、かくの如く訟の庭へ牽るゝも引まゐらするにもかくふも土地の法に任して行されとこそいふ覚期の言語爽に、撓ぬ勇士の面魂に、さしも五兵衛は感嘆しつゝ、小膝を礪と拍、吁和郎は是孝義の人なり。訟の庭へ牽べうもあらず、土地の法に行ふべくもあらず。目今和郎が物語は吻合するもあり。糠助男と五兵衛が名は夢にも識ざりしかども、許我の御所なる走卒、彼犬飼見兵衛ぬしは里見殿へおん使に往返毎に、わが家を定宿にせられたり。今僂れば十七八年歟十九年の昔なりけん。実事件の見兵衛ぬしは、われらも亦彼処の橋のほとりにて、餓疲たる行人が稚児を抱つゝ身を投んとせし折に渡りあはして、推禁め親ゆへ些の路銀を取らせ、その子を購得て、又わが宿所へ立戻り、その子を預置しるは、わが家子小文吾が生れし次の年にて、わが妻の乳の多

かゝねバ須守し甲斐ありて彼児もよく肥たり。かくて一ケ月あまりを歴て見兵衛ぬし又をり〳〵ハ来て件の児を迎とりし児宮より懇切なるめぐみおはしく年始に状をおくりおこせ迭の音耗疎からず子どもの安否伏訊問まさく殿の年を經る程に一昨歳の秋の比見兵衛ぬしハ里見殿へお使をうけ給はりてその奴あまたにその子共侶わが家に止宿したる折宣ひけるやうハ既に老たれバなかく役義を勤かねて拙郎見八に見習せばやと思ひて横堀殿に請まうして從者にしてゐて來れり。寔ハ丈夫なりけるを和殿夫婦にしらせん為ぞ。渠總角の比よりして文書をだ武藝を好めバいとをさなくより二階松山城介ぬしの教を受て弱輩ながら抜卒の高弟と稱せられ就中拳法捕物ハ藩中無双の力士といはるゝそハ官名欽知らね共此二八得ころをもあるべし。この子を養ひとりし時内室の乳をうけて字育まし恩義ありかばその子息小文吾とハ俗にいふ乳兄弟にしてその年歳も同

じかるべし。且小文吾も武藝を好む故に筋骨の逞しげなる膂力もさこそと推るゝなれバ此と彼と好む所も相似たり。彼に兄なく是に弟なし。ちなみに忘れがたき為に小文吾と見八と兄弟の義を結せなバ久後までも憑しからん。和殿の心いかにぞやと問れて某一議に及ばず。妻に告子に告て躬くその意に任しつゝ聊酒宴の席を開きて勸盃の義をとり行ふに見八郎ハ長禄三年十月下旬に生れたり。護符書袋にその生れし日の正しき書札ありといふ。わが子小文吾ハおなじ年の十一月に生れしかバ一个月の遲速あれども長少の順分明なり。かくてその詰朝犬飼親子ハ辭我へて還る餘波を惜まざるほどにわが妻ハいく程なく持病の痞さし積くなりて果敢なく世を逝りし。見兵衛ぬしも去歳の夏病にかゝりて一旬あまりにこれも黄泉の客となりぬと風の便に聞えたり。さればこの両人ハわが子小文吾が義兄弟なりわが子ながら小文吾ハ善よく與し義に進めバ里の壯佼長とさし違るまでで侠

氣遅し。渠めし穴のが何とかのかれなるべき。縁故を案ずるに。おのれ素より悪心なく。彼の人を害せしにあらねども。この人も亦怨あり。おのれを擒んとしつるにあなれバ彼が戦ひしハ君命なり。おのれハ囲みをうち破りて難を避んと思ひしのみ。その私の情あるにあらず。おのれハこの為人の実父なる糠助とかゝりに恩義あれバ。さらバこの為人ハおのれ身にありて實父の亡人を巨細に知たらんにハ。君命なりとも辭しまうして捕手の役にハ立べからず。おのれも亦さつなならん。始よりこの為人に名告あれバとも。豈組搫しく高閣より轉落るに至らんや。さらねバそもあれ戦ひて緯のなかに及べるハ只是過世の業報なり。初より呼結し見八とのハ生もせで。おのれひとり甦生せしそも命運によるものなれバ。今さらに誰をか恨ん。人にあふまじくねてそ幸ハなまじ陸より走りて影を隠し。後日の崇を脱れバこの亡骸ハ人さまかけぬ。さらバ子小文吾によしを告ぐ。ともかくも葬るべし。さて其人とのそふせバ信乃ハ仰のけて頭をうち掉り。義理著明なる和殿の教解好意に惜るに似たれども。これ疎忽にて村雨の宝刀を人に抜かへられたるをのハ。釋に證なくて。竟にかゝる殃危を醸せしに。今更逃て大塚なる伯母夫許立かへらバ。人我の御所にて阿容々々と擒捕るゝより。なほ恥べき人の人たるべきものハ。仁に本づき義に依て。只よく恥をしるべく。又且和殿が物がたりにて。この犬飼見八ハ糠助が子なりける名告あれバこそ定かに知れり。知ざれバ是非もなし。知りて見すてんハ存命て一旦諾ひし糠助が遺托に負くといふべき不義。百年の壽を有とも不義の奴といはれて。世に立べうもあらずかし。たまたま男子と生れながら。國の為人の為に功もなく徳もなく。志を遂ずして十九歳の今を一期に狗死をせんハ憾べき限りなれども。薄命の致す所。いかにともせんすべなし。吾儕ハ甚より憑しき親族のなきにハあらず。大塚なる荘官の小厮額蔵といふ男と年来竊に義を結びたり。是異姓の兄弟。その本名ハ犬川荘助義任といふめり。

とも倘この人の情あらバ。かゝる折り果るまでに人飛濳中に渠に告て。己が腰刀ハ許我に措ぬ。名ある刀まで郷間に折れたりせめてこの見八が刀を借まく自殺せバ。死る人をも欺ざる誠をあらハさんと端ともおもハさへなく右手をさし伸て見八が腰に挿たる刀を取て拔んとするを文五兵衛推禁めのたまて鍾理りあらだかくまでに道を立て義に一向なる人ハ復るゝ。さも可惜しき壯佼を死んとのかして殺さんや且この刀を放あへのなくてまた情よ似たくあらくに情あらし見八共倡甦生せバ和殿を労する迄もなし再び勝員を決まるも無二の友垣結ぶべそれその時宜にてそよらめかうなりなる術もなし。これも亦男子の禁らるゝと言までなく其氣退さじと振拂ひ刀を晃りと取る備して肚に突立んとする程に死せりと見えし見八ハ忽地岸破と身を起して左よ結めし大塚生ぞ。あり待たれと呼かけつ信乃が利腕引禁ると見えもせず。久しき信乃よのえ。文五兵衛ハ敬驚呆れて眼を睁り肘を張りながら鼓と吻息ハ浦風よりもあらかりき。

第三十二回　捬擢を除て少年號を得たり　角觝を試て修驗爭を解く

當下信乃ハ貌を改めて。たひけるハ犬飼生縲絏けんと思ひしにかの程あり甦生して今幾條の問答を側に聞て某が自殺の刀を禁る欽と向バ又文五兵衛も反せし胸を撫おろし。郷間のおもひく叫活つ抱起し勧すし。心盡しの届ねバうち歎きてありけるに。酔る人の醒るが如く。醫師もいらで無造作なる甦生にこそも安堵たり。心地ハ何ともいかがやと向バ見八うち点頭ありなれしも理ぞ要時えとをこそ彼に。物をおもハせころゆそよふ恐して舊識良友けふこの入江に流きよる蘆分船の中ふして齊一面をおはせと不思議といふもあまりあり。鳴呼賢なるかな犬塚ぬしと言つゝ義を重く其肺肝を知ればこそ卒ふに禁めまさらでこの刀を措なといい取て鞘に納め喃大塚主古那屋の翁。今猛に身を起せしこそ為る体の憐しいを詳

しく思ハれけん。郷に某芳流閣の棟を踏外して落ぬるを、水際の舟に受られしと云ひし。後ハ見れど、ゆめもあらず死して、この江に流れ寄しを告るが如き人ありて、おのが枕邊に立と見ハ。わが親の名とおのが名さへ喚ぶにうち驚れて、稍人ごゝちつれしかど、覚も得果ぬ夢に似たり。かくて心を鎮めて、そのゆゑよしを詳に聞けれバ、犬塚ぬしの孝心義胆、古那屋の翁が誠諌辨論、彼幾條の問答ありしよりて、自ら人の又身ハこの舟に訪れてまいれ、行徳の入江のほとりなる年来相識る里老に見出されて、死して復され、生に死と知るべき人の誠を身にしられバ、感涙坐に胸に満て、端なく挫かれハ、恥し辞の腰を折んより、言果るまで聞てんと思ひ、そゞろに臥て、えをかゝりし程に、犬塚ぬしハ道を立、義に仗て自殺と見えて、為体に驚遽て身を起し、剔らしくも禁めうちそへられしにも、犬塚ぬし和殿に、かやまく某が実父のうへを知る故に、今君命を外にして、おのが私を厚かましく烏滸のものとおもひなんぞ。やがておのが上を詳に告ん。某が親見兵衛ハ微祿卑職のものなれども、生平に陰徳を宗として、偽飾ることを好まざれバにや、某をいはけなき兒より養ふて、取乳を求て字育れし、その恩ハ實の親に異るべくもあらず。見えしかど。おのれが東西を知る比より、螟蛉児なるよしを、苟且にも隠さず、ある時二親對坐まく。吾儕を膝のほとりに召よせ、初吾儕を養ひとりし縁の趣を説示し。おとど実父の像見とのみハ、今しも腰に著させる護符嚢のことぞ。内にハ物さへなくありし臍帶を巻こめし紙の端に書記せり。長禄三年十月廿日誕生。安房國の住民糠助が一子玄吉が産毛臍帯並に云云と識したり。女筆なれバ母の手迹ならん。あらずとも、実父ハ當初安房を追放せられて、迷出たるものなれバ、その往方定かならず。実母ハ當年身まかりしとぞ伝聞のみ。実の父母ハかくまでに薄命なるものを、そなたハ親の為又身の為に、成長て後よく勉て、万心なるのちぞと教訓叮嚀至けれバ、稚こゝろのものに悲しく、いと恥しく、形なく涙を包む拵の袖領に當れバ、けふぞかゝり。

廣れバ陜き心地して。安くもあらぬ勤なれども是によりていとゞくるしけれ。志を勵し給へ。二親の爲に疎にせず名を揚家を興さずハ養育の恩かへさんによしなく實父の恥を雪めかしと思ひにければ筆跡学問武藝ハゆるさず社友に後れじと習學びつ。螢を聚る夏の夜も雪を團ぬる冬の日も睡を破り飢を忍び只是親の爲とのミ。ゆるかくせざるハなし。斯行ふこと年を經て去歳ハ春夏三月が間に二親を喪ひぬ。よに人の憂ることハ親を喪ふ哀しミに又まさるものなし。哀戚の涙やゝ乾けども。待ぬ日数の立まゝに忌ども果て召出されて父の職を嗣させらるゝに又この春ハ役を轉じて獄舎長になされたり。そのとき某ハかなしむ。ことに亡父ハ慈悲ありて放生をのミなして。無益の殺生せしことあらざりき職役ハいとヨスなふつられその子として獄舎長を承けなバ(?)憂る且執權横堀史在村ハ權を弄び威を逞しく人を虐ること大かたならねバ罪なくして獄舎に繋れたる者多く命を隕すものヨスなり。さなきだにかのれう如きちゝらめて其残救ふとかゝるべからず縦職役なりとて罪ある人を罪するひとて呵責の笞を執んと忍びかねござふなんことが父も職卑く。譜第恩顧の御家臣あらず。今且轉役の義を辭しまうさんに聽されずハ身退くとも甚しき不忠にならねど又甚しき不義ならじ。養父母なるまでかゝりし日にあるが隨ふ旅路しく實父の所在を索ずハ不義なり。養父母既に世を逝ぬるに又實の親の存亡生死をとろにかけむハ不孝ならん退糧せんならくに年あまりと思ひつ躬一通の願状をまゐらせて獄舎長を辭しまうせしか。横堀史怒拒みて役も免さず身の暇も賜らず。上を蔑にする罪重しとて忽地獄舎に繋れて無慮百日あまりを經たり。かゝりしかども彼像見なる護符嚢を親としつ人に知さで且も口ハ二重のぞみをもるさまぞとや首を刎らるゝともさつれハ吞て肚の龍死んと思ひ決めしに。郷に猛き罪を免されし癖者信乃を搦んと異なる嚴命かくれば横さまな

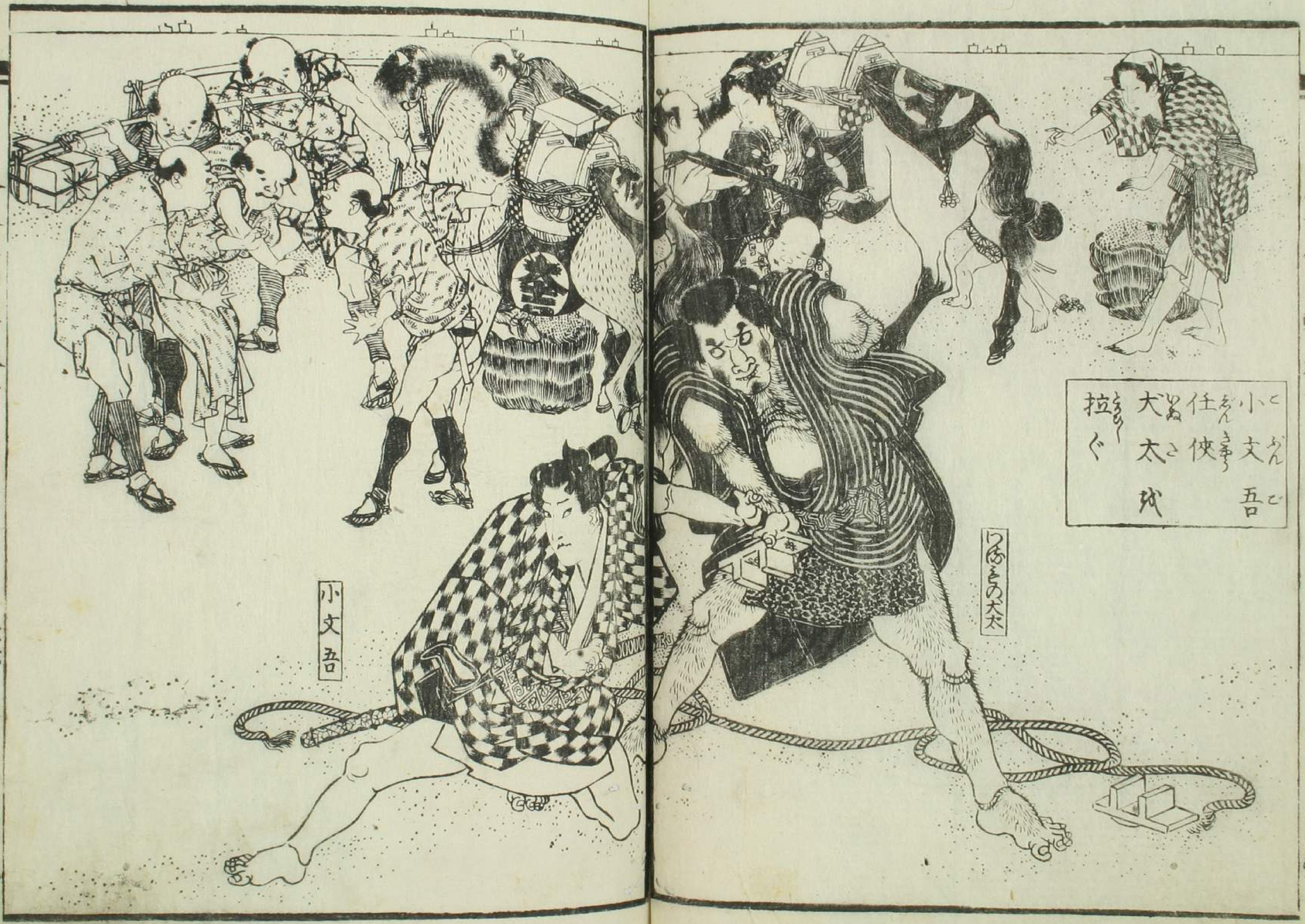
猜まれバ、是在村が奸智の所為欤。彼信乃が手を借て見八を殺さんとて謀りけめ。然とても逃るゝ道はなし、搦捕るとも撃るとも、只速に勝負を決して、不測の功を立るに至らバ、恩賞に身の暇を乞受、退去んと思ひしのミ。これが為には実の親の恩人なるを知らざれバ、頻に挑戦ひふきかりし。かのまゝに見八一殺されて欤、和君を搦捕るあらバ、迭に後悔臍を噬ん。嗚呼危れかも危かりし。親と親との精霊の擁護、神明の冥助もあれバこそ、組たる侭に船の中に落て、和君は危急を脱れ、某も亦折を得て、稍身退くのミならず、落たる時の疼痛もあらず、迭に命恙なく、こゝに素懐を遂ること、定にこそあれ幸なり。嚮には只その大かたを側聞つる親の事なる。なほ精細に聞まほし。犬塚ぬしと上坐に進めて、避る席もあらぬ船の、わきバなく外へ洩さぬ言の葉の、戦ぐともあらぬ浦風にのミぞ涼しき壮夫の心の底は見れたり。信乃は只管感嘆して、うち傾けし頭を擡、適に犬飼生、志あるものは准もかくてこそあるべけれ。和殿の実父の行状は一朝に説尽べうもあらず。その性となり老実なる木訥にして、仁に近く、絶て悪意はなかりし老人なりき。終焉は去歳の七月廿二日の暁天に、往生の観念いと愛たく、享年六十一歳と聞えし。長禄四年の比とかよ、安房の洲崎を流浪して、武蔵の大塚なる土民糠七とかいふものゝ後家の入夫になりしより、こゝに十又八年を送りしかど、その婦まで子もあらざりき。一年先だちて、一昨歳の秋身まかりたれバ、親族もなく、家財なけれバ、むかしハあらざめれど、彼人その臨終に窃に吾儕に託せし、只是和殿のうへのミ。往時安房の洲崎にて、和殿が生れし七夜の日に、糠助老人は因せし鯛を見つゝ、庖丁するとき、魚の腹に玉ありて、文字のごときもの見えたり。取て産婦に讀せしに、こはまことゝ訓む信の字なりけれバとて、是によりて妻の筆を把て、その誕生の年月と乳名と感得の玉のことさへ、紙の端に書つけさせて、産毛臍帯のそれ共に護身嚢に納めたり。玄吉は君と父に従ひまゐらせて鎌倉

よりて滸我ゆきてそ殺されけめ。護身嚢を失ひしかバ今なる不祥が身にあらんそれを證になるべし紛是ありしかど。といふまでその玉今もありやと問ハヾ。見八ハ遽しく膚に著る嚢の紐を解出しつゝうち披き。某竟に縁なくて。和君に名告あはざりせバ。実父のうへを斯までに巨細にしるよしもあらんや。月来獄舎に繋れても。護身嚢ハ身を放さゞりしかバ。その玉を失ふべき塵さへなきものをとて。にあるべきと回答しつゝかくて當に来らく王をさし示せバ。信乃ハ受とりつくづく見るに。隋王夜光ハ認らねど十五城にも換べけれど。宝ゆへぞと稱まし。見八ハ懐舊に泪堪ず目皮をおさへて。この物數にしいふべきあらねど。某が養父の名乗を隆道と唱ふよしにて。又某が名を信道と命けられたり。道ハ則養父の隻字。信ハ則この玉の文字をもて表したる。実の親の像見との意也。今ぞある玉の出現ハよしもなく奇しく且も恩人犬塚ぬし。和君の賜なりけり。といふに見て信乃ハ憶ずも泪ぐみつゝ額を拊。その和殿の言のごとくならんや。某も亦本意に稱へり。

過分の賞美ハ當りがたし。この玉を見るごとに親を思へバ。むかしありし又一條の奇談あり。某もこの玉に毫釐違ぬ珍藏あり。その玉にハ孝の字あり。原是母が感得して失ひしめしにちなみ。そのゝち母ハ世を逝り。父の身まかりけるとき死に云云の故ありて。与四郎と名つけたる家狗の瘡口より件の玉ハあらハれ出て。某が手に入りぬ。只この奇異あるのミならず。その玉を獲つる比忽然として某が左の腕に痣いで来て。形牡丹の花に似たり。尒後八年を經て糠助老人が遺言に魚腹より獲たる玉のこと。和殿の痣のことまでも詳に説示されたり。竊に思へバこの玉と又且痣に相似たり。これ宿業の致す所歟ならず。友犬川荘助も感得の玉こゝにあれど。その玉にハ義の字ありのまゝに義任と名告れども假に字を額藏といふ。渠ハ身柱のほとりより右の胛の下まで痣ありて。その形相同じかれバ。糠助老人が子もかれと異姓の兄弟ならんと思ひとすらまだ見ぬ友のゆかしき心地しつゝ。今その人と玉を見ることいよゝ過世あるを知れり。されバ玉を見るにて疑ひ

立地に氷解せんといひつゝ且見八に渠が玉を返し。項に掛たる懐囊の紐解披きて玉を視せ左の肩をおし祖ぬぎて。腕の痣をさへ見せしかば見八はつく〴〵とその玉を見る。痣を見るに。奇也妙也と唱歎して信乃と面を合することの遅かりけるを憾るのみ。竟におの〳〵玉を取て囊に納め項に掛て共侶に跪き天地を拝し。誓を立て彼桃園の義を結びぬ。文五兵衛は初より黙然として手を叉拱て此彼の物語をつく〴〵と聞てをり。今傍より二顆の玉を見るに[illegible]驚嘆して両人にうち對ひ。かくいはゞ鴻溝に似たれども犬子小文吾は。いぬる比見八殿と兄弟の約をなしたる趣は既にえや上にいへるが犬塚殿の儔にあらず。只その参て見兵衛ぬしの貌に任せしのみなり。今更なりといへば小文吾は犬塚殿にも過世ある歟。然らばこの盟約の席の下に與るべきものならん。渠も一顆の玉をもてり。その二顆の玉に似たる彼が玉には見れたる文字のみ異にして孝悌の悌の字ありき。素より市人なれどもあるべき名告さへ渠みづから撰定めて悌順と名つけたり。玉の文字を取れるなり。件の玉の出処を諦さば。聊又犬飼生の魚腹の玉と相似たり。そは小文吾が尚襁褓なりける時。食初の祝ひに赤豆飯を造したる。鰭物蔬物羹鱠形のごとく安排たる折敷を嬰兒に推すゑつゝ。飯粒を哺舐さすとて高盛の碗中へ衝立し箸にかゝりて滾々と落て輾ぶ物あり。取てこれを見れば件の玉也。原その碗なる飯の中にあるべき物ならねば。尤不思議のことなる歟。且その玉の美しく細小なるを愛ずるまゝ求て獲たる宝なれば躬て小文吾が護符囊に納たるを渠は今なほ秘藏せり。加旃小文吾は市人の子に似げなく總角の比よりして親に隠して武藝を好み力技そのことを長せり。かゝるものから年八ツなりける比なりけん十五歳なる童と相撲んとて[illegible]敵手を[illegible]投られども果は巳も尻居にしりて[illegible]葛石に臀を撲せしかば大なる痣の出來て年を經る隨消失はせず。痣は生憎に濃なりて形牡丹の花に似たり。なれどもこれらのことは奇異に渉るものにて人に告ざれば見八とのみもこのたびはなほ知らざるをもとめり。今にもあれ小文

吾にあかしく件の玉と痣を見せ給へりと真実もて密語ハ両人ハ頻に膝の進むをおぼえず。見八ハ信乃を見かへりて某ハいぬる年彼小文吾に対面して、その人柄を知るのみならず過世あらんと云つやく、ただひみざりしかど識らねども額蔵の荘助と共にまで四人同因同果の過世ありけん。よに憑しくゆといへバ信乃もうち点頭て徴妙くゆ文五兵衛老人令郎ハその勇力の捷るのみならず志も世の人に立勝りしるるうらん願ふハ詳に告たまへと問れて莞然とうち徴咲いふさてくるそもゆかし渠が武藝を嗜むと聊又因縁ありけると恥しれるあらず某が素姓をいへバ安房半国の主なりける神餘長狹介光弘朝臣の近習の臣那古七郎由武が子なり。当初山下柵左衛門定包が逆謀によりて光弘横死したまひしとき兄にて候七郎ハ金碗八郎孝吉が舊僕杣木朴平洲崎無垢三と戦ひて矢庭に無垢三を砍倒せしかどその身も遂に深痍を負て杣平に撃れたり。その時某十八歳弱冠にていまだ仕へず、且多病なりけれバ定包を撃べき志願もかなはず。母の舊里なる故のくに。この行徳に落留り後に客店となりに及びく家號を古那屋と唱初しハ那古の苗字を轉倒せしのみ。身ハ市人となりしかど父祖ハ武弁の家臣なりしさ拙郎小文吾ハ自然と武藝を嗜むのみ。渠身長ハ五尺九寸。膂力の限りハしられずなる。是コが子なるからくも知らず。昼裏にこの里に拗攞犬太といふ悪棍あり。その面顔ハ落蹓の舞乃如く手足ハ伊勢鰕の殻の如く。その膂力飽まで剛く心ハ悍しく曲めり。酒と賭博を好めるのみ年来浦里を横行して、きて慶べき家毎に或ハ銭を借り或ハ衣を借て返さず。その聊も債を促すものあれバ理不盡に打倒して銭を取せざれバ已まず。さる癖者なりけれども領主千葉殿の弓箭衰へて政事等閑なれバ訴紏ものもあらず。人皆毒蛇の如く怕れて彼奴が怒に觸じとのみ念じて避て遠き程にあるとし大太ハ醉狂のあまり里の真中に一條の拗攞索を引渡して索に紙牌を結さげて、この所を過らんと欲するものハ銭百文を出すべし。尚その銭を齎せず推て

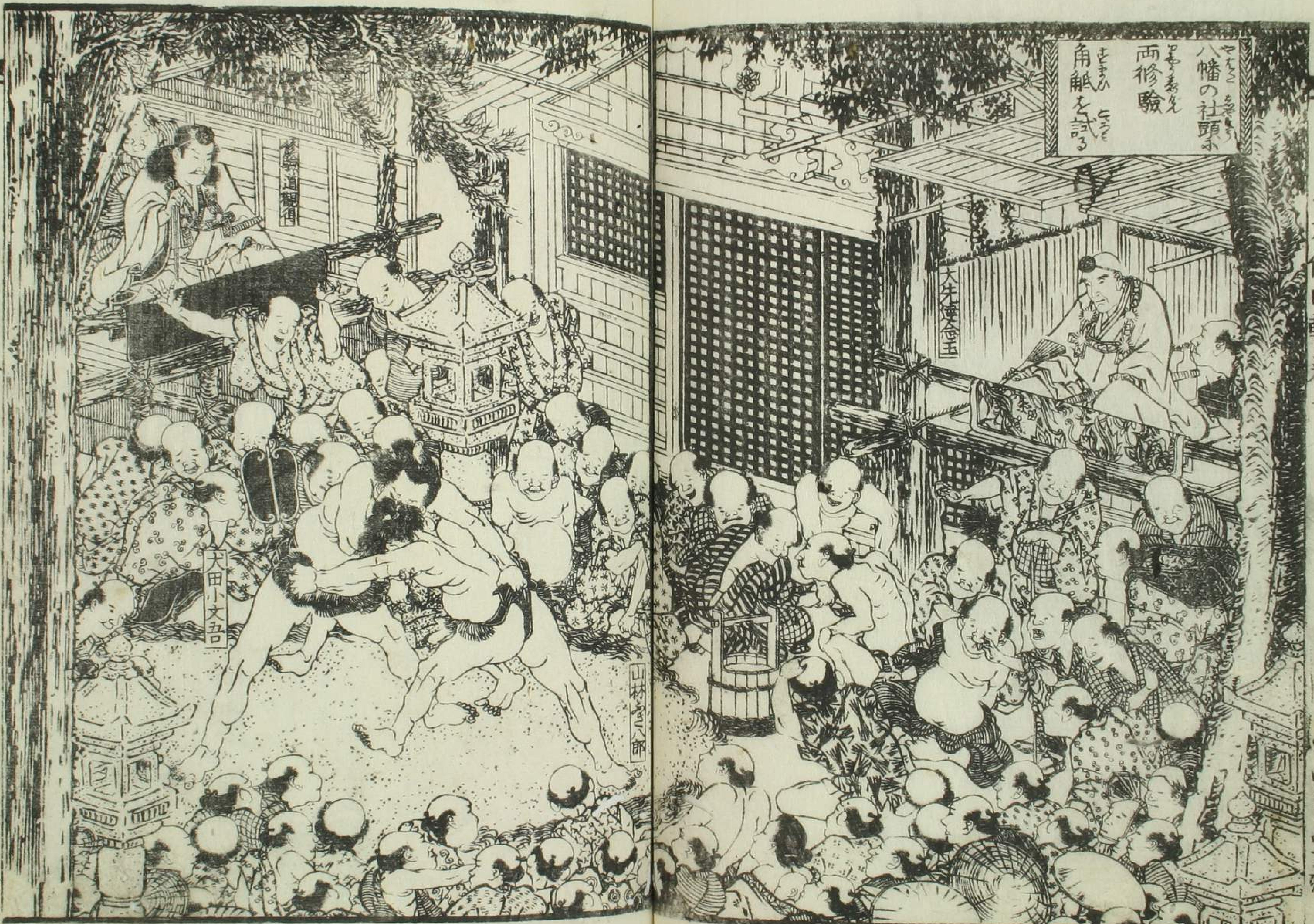


小文吾任侠犬太を拉ぐ

つゝもたせの犬太
小文吾

過るものあらば犬太が首を得させよかし。犬太は死すとも恨なしと筆太に書つけてその刃はその身よりまろき石に尻をうちかけてをり。是によりて人余途を去ねば殆難義に及びにけり。その年小文吾十六歳竊に犬太が悪行を憤り衆人の為親にも隠してひとりその所に赴きつゝ件の索を引断離て人を通さんとする程に犬太ら大く怒嘯て衝と身を起して遮留め栄螺の如く拳固めて小文吾が眉の間を撲んと進むを引外し足を飛して磤と蹴る。蹴られて犬太は身を転して忽地撐と倒るゝを起しもたてず乗しかゝりて中脘を蹂躙しかば。さしも小悍なる悪棍なれども。胸骨折けん手足を悶掻き血を吐くこと泉の如く言句も出ず死けり。当下立聚る里人等は小文吾が比類なき働を見て且驚き且歓びて感嘆の声を合して誉ざるはなかりける。さても彼杣櫂の犬太は当初鎌倉を追放せられてこの里へ来つるものなれば同類もなく妻子もなければ殺して崇はあらず。是により世の人は遂に拙郎に綽號して犬田小文吾と喚做す。太の字と田の字と音訓同じ。悪棍犬太を蹴殺して里の患を掃ひたる歓びのあまりなるべし。某は件の事を次の日人に伝へ聞くが驚きて拙郎を召つけ血氣の勇を箴めて教訓の辞を盡しゝかば小文吾ほどく後悔して刀を帯るとも抜ことゆめゆめせじ人と争ふとも毆ことゆめゆめせじと誓ひたる渠が孝心なる欽行心を改んと誓ひしは親をおもふものに似たり。かくて又近ごろ鎌倉に大先達念玉修験道観得といふ両個の山伏ありけり。并に我慢の悪僧なれば武藝を嗜み相撲を好めり。先祖は兄弟なりしが分れたる今なほ親族なれども年来先達職の所得を争ひて果さず。双方證の文書あれば両管領も今更に黒白を決かねて和談を勧められしとぞ。この事まゝ念玉観得は且くその諍ひを輟て譚をうくいともかしこき聲望ありしぞ。これ昔惟高惟仁同胞の親王宝位を争ひあひし時相撲の勝負をもてその甲乙を定めのひしぞいの至尊も争ひ果かねしが。例あるにならはずや。これを御辺も

相撲を好めり。所詮相撲の勝負なるのみ。勝るゝものハ所得を増し負るゝものハ弟子となりぬべしと熟談して。迭に誓紙を取かハし。遂におほく彼此に名ある相撲を募りけり。さる程に念玉坊ハ小文吾がことを傳聞けん。みづから这行徳に指来て。渠に相譚ひ。観得坊ハ小文吾が妹夫市川の里人なる。山林房八郎が。膂力飽まで人に捉れし拳法相撲を善すときゝて。彼処にゆきて相譚けり。件の山林房八ハ今茲廿二歳なり。川船數艘を斎て生活として。渠も亦総角より拳法相撲を嗜て既にその技に長たり。身長ハ五尺八寸。膂力ハ山をも抜くといふ。その名近國に隠れなし。さりながらその面影ハ優美なる壮佼にて。斯のみかハ恭礼あるまでも犬塚ぬしとよく似たり。所云他人の猿肖なるべし。かくて本月十八日の未明より。八幡の社頭にて件の相撲ありけり。東西に棧敷を掛わたして念玉観得の両修験従者と共にこれを観き。彼此の里人にも見せたり。行司ハ両家より一人づゝ出しぬ。初ハ小文吾と房八が弟子どもの小せり合なりき。その小相撲九番果て第十番ハ山林と犬田が結びの相撲なれバ。彼両修験の棧敷ハさらなり。観るものゝ唾を飲み腕を扼て勝負を呼吸の間に候バ。行司ハ左右の氣息に合して。ヤッと引る團扇と共に双方齊一立あがり。組ぐみ別ては反ひ外を抜し力も劣らず優らず半晌ばかり捺あふ程にこそありけん。小文吾ハ左を差たる山林が腕を閂りと振ほどけバ。足操被んとせるを。又背を礙と撲しバ。房八ハ両三歩走るが如く跌飛で俯しざまに倒れたる。娼しとやあなたまでも勝負に咄と被る声。霎時ハ鳴も止ざりける。是よりしく小文吾と房八と睦しからぬ某まで豫よりさるわざもあらんと思量て。ながく禁たりけれども。彼等も好む道なるに人の懇の推辞がたく且恡しかりけれど。いかでやまんと外聞を厭ふものなく竟に用ひず。愬なるもてけり。とまれかくまれ喩を果。相撲打出まで如浦邊のうちに笛大鼓の音やらで。けり。文五兵衛ハ見ざりつ。あるハ天止無益の話説に実が入りつゝ。両所の疲労ども顧ず日の暮るゝをも忘れたり。彼俚樂ハ牛頭天王の神輿洗の供奉船。この浦里なる祇園會も例


八幡の社頭に
両修験
角觝を試る
大先達念玉
犬田小文吾
山林房八郎

年六月望の日なれども。十四日より雨ふりければ。渡しかねて延しけり。さるが家には多くもあらぬ両個の奴婢なれども。この祇園會より三日の間身の暇を取らするが。なべて土地の習俗なるに。おのれも在ざれば。小文吾は神輿に隷て急ぐが。彼等は捿尻さるまでに。佚不楽とのみ唧めり。とかくする程に黄昏て。近えこゝりも路の程滑かに便よくありぬ。誘なへといひかくる。安からぬ身を起し先に進て陸に登らんとする程に。水際乃蘆を掻分て半身を顕す者あり。忽地に声を被て。汝は何ぞく膽の太えては千葉家の采地なるに。許我の御所と疎からぬに訴られなば祟あらん身の危きを知らずやと。呼禁られて文五兵衛は胸を潰して進もやらず。信乃見八もこゝまで彼の長物語に時を移して。他に聞ゆる人を知られしといと悔しくぞおもひける。畢竟今蘆原より猛に呼ばれたるは誰ぞ。其は次の巻に解分るを看て知らん。

里見八犬傳第四輯巻之一終

南總里見八犬傳第四輯巻之二

東都　曲亭主人編次

第三十三回　小文吾夜麻衣を喪ふ
現八郎遠く良薬を求む

信乃見八文五兵衛は今蘆原なる人に思はずも呼ばれて。三人齊一目をあいかにせましと躊躇程に。その人水際より下拉て艇に進み近つき抱へる袱包を左の方へ取なほして。頬かむりせし手拭を解て額の汗を拭ふて舷に坐て掛るをとく見れば。是別人ならず犬田小文吾なりければ。文五兵衛は呆れ果て腹立げに声をいり立。あな不覚なり白物が祭祀の神酒に酔たりとも場所もえらばで戯言して可惜膽を潰させたり。然とも和郎は義も理も忘まじ。この人々の仇となる底意ある故にかゝる口走りける歟と敦圉たくいひ懲せば。見八は後方より袂を扯て

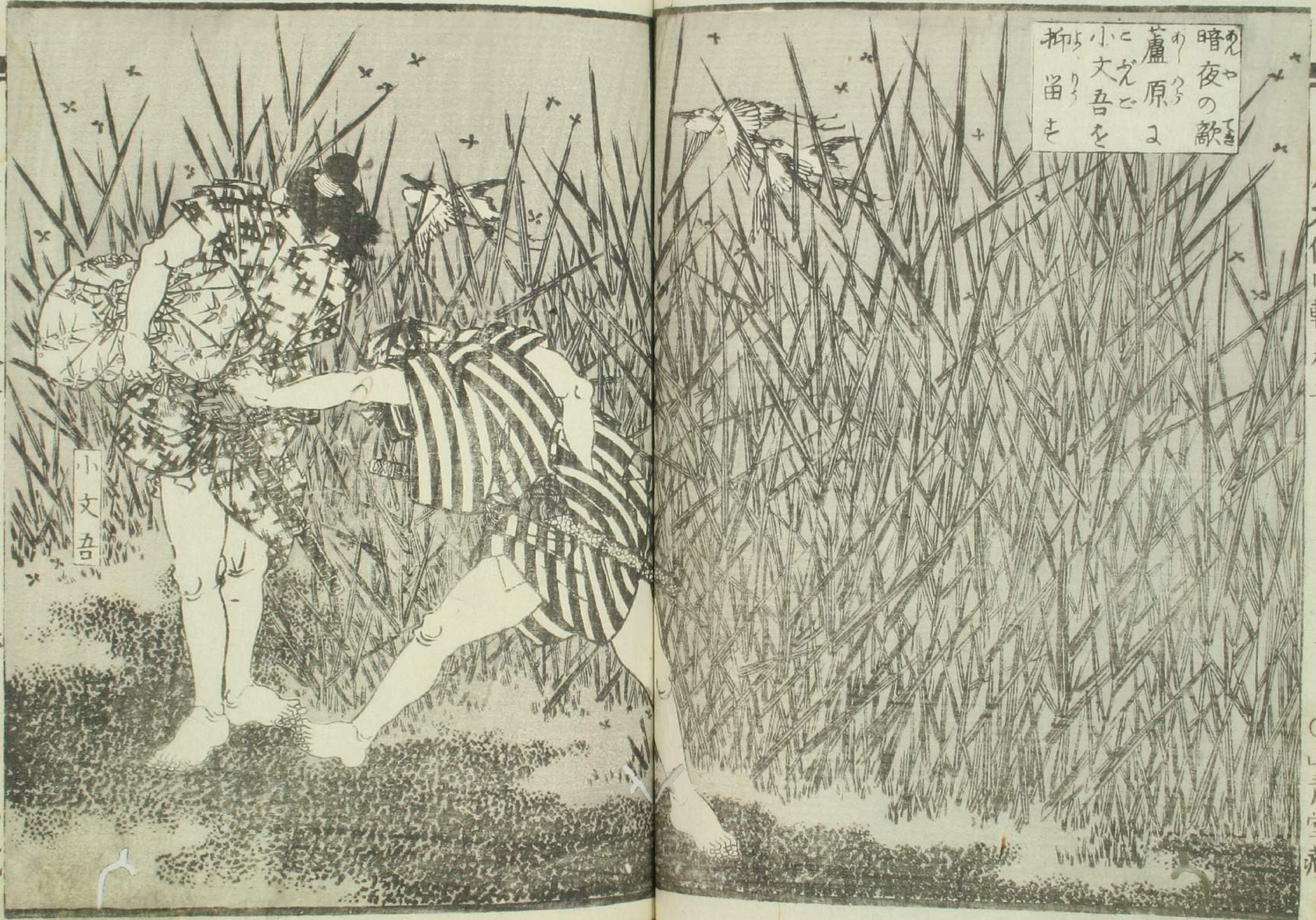
推禁め翁さのミな腹立給ひそ。他人に竊聞せられなバ俺們が生死存亡再びこゝに知るべからず。言長けれバ洩易し。と残諷諫の誠心なるらんと和解て艗に進出犬田生恙なれや苦楽哀歡幸不幸。ひとへにものせし長物語を。初よりまたや聴れし欲迎れるらやすに立在ながら。其処に在りとも出ましく躱れなりしハ故てそあら免夙縁盡ぬれど不慮の再會ぬかされ甦生ハみな大人の恩恵なりそとひみけて遽しく信乃を見くはりあへ小文吾にゆゑと引あはせ進て近づき大哥なりなる渡りなる某へ犬塚信乃戌孝とゆゝとめ尊大人の物語よく過世なるべき由を知るれバ初對面とはいはれ既も現因もなく縁なくいはでも大人に邂逅しく再び生るることを得べき況和殿に遭べし病雲時なりしとこの船に乗てよく相譚なりしと請勸れども立もあぐらも某漫に声をふけく親に戯れ刀祢だらを驚かせしハ非礼なり。緯醉狂に似たれども諺にいふ壁に耳あに乗る高声話説ハ老なる親の癖ぞと知てよも胸苦しさに忍びしぞ云云と

のりしのさく所は義も理もうちち忘て。刀祢だちの仇とかもさ。底意ありなどいふ有繋に親の言なれバ。わきまへ強額ゆと卿らも膝摩拌て。裙に著く蚊をうち拂へバ。信乃見八もさのまそと共侶に慰めつく。其処にハ蚊もあり裳も濡れて狹くぞあらん此の舟に。とかふを小文吾のあへて不召刀祢だちをいつまでかこゝに置べき某實ハ中戻しく迎ん為にまゐりぬ。家居の大人よりのなへ郷に某神假殿より還て見れバ大人ハ在せども婢児們ハ不樂しげに又釣にとて出たりと早まして還りなん。との壁訴訟やみに堪ぬ。彼らもけふの走百病を日来待しくなひつらんに今更にやさて留守もくゝ慰めバ憂かるべし例の釣場へよく知たり。いでや見もしいかでとく彼等が為に若んとて案内来つ立盡しつ蘆原の蘆の間を遥に見れバ大人を目熟ぬ舟に乗て外視もなけれど壯佼とうちち相譚ひなかなかに案じあるべしと猜しぬ。力なくハ暗も立ど彼れなで近づくに。竊に聞てとる程に又一人身を起ませあり。

是則見八ぬし。やうやく此彼の厄難奇遇彼玉のこと。痣のこと。孝心義膽異聞珍説緯の顛末をうち聞くにつけて怪しくも幸なる哉。我も亦その人々と過世あるべきよしを知る。歡び譬るにものをなし。とく出て對面せまほしと思ひつゝ又ためらひぬ。婢兒們を出しやらバ。彼人々を伴ひで。よろづ門に影護るべし。宿所に還りつ。物よく整へ復なんに來まさバ迎るとえに對面まうとも遲からじと胸に揣りて宿所よ退れ婢兒們にハ身の暇を取らして出し遣しつ。暮かゝる日の便りもなけれバ門を鎖して背門より出再びなかに來て見れバ。なれ言果ぬ大人の長譚。某がら人物よしげに説誘しよふとかハ傷痛くゆめえと意中を告れバ文五兵衛ハ笑て咒る頭を掻汝ハ年なほこうけれども親のへましく思慮深かりとも知らざりしバ驚されて腹あしさふ思ひぬるのまたぐ叱るハ親の役ぞとよ誘賓客を伴ん先に走りて案内成せよといひあくぜ立んとなるを小文吾霎時と推禁めてなや黄昏にあれども市中へ祇園會に往返ふ人も門毎に掛し燈籠もまへなるに犬飼ぬしの打扮の異るをみえバ怪むべし加以犬塚ぬしの衣も袴も血に染たり。あれらのまを思ひめぐらし短長不便の物なるべけれど單衣をとりてまゐらすに脱かえさせて人々とのいひ件の袱包を舳の板にうち乗て推轉しつゝ解披けバ内よりしく兩口の刀さへ見えたり。當下小文吾ハ信乃と見八にうち對ひこの榛搨の單衣ハ二田山木綿で見バ膚さわりあらるべけれど二彦なれバ脱更る衣の間に布の列衣も二條欲三條あり布の中にハ貝母龍なる膏藥もあり。そハ相撲とるものゝ撲瘡にも撲傷にも用ひよく效あるものなれバ各位金瘡によく打さそ。その布をもて卷合し就中犬塚ぬしハ腰の間輕げなし。この兩刀ハいぬる比ある人より購得たれど兩刀帶る身にしあらねどもその價の廉かりしに亞銘なれども燒刃の匂ひ銳刀なるべく思ひしかバ漫欲さに買とりたく親にいはで叱られたれ。當坐なれども帶なバ幸ならんと眞ぶく件の

両刀を贈るゆゑん。信乃ハ進寄て跪きて。恭しく受納め。嚮にハ某許我の御所にて。不意に敵を受しが刀を取るに暇なく。見て拄て透を窺ひ先に進ミし一人の刀を奪ふて戦ひつ。それさへ竟に折されバ身に寸鐵を帯ざりしに。輙く更る衣のミならで。かくまで心を用ひられし。賜ものハ千金なり。和殿の侠氣と勇力ハ公翁の物語に詳に聞えり。只その義勇のミならず才幹遠慮も又且世に見ざりけり。実の同胞なりとも有がたかるべき恩義ぞかしと大くにあらぬ欽びに見八も亦小文吾が緯倉卒の間にて。飽まで心を盡しける恵を謝して信乃と共に身を安く衣を脱更て。迭に拄てその浅薄を布めて巻々結が程に。文五兵衛ハよろ子の才覚誉られて足る親なれバ。欽び面に見れて。信乃見八が脱捨たる衣も裃も肱楯臑楯も。ひとつに圍て袱に推包ミて端引結べバ。小文吾四下を見くりて。よが大人を賓客達を誘引てくて[illegible]の人。某へこの舩を推流して後より退らん。袱包へそがまゝにて釣竿をもちて立る人物ともおもはで心をつくしバ。点頭つ信乃見八を見かへりて。誘ふ人ハ龍口より先へ退出んと礼を許させる人と舷へ踏かる親の足を濡させじとて。そがまゝに腰を抱けバ。小文吾よ。ゆるさせ給ひそ又行ともあらじ。放せよといふ程に扶て水際に立せバ。信乃見八ハ後方より閃りと水際にをり立てあらバ。大哥いかにやのかく翁共侶に宿所で候ん。現在の舩を遺し措バ。彼草隠されたる野鶏の尾を顕すに似るべし。左右ハ和殿を労するのミ心ぐるしくゆといふ程。小文吾皆までいはせず。それハ宜なり。まてろ帰るまでこそ。らのる懸念せずとて邁るとりそが件の二人ハ小胥を折めて。小文吾に辞し別れ。文五兵衛が後に跟て。古那屋を投て誘引る。小文吾ハ背影の見えざるまで目送りて。帯揺揚て身なりに結直して。脛高に端折る裳精悍しく。いと長やかなる腰擲の

刀を背へ推繞らし。彼纜を解捨て船に措る袱包をそのまゝ取て楚と背負ひ。底濟に乾る船の港板に肩さし入れて推程に。脛を越るまで河中へ推やりて出し。引向て力に乗して突放せば。船は後ざまに揺めき走て大洋の方へぞ出にける。小文吾今はなかなか易しと思ひながら。徐かに舊の水際に還るをりしも。濡せし足を拭ひけるに。此時はや日は暮果て。甲夜闇なるにいとゞしく蘆の叢左右に生茂りて。黒白も判ねど心あてに石の上に脱おける草履を撈りて足に引穿。蹇揚たる袖を伸して塵うち拂ひ。熟て迷ぬ如法夜に家路をさして悠々と立かへらんと為る程に一反ばかり遣過して蘆原の邊より。紺と縹を經緯に織做たる巨縞の浴衣に皂き唐織乃帯を幅廣に締たる。隻棲高く裾端折して。一口の黒刀を跨へ藍絞なる手拭にて頬被せし一個の癖者忽然とあらはれ出て。つくと透し見つゝ竊歩して小文吾が後方に跟て攫掴て襠を丁と握り留て。兩三歩引戻せば。些も騒がず身を反り搖一搖て振拂はんとする肩尖を押て礙と衝背けて。その身を閃りとうち掛て小文吾が背負たる袱包の眞中摑で引倒さんと争ふに。包を一布引綻し。内より落る麻衣のあやなき烏夜に。小文吾ハとも知らず。えぞしらで焦燥身をふり回し。跳蒐て癖者が右の腕拉んと楚と拿るを。られて怯まず振放ち抗る拳の早蕨と薄に受る手煉の働。撲ハ論ず推も外も迭に劣らぬ拳法の奧妙。顔も認ず足下も進退不便の滅達打蹴散す小石に乗し掛て。双方齊一踏込し。彼ハまろべ此ハかゝるへ遺錯しく幾歩か踏地くとしく走寄て。輾んとして立留り。迭に且く透し見れば覘定めて癖者ハ面も打んと進む処を。衝と突出せば小文吾が拳と進む部合ゆゑ癖者ハ腹肚を大く撲れて。暫時も得堪ず一声苦と叫びて。一間あまり逡巡して。


暗夜の敵
蘆原に
小文吾を
抑留を
小文吾

尻居に撲と倒れたる。音を聞けども目も見えぬ小文吾は衹包の寛を固く引よせて結直して歩早に脱れて宿所へ還りけり。少選して癖者は。こゝに復あわて身を起し。再び追んと踏出す足に蹋掛る麻衣をもぞやく取て拊て見れば。烏夜に瞬して遠し見えず。さては領把莞尒とうち笑て衣推圓めて懐へ夾めて手を組頭を傾け。思按も路次も引かえて。塩濱のかたへ走去ぬ。かゝりし程に文五兵衛は信乃見八を伴ふて。橋楚の宿所に還りつ。軈て背門より進入て彼此に灯を点し。奥まる子舎に件の二人を安措して。且酒食を安排しつゝ。叮嚀に勧ていふやう。暑熱は毎年のことなれども。この六月は毎よりも雨ふることの間遠なれば。旅なる人の勝ずやありけん。こゝらに宿借るものゝ稀なり。されば嚮に噂せし彼鎌倉なる大先達念玉坊といふ修験者の。その従者を先返しつるが宿に只ひとりなる。逗留させしかども。そのまゝ澁滞に赴きて神輿洗を拝んとて。亭午の比より出てゆきぬ。今宵は其処に止宿して。翌ならではかへるまじといひつ。されば其ほかもなし。婢児們のみなる在ど。よろづ不自由なるべけれども家の内に他人を置ねば。かへりて後安なる。物のいひさへ折々常鳴して。召使老人を労るこゝろ。人気のなき家と正首に慰れば。信乃見八は把れる箸を遽しく折敷に置て恭しく両膝に掛。老人のうちゑみてあるに。かく叮嚀に饗応せらるゝ。厚意謝するに餘りあり。縦親戚朋友なりとも。凋落に及べば見くだすぞ。況他郷の人の為に縁坐の祟を怕れずして。誰か一夕も宿まゐらせん。凡人の親たるものゝ其子の友の為に揣るも義なりと見て。後難を憚ざる翁のこゝろざしは。よにありがたし。されバとて翁をわづらはすに日を累て。倘連係せらるゝとあらば。後悔其処に立べからず。今郎のかへりあらば。款びの恩述恩の謝し。今宵一夕暗言明して翌は未明に發足せんと。齊一辞するを聞あへず。そは何るをいふならん。市人なるは天

渠も亦武士の妻の腹より出たり。拙郎も倶に義を結びて。各位と兄弟たらまくほりす。子と孰か異なるべき。只いつまでもかくてあらせよ。さりともかくもして含藏ざらんや。遮莫いや箸を抗る人と他事なく勧めつ慰めつ飯を盛そえなどしつ。欵待態の浅からねバ。信乃見八ハ感佩して。豪傑の子ハおのづから也。その親も亦かくの如し。渠但膳も稍果る比。小文吾ハかへり来つ。思ひかけなく癖者に抑留せられて挑し時。衹包綻びて。信乃が麻衣を遺せしかども。遠しれ折なるに烏夜なりけれバ心もつかざ。さりとも彼癖者ハ人の懐に手をかくる小偸児の類なるらん。綽のところを按するに彼奴ハ蘆原にて躲ひて船の中なる密談を竊聞せしものなる歟。かゝれバ渠に恨あらで。闇撃にせんとて彼処に埋伏せしもの歟。何にまれ渠彼條の密談を外に洩さバ。己が賓客の仇となりなんさへ安からねバ。とにかくと思へども色に見さずして背負し包の所結を解卸して措収戸棚へ。そがまゝ納めて戸を引閉。船子舎に赴けバ。信乃見八ハ歓び迎へて席を譲り圓居しつ。やがて懇に父子の恩義を謝する言の葉濃やかなり。小文吾これを聞果て。二彦が意志あるにぞ。かくまでものゝ数ならぬ恩にして謝せらるゝよしあらんや。その志同じけれバ千里の遠きも隣と親く。その志異なるときハ合璧も究めて疎かり。曩に某犬飼ぬしと義を結びて兄弟となりしハ彼玉のなせるか。痣のなせるかしらねども。事に臨みてその憂を共にすべし。さるを犬飼ぬしのいはるゝまゝ。犬塚ぬしも遐棄られざるハ彼両件の奇異あればなるらん。某既に蘆原にて綽大くてハ仔細見えたり。但その玉を見ざるのミ。まづ〳〵玉を見んと思へ。といひつゝ懐の紙捻なる古金襴の袋紙探りて一顆の玉を取出し。信乃見八に示すにぞ。両人も亦玉をとり出て三を一ッに合しつ。共侶にまじらはせ見るに。さながら同じく只その玉に顕れたる孝悌信の三字のみおのおの主をとなへたるのミ。

又今ゆくりなく吾燈燭にさしよせて。うちみて齊一歳嘆をつく。おのく玉をとりもて。舊の如くに取納れば。文五兵衛は歎しげに。小文吾にうち對ひて。のるゝは裏にいのゝるまろ。偽らざる我諦せよ。緯の亭に汝が痣を二彦とみせよのこといふに小文吾はうち微笑て。某が痣を所ろ見せんやおのゆゑせんハ無礼なれども親の言ハ背がたし。許し給へといひかけて帯引解て衣を退け背向になりて示にぞ文五兵衛ハ行燈の灯口を其方に向ける。當下信乃見ハ目を斜めにこれを見るに肥膏つきたる肌膚の白さハ雪をも欺くべし。背に灸の迹もなく黶に黒き痣あり現その形牡丹に似たり。両人ハ頷稱賛して脱たる單衣をうち被きて小文吾ハ袖を摶て帯を結びけり。信乃ハこれを見かへりて昔異朝周の時晋の獻公の公子重耳ハ國を追れて流浪して曹國を過りけり。曹共公ハ重耳ハ駢脇のよしをきゝて窃にこれを見まく欲す。その臣釐負羈諫れども聴かず重耳が浴するときに瞯窺しけり。（淮南子に見ゆ。曹君頻に重耳の駢脇を見まくほりして重耳に袒して魚を捕せしとあり）重耳覚てこれを恨み重耳が國に返りて位に即に及て遂に兵を起して曹を伐共公を虜にして件の辱に報ひしといふ。重耳ハ晋の文公これなり。國語史記に載たり。書を讀めバ恥ることなれども犬田生ハこれと異ニ年来相撲を好むのなれバ肌膚を見せども嫌ひあらじ。それよりも彼の見らるゝ所を見せぬる莫逆の交りあるゆゑハ慢悔の咎めあるべからず。痣ハ是なりといひつゝ偏祖してそれ小文吾ハ痣を見せまゐらし奇えと稱るぞ。當下信乃ハ祖を斂て。しかしぞ歎息し只ハこの三友のことなるぞ。彼犬川荘助義任。假名額藏と呼るゝものゝ痣も玉も亦相おなじ。この團坐に彼一人を闕こそ遺憾なれ。彼額藏の荘助が人となり如此こそ箇様とと説示し。この玉のこゝの痣の因果何ゆゑの所以を知ねど量に裏にわたりの送愛あるよ四郎と名づけし犬の亡骸を庭なる梅樹の下に瘞しにその梅明

年実を結びて八房に生らずし。その梅子に文字顕れ仁義礼智孝悌忠信の八个字定かにぞ讀れたる、いとも不思議の事なれバ採てその実を藏め給ひぬ。その核も今なほあり。文字ハ乾る皮肉と共に失て迹なくなりしかど。その核ハ圓くして微小なる各秘藏の玉に似たり。初彼梅の八房になりし歳見出せしハ某と荘助のミ。當時兩人ぞひろひとりつ。その梅に顕れし文字ハさらなり。形さへよく吾們が玉に似たりしかバ。かゝる玉を秘藏するのみ外にも亦あるべき歟あらバ必ことさらが為に異姓の兄弟あるべしと思ひしころの毫差つぎ今又こゝに犬飼犬田の兩死友を得て四人になりたり。この外にも尚あるならバ久後いよ〳〵聚しからん。歓びさつまちおはよとなりしと言細に説示せバ。文五兵衛ハ膝を進め耳を側て驚嘆し且ハ小文吾も又傍に奇異の懐をせざるもなく。過世の契と感悟して額藏の荘助どいと慕しく思ひけり。かくて見八ハ傷にありける盃を改めて信乃小文吾に勸めしに。兩人歓びて義を結び樂を共にせバ憂を與にすべし。同日に生れずとも同日に死ぬべしと誓言に及ぶのみ。文五兵衛も亦歓びて肴を増し盃を勸るに信乃見八ハ刀瘡あれバ只盃を受て酒を喫まず。翁ハ是等が命の親又令郎小文吾と異姓の兄弟たるうへハ義において亦親也。只盃を賜るべしと請ふて歓び残盡をのめり。文五兵衛ハ不材に羞て、いよ〳〵信乃等を敬ひ、その當下小文吾を父に對ひて某聊思ふ旨あり。かゝれバまでゆへゆかずとも某在宿せざる日ハ見るべく心織用ひ給へ。昨今止宿の旅人ハさるものなれども彼修驗者念玉坊昱ハ必かへり来べし。只彼人のそなたをいぬる日八幡の相撲よりて房八ハいたく恨を妹夫としてころ放さバ殃危其處より發らん歟も亦知るべからず。某世上の人氣を考るに憎れてあるがこの二彦を他所へ移さんぞも機に臨き變に應じてせんとてハあるべけれどもなろゆゑのまゝにてのことゝいふハ甲夜に蘆原にて走蒐し癖者のうへに

かくまでにかれらが事の由をも知らねども。文五兵衛ハ寔に然なり。と応けれバ。見八これをうち聞て。現との縁を領しぬる千葉ハ許我殿の躬方なり。且擬堀在村に。その猜忌尤甚し。渠見八ハ恙なく犬塚生と義を結びて。逐電せしと聞えなバ。我ハ大塚主より某をさへ憎むこと甚しかるべし。人の視聴を避るゆゑに名を更るのみ。さはれ見八の見の字ハ養父の隻字なるに。擅に弁んハさはれ只八犬の玉ある故に。さればこそ実父のうへを知りつかくれバ。見の字ハ玉を加へて現八と唱んとおもふのみ。と相譚れバ。信乃小文吾ハ見八がかゝる時にも親を忘れぬ孝心を感佩しつゝ。さもあるべしと応しかバ。見八ハ今宵より現八郎と改め。信乃も其假字を音て。人の耳目を避るにけれバ。その夜ハいと深くて子の半更頃と覚しき比。頻に門を敲くものあり。小文吾ハ戸口に出て。呼門ハ誰ぞと問ふに。その人答て声を励り立。己ハ塩濱の鹹四郎なり。神輿洗のかへるさに。濱辺にて壮者共が大く鬭諍をしつるに。よりて怪我せしものも亦多かり。その中ゆゑある相撲の弟子もあり。又市川なる山林房八が弟子もあり。甲夜よりて甲乙截判しく双方を和解れども。敵手を他所のものなれバ。小夜の程深て事届ねバ。関取いかにもかくも扱ひてあねかし。夥計のものも待てをりと。いそがせバ。小文吾ハ聞て舌うち鳴らし。折も折とて奴原が仂闘諍をするにそこにハ。親仁が暑に中られ。婢児們も走百病しつ。人隊なけれバ出がてなく。恒ならぬ事なりかし。神輿の供奉に立ざりし。さりけれど敵手ハ市川人なるべく。山林が弟子なるが。彼のみハさるからぬ貌もなくなど。汝も先へとて走を追續て。ありしかバ。いさゝか人騒しの奴原なんどの残。鹹四ハ笑ひて然ぞかし。関取倩てまゐりぬ。と来まさんと期を推て。足音高く走去り。小文吾ハそゞろに小又子舎に赴きて。二彦無礼をつかまつらぬ大人よ。今門辺にて云云とのゝしる中。濱辺のものゝ癖にして。高声なるハ彼の死つらん

毎年の祇園會に出ぬるなれ某が甲夜より籠をかゝりて今なほ帰らず疑ましん短夜のならひあまりべ明なば還り来るべし。大人は賓客達を臥させて戸鎖して寝まりたまへといふ文五兵衛は聞あへねど眉根をよせつゝ頭を傾け。壮者等が酔狂して打擲もさるゝとふりにめぐらしけるなれども歎は市川人にして快からぬ房八が弟子なるが彼れより物ぞ手にして枝をや殖させん人の喧嘩を買ふなよといふべ小文吾微咲てそはさる事て待るなり負腹立る房八が横に車を推すとも直なる道を直にせば某を何とかせんといふを聴ず懐紙をさらりと引裂て一條長く一條短く楮紙して左手に取り。小文吾よ和郎がおもての了簡と彼が、当然く氣の立たるの了簡とを思ふべからず和郎が十六歳のとき梛欐の犬太を結果し。その折に誓言立て人と争ふとも人を打ず大刀を帯るとも刀を抜じとのみる後は物争ひをせしことありけれど此度の確執は心のまゝにし、その腋刀を且かこせとのみ、取て膝に横丈仕の紙索を鍔の透と鎺に引融て楚と結びて傍に措ば小文吾は右の手に胸前近く引よせて又紙索もて右の巨指季指の本を紈結にして餘れる端を引しぼれば小文吾は呆果て物をもいはず向せも果ず文五兵衛は腋刀の鞘を握て膝におし立親の心を子は知らずや紙索は脆きものなれども結びて刀を留るに引ばぞ抜くことならず國の法度も又親の教訓もこの紙索にあらず破らんと思ふ者は破るはいとも易けれど破れば非法不孝ぞ大刀は則男子の精神身を護る徳あればこそ人を斫べき為に佩ものにあらず則使役の至宝萬事を辨る徳あるのみ人を打べき物にはあらねど縦ひかからで腹立しく忍びかねるにありとも此の紙索の絶易く絶ば再び結びがたきと思ひなして堪忍び親に歎きを被るなと生平ゆめ忘るな義理深き庭訓に小文吾は黍くて応もえせず頭を

低く居たりける。信乃現八ハこれを聴て。感ずるも嘆賞し。適徹妙なる教なるかな。心といふ字ハ鎖に似たり。刃に心の鎖をさせバ。是則忍也。忍びうるをよく忍べバ恨もなく悔もなく。幸なやとく讐あらしも親ならずして誰か斯まで篤く諭さん。己身を護る神も佛も親にまさるものあるべし。只吾們既に二親なし。是第一の不幸なりける。教を蒙くにつけてもいと羨しく候といひつゝ小文吾頭を擡。短慮ハ功を成さずして。と口にはいへど一旦の怒にその身を喪ふなと箴られし。親の恩胸に的膽に徹す。さバ大人なる我安ハ某既に三四個の雋傑の下に列る。過世なりけんよしを覚れバ。この身ハ千金萬金といふても一旦の怒に乗して親を忘れ友に負くの愆を忘れんバ。尚この紙索を断とあらバ親よりハ勘當せらるべく。人々にも棄らるべし。さでハ俠者といはるゝも要なし。其を忘れざる為に被し紙索の指環も。圓く治る喧嘩の和談夜ハはや深てゆけバ某も睡るゝ寝すまゐ人といひかけて

一刀取て跨めバ。文五兵衛頷きて。おちつきて安堵し挑灯をとりて出ぞやとのひて立を推とゞめ。廿日あまりの月魄の隈なき夜ハ却に挑燈ハ煩し。天明て戻りの遅くとも思ひ過したまふなといそしく親を慰めて。信乃現八に辞し別れすでに外面に立出れバ。両人も共侶に身を起して戸口に目送す。文五兵衛ハ出る跡の樞戸を鎖して。扠盃盤をとり納め子舎に幮を垂て信乃現八を休らせ。その身も納戸に退きて睡んとする程に丑三の鐘鍠鍠とまづ寝ぬ枕に響きたり。却説その詰旦文五兵衛ハとく起て火を焼水を汲て早膳を調理て信乃現八が起出るを俟程に。日ハいと高く昇りて。はや巳の比になりぬれども小文吾ハいまだ還らず。件の両客ハいまだ覚ず。大かたならぬ疲労にて高熟睡したるならんとおもへバそのまゝにて。暫時てぞありけれ。今ハ覚てもよかる比なれんと子舎の間なる障子のほとりに立よりて賓客達覚たまはずや。日の

閨へゆきて。高やかに呼起せば。現八ハ遽しく幮より出て。障子を推開き某ハ曉方より。とく覚てはべれども。いかにせん犬塚生ハ未明より。金瘡甚しく腫疼みて其苦脳も亦甚し。瘡ハ卑に灸所を外れて浅かりつれバ。軈て愈んといひつるに。俄頃に腫疼るゝのみか。終日河風に吹晒されたるゆゑにや。破傷風になりたるも甚さまじくよ。心を盡して看病んと欲すれども。腰著の薬籠もなし。よりてとく翁に告て。相譚むやと思ひしかど。手代りもなき老人の。朝の炊すらんを呼立んもさすがなるゆゑ。翁ハとく醫師あらざれバ。診るともせん術なかるべし。且も猶豫と。犬塚ぬしの。いふて默止すといふに。文五兵衛うち駭き。それハおもひかけざる事なり。昨夕まで健なりしに。うち暗譚る人の料りかね病難の。こそハ破傷風のことならバ。彼樓閣より落ぬる。僕傷の疼痛もあるべからん。さりとも犬刃ハ基にあらで。巳も共にきむつまし。まづ容體を看てこそとて。そのまゝ裡面に進入り。垂たる幮を頼めて推て。犬塚生心地ハいかに。物はいはるゝや。と問まくに。信乃ハ眼を見ひらき。首を挙んとするに得ならず。いと堪がたげなる息を吻き。翁歟。昨夕のまゝにて小文吾とかいふ人ぞや。さりぬ浮世を潜ぶ宿なるに。重病に嬰りぬ。されバとても人をさゝへ労ふるなま胸くるし。生命も死するも天命なり。只うち擲て置ねとのみいへば。又目を閉つ。文五兵衛ハ嘆息しつゝ。退くと共に現八に目を注せつゝ。共侶に次の間に赴きて。膝つき合し。声を潜めさせて。若さしらん容體ハ發熱熇に燔がごとくも。血色乃衰ぬるハ虚熱にして。悪寒もあらん。療治看病怠らずハ。本復ハせなんかのあれぞ。されど田舎のかなしさハ。名醫良薬を得しけれども。本道鍼治外科女醫者按摩導引の類ならぬ。彼此に些しもあるさまなれど。よく浮世を潜ぶ彼人を。土地の醫師にハ診せがたし。某が兄なりける。那古七郎が相傳せし。破傷風の奇方あり。その傳法に云。破傷風腫疼て日を歴るまゝに。瘡口愈ても或ハ血の走ると線の如く。

久しく止ざる時は死んとす。凡年少き男女の鮮血各五合をとりて合してその瘡に沃ぎ洗へば疼瘥り腫退きてその瘡は立地に愈。氣力も一日にして本復すると。譬ば箒をもて塵を拂ふが如しといふ。某弱冠の比亡兄が口傳なりし家の口碑に遺えん近属小文吾に傳授せり。されども鮮血五合を採るが採るゝ人は必死ん。よしやその人死るまでとらずとも、銭あり威勢あるものなりとも求がたき藥剤なれば其の處分はいかにぞやと問へば現八沈吟じ。血洗の方善といふとも醫療は故ら仁術なるに人を害ふて藥剤を求めんは是不仁の術にして忍びざる所なるにや。某が武藝の師なりし古人二階松氏の筆記に軍陣藥餌の條あれどさる方もあるも人の名までも某は肯ざるに因て試ることもなし。但武藏なる志婆浦に破傷風の賣藥あり。是なん效驗の良剤なり。某少年なりし時同藩の某甲が中田の戰ひに深痍を負ふて破傷風になりけり。醫療その效なかりければ志婆なる藥を試さしく立地に愈しことのありけり。こゝより志婆へは五里あまり六里にはあるべし。さらん今よりゆきて此日永の比只顧に路次を急がば今宵四更の比には回りまうすべし。藥店の名は忘れたれど某彼処へ赴ば素に當ざることはあらじと諳めし所ぞかしうち占頭。現八その藥を索るべし。さりとあれど身も金瘡あれば炎暑を犯し遠く走りて疼差あらん。さりとも某も人の知るよしあらば途にして事にあらば悔るとも及ぶべき。已濱邊に走りゆかん。小文吾を召よせ渠を志婆へ遣すとも某が赴くともそは左も右もせよ。けれといひかけて立んとする程に現八急に推禁め。哥そが今まくかへ來ざるを。脱れなん死よりあまたなきらんものはかく召出さるとも。豈今まで彼処にあらんや。さる老翁を足を労して彼処に赴き給ふとも彼人なき後久しく經て徒に時の移らくのみ。轍鮒の窮を救ひがたし。某は微瘡なれば道中は笠にて潜ん途すがらも支ることあらじ。進退まなく自由に見えんかへといひあへず身を振り足を踏立て示すにぞ。文五兵衛は

義に勇む志を感じて禁めずまづ早飯をとゝのへあたへて。路費藥料を贈りしが現八は激れる鬢髪を搔梳りて膳に對ひ遽しく箸を斂めてはや立出んとする程に文五兵衞は飯行李に笠に脚絆に草鞋まで送りもなくとり揃て遞与しつ。現八受とりつゝ。某がゆゑよしあれバ信乃に辭別をせざるは今云云の議ゆゑなり〱志婆へ赴くよしを告べ辭せなく心禁めざらんとなめらかに紙燭ぬり捨て出てゆかまくに。その病苦を増のみなれバ。後に大塚の事故あるとあらば翁云云と告てよと密語あへず縁頬に尻うちかけて草鞋の紐をかたく結びつゝ刀を取て腰に跨文五兵衞に辭し別れて笠深隱とうち載て背門より潜び出にけり。

第二十四回

栞崎に房八宿恨を霽す
蟇塚に犬田急難を綫す

文五兵衞は現八を背門のほとりに目送りて内に入りてど出てゆきし。その人のゆくへを見送りて當惑る信乃が病著をみやせまし。かくやせまし。と思ひわづらふ体ちぬ。胸さへ身さへ暇なく小鍋に炊く白粥の烹焦が如きあらぬ日に。そよまゝともせぬ風藥素湯まで勝んと貯藏のまゝに煎じたる藥罐量る茶碗の水加減一盃半日たゞ居つ。粥と湯液を勸れども。信乃は食氣あらずとて箸も沾とらず藥も飲まざれバ。現八が枕邊に久しくよらぬを訝りて。何処へゆきしと向るゝに文五兵衞は慝あへず云云と報るにぞ。信乃は聞て嘆息し。彼人も金瘡あり。倶に人目を忍の身の漫に遠く出ぬるぞ。縡にあらでいかで金を湯と湧く盛暑の眞中に老たる人を労らして使ひせまらんとまた四月なるをよしもるそのまゝてけるを。獨悔て掲るにあらねど胸に逼塞をとらんとするも堪ず枕邊によるまん後邊に立還る。動る老の身ならましかバ。よしや夏の日も漸傾きて未の下刻よりなるにけり。文五兵衞は下たりと汗に帶布の衣を絞あへず。

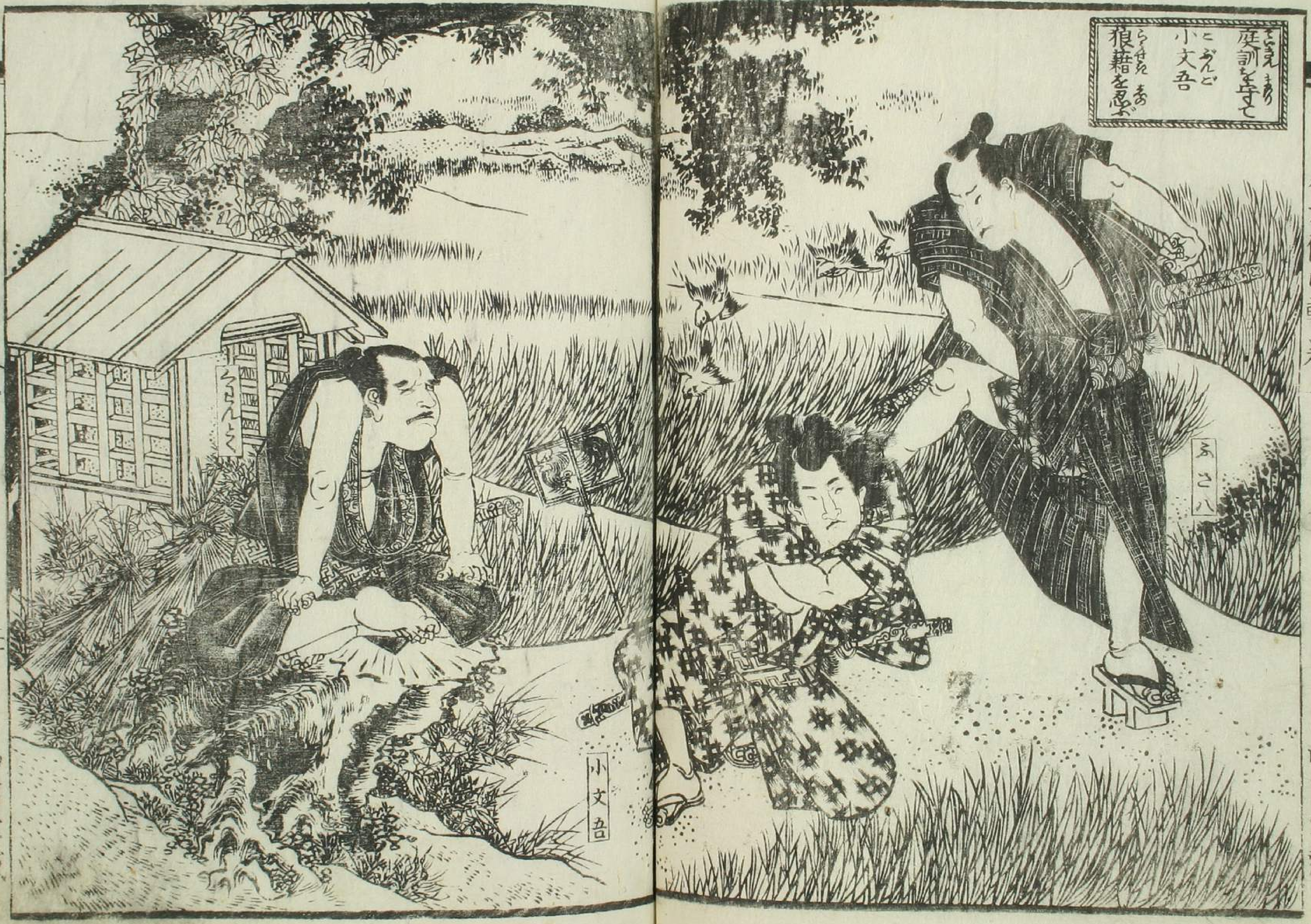
工風を入れんとて外面へ退出。肩ひき袒ぎて手拭を背肩ぬるが如く拭ひつゝ。胸のあたりをうち拊て。斂る袖の先ひあるが待にし小六五吾は今まで何しておそるぞ。壮者は未遂なる齢と共に氣の長さよと獨言して門傍へ立出んとする折から。足音高く来るものあり。それ歟と見れば走奴なる唱らで莊官の使なり。店前より謁音たかく古那屋の檀那をらるゝ歟莊官殿より火急の要用ありて来ませと呼立るを。丈五兵衛は折こそあれと思へど騷がず見えまくとは謀して人かぞある莊官殿の召状でも知れるとて婢兒們へ例の任しきのまゝ走白病して一人ももどらねど。拙郎は濱の闘諍截判明にて久しく還らず。留守をも見て絶えて且く遅延をもまうして給へといはせも果ず。眼を睜て留守はあまりもあらじともさは緩怠となからんや。宿所にをらじといひくる方を索て今稍来ものとのみ見えし。誘共侶にといひて參らせしと只管にいそがしく。

框に尻をかけて居り。丈五兵衛はいそがはしく。安からぬ胸裏に莊官よりも召るゝも彼夕あらん歟。このうち歟と思ひ得て沈吟し。あらんには猶豫あらし要時まちね。今ゆんといひつゝ身を起し奥をと見んせずと出居の障子の開闔せらしく信乃が臥る子舍に赴きつ。扨云云と密語つ莊官の宿所へは行くよしを半里許なれあらんとてゆるさく疾くかへらば日を消もせであらんず。その程に小文吾も必ず皈り來べし。さればなん煎藥も素湯も枕辺なる埋火にかけてあり。物ならむ不自由なるべけれども且く辛抱せよといふ。信乃は枕を欹て仰のて眉をうち顰め物の不便へ咽のふ足らずも。村の長より召るゝめりしかるにあらざる歟。重病にたのみけるに命はいつまでか惜むべき。現八が今なにとぞあらぬこそ幸なれ。しかしこゝろへにかゝらんとひ難義に及ぶともあるべ腹かき切て死んのみ。其の首捕て連係の辛苦を脱れ給へかし。といふを文五兵衛は聞あへず忌しれることよ。村に居て莊官に召るゝ称かは。

己ハ客店のことなれバ毎月に二度も三度も旅人の名簿を紀さるゝけれバ。そもそもの筋なれども浜の闘諍の発けならんよしなく拙なる者などに縁故に保養させん人と辞せられつゝ慰めつゝ又外面に立出。自染復の絹羽織畳て傍に左の手に把り。右手ハ竹の皮鞋を縁よりなげおろして穿つゝ誘ふ人と下立バ走奴ハ眠げに目を揚く欠伸して腕を捲り先に立て外に出れバ文五兵衛ハ店前なる簾二枚繰おろし余れる端に戸を引よせてうち鎖し拉て荘官の宿所を投ていそぎ行。程に犬田小文吾ハその夜さりに塩浜に赴て闘諍の為体を向究め聴て市川なる山林房八許人を遣して和睦の義を相譲るにその人かへり来て房八ハ宿所に在ざりしぞと聞えしかバ且奴方を和解ハ次の日又市川へ人を遣したれども房八竟に来ざりしかバ和睦ハ後日の事にして傷けられし市川人を轎輿に乗せて此方の里人数傳て送て遣しけるほどに廿二日を仇に消して下晡になりにけり。小文吾ハ親の侠ならん賓客達ハのこりあらんとおもふその日くも賃に絶ねバかつ扱ひ果ると思ふて里人に辞し別れて家路をさしてかへり来つ栞崎と字せし並松原を過る折忽地後に人ありて犬田等と呼かけつゝ小文吾呼とゞめ見かへれバ是則別人ならず山林房八が越の縮の麻衣に萌出る若草の裏附たる緋の縮緬の犢鼻褌の前巾を透させて銀の鐔輪ある長き一刀を璫降に挿なし皂纈の単羽織を細く畳て帯に着夕陽を避ん為なるべし白布の手拭を頭に巻る端を額の上に巻留め朱緒の桐の下駄を穿なしその性若ら悪ら知らねど色白にして骨法鄙ならぬ現文五兵衛が比興し如く犬塚信乃に似たりけり。小文吾ハ見てうち微咲み誰なるらんと思ひしに市川の使なりけり神輿洗の扒擢まで此方の里人彼方の里人送に些の傷なければ昨夕も此人橋渡して召したれバ面出しせざるべく他人のことでもなし。

和主が分まで骨折て。事なく半治めしを。といはせも果ず冷笑ひ。そはなんや骨を折りつらん。志らへあまたども今途で。傷けたるは僅に浅痍ある。市川人は二三人までおのく稟る痍は重り実ぞ。等分に理をわかちて處りも済せむ。引わけたる和主と己等は鰥鍋内證のるのゆへ。益なくて。線香立ぬ樹もわらん。彼截判の片手打。房八を女房の兄に怕れて。知りても知らぬ貌して受とらせしと。世間の人にいはれては。己が一郷に歛債みして。背肩おくて退ても。路にありて死ても。名折れ生ての恥辱。今蒔る母を確執の種花をかさねば。男が立ぬ思案決めて。挨拶せんと嘆り立れど。些も騒がせ房八そはれは。その僻案甲乙つけて。己打まで片手打ともいはれやせん。一夜一日まてども来ざりし。そのうちを逢てたらうち送りしまする。花あるを殺ぞといふぞ聴ぐ袖巻揚。それのへ釈にあるは。狄侠骨の捐干し。巳あるとそいふらの扱のくもよいぞやれと侮られる。故事来歴いふくも知れし。ともがらいゆる日かへ

八幡の晴相撲。美事和主に負されて。生涯土俵に足踏みせじと。思ひ絶て個乃如くといひ。手拭搔取て剃ら月額髻と。捐親の異見を外にして。けふまで借し額髪剃落しる青冶郎。倘武士ならば弓箭を棄て。發心入道せしてろ。よしそ小出所此度の確執相撲の日をも怖気がつきて。生れし里に肩入れ候。得らはら潰ればいはゆるなれ。釋迦でも還俗せさへん。夫婦は素しのまゝ合せめ。女房去れば阿舅といはさぬ。黒白判る覚期せよ。と競の鬼迄と争ふまでそるといふて。逆上せし欽額髪まで剃落せし。得度の男あまりし男態。形と心はうらうら。人のかく。相撲の遺恨を拳法のく返さんとするが。大人気なかりけめ。吾儕に言え云するをいふるのあるが。豈又今霄一宿預けよと。和解て別去んとするが。袂を捷と引とめ。物体つけて。滑り逃ても脱さぬ。今まで挨拶せずやと。敦圍や後へ畷腸る裳を細ぐ。端折高く褄取をり。小文吾は今さらにのそあまりて沈吟しかるが。又いふやうに挨拶せば十分にそれるへい


庭訓を奪て
小文吾
狼藉を忍ぶ
ふさ八
小文吾
ろこんとく

面をかくし母さんと向へバ取る袂を放ち斯して起きて身を反して刀を見りと抜くる臂推留て半を抜せじと顛つゞくとうち目戌てそゝるは酒に迷されく物ぞや狂に等る見えあり。人を殺せば身を殺き親の歎きも子のそのも思ひみぞやと窘て取る臂を衝放せバいよく逼て下駄脱捨小文吾刀に怯ぞし欲生酔扱ひ胸悪し和郎ハ何時房八に酒を盛て酔しる親の歎きも子のあるも豫て期しる一生懸命として勝負を決せよと声ふるて絞る汗と共に玉散る如き刀の光て又抜うけて詰よせバ小文吾も今ハ堪ねて共に抜んとて手を掛る鍔際見れバ親の慈悲戒し紙索に禁られて怒とてもふ手を斂め房八何とかいへども小文吾ハ一個の親あまふくろある命あて然る敵手ゆゑ汝あらじとの弥に房八呆きて呆てしを呵々とうち笑ひ長き刀を光らしても要緊の時ハ汝も抜ぎ。その若のあるもあたりえれバ紙索ぐ留めゝりさだめり刀がおそろしくバ倶に拳の砕るまで打あめく運を試んとて来よ進めと諸肩推袒ぎ足踏鳴らして立對へども小文吾ハ詖らまし指の紙索のいと惜さに立在る俟手を又見頭を低て見えざるを房八ハとみかう見て又覷然とうち笑ひ小文吾などく立合ざる相撲とちがひて命がけなる勝負まで拳もおそろしき欽男態ハ大きうても乗つれの撞銀甜瓜見かけばかりで味ひなしかゝる手の臆病者を人がましく打あふべきなのかくふ見ず拳を繊さえ是を咬へと足を飛して向膝撲地と尻居に蹴居て土足を肩に踏詖きり小文吾ハ片膝を衝あるまくふ手を抗てその足趾と受とあへ向上る面色朱を沃き疾視遍てぞ堪かね怒を忍べといひきる庭訓に悖きまじ親かバ不孝の子ともならん友かバ不信と疎まれん昨夕立る誓言も紙索も諸ともに破らじと思ひ合せど叶はぬなめ人をも身をも恨の涙見せじと汗に紛らしくふて落ち鬢の乱髪顔を背けてつれなけり。当下樹蔭に躲ひて始の事を

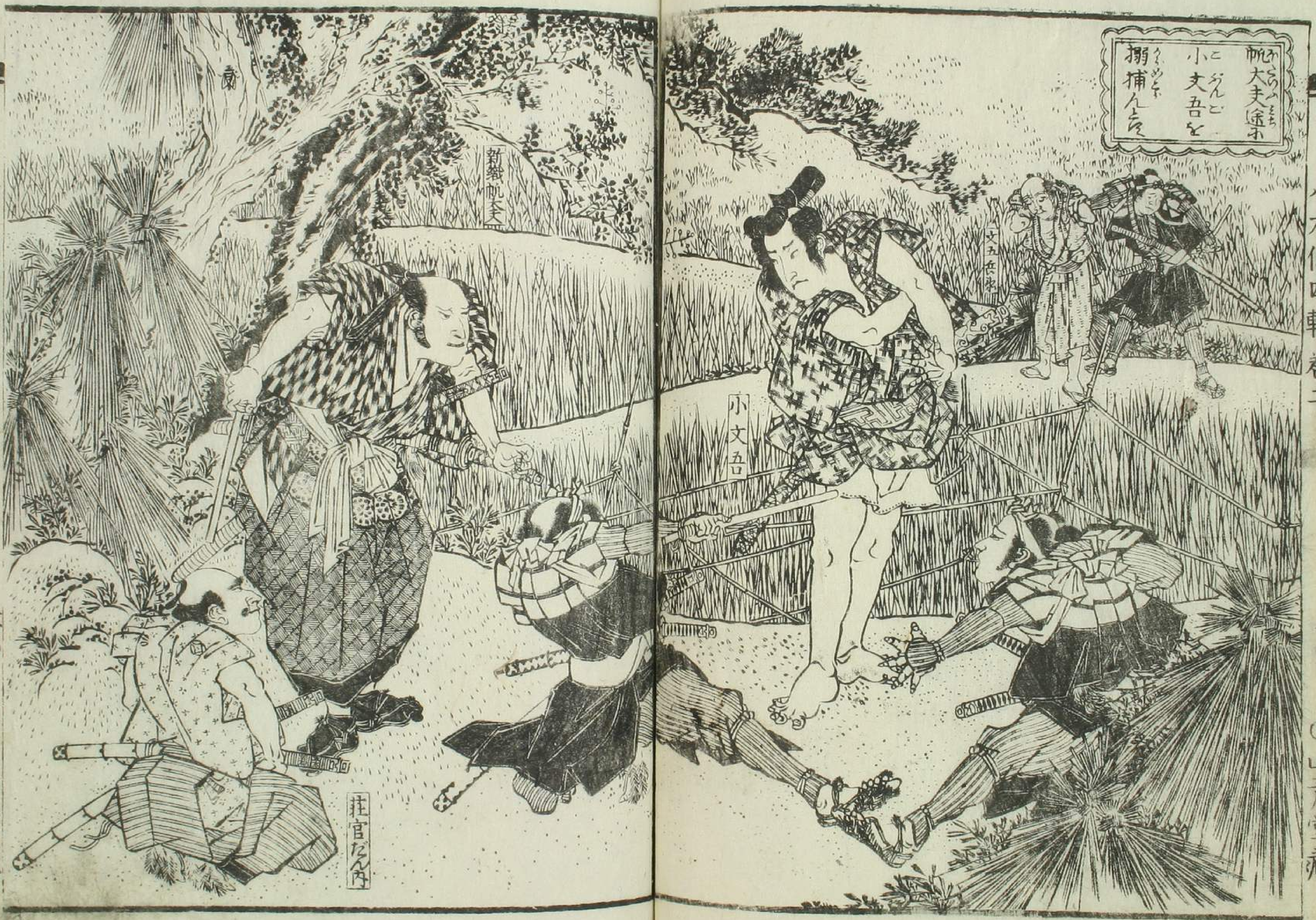
覧るものあり。是則鎌倉の修験観得なり。満面に笑をうかべつゝ。間を出て徐歩に。ほとりちかく立よりつゝ。扇を颯と推ひらきて。房八を竪にあふぎ横にあふぎて背を拊適愛し心地よし。かくてそいぬる日の相撲の恥を雪めたり。奇妙々々。と小鼻を張らし誉れば房八誇貌に全體八幡の相撲にも負る筈ではなけれど。俄頃に轉ひ筋ちがへ。おもはぬ怪我で此奴が功名。さん身も先途の腰愈に些踏へと敲したる足をおろして立替れば観得いよゝ頼さし。訶ながく両三歩逡巡して頭をうち掉。いやなくをれいぬるは一口めに頬のや燒ん窮窘ば追へべしを。和殿が十分なてのけたれば吾儕が百遍踢るより。格別に痛つけし尾を見せし犬田は打栄ありしおもとの傍にうち措て例の酒肆で一献酌んといそぎつ。やと譲るべし房八は衣領を斂めて脱捨し下駄穿ながら又小文吾がほとりを近く立よりて佶と疾視大田とおでへまだ済ぬぞよ。のべたるすのなかあれどもそれこれ今宵は立さくいふん。りきみしをせんとおもへど寝刃ありしく候てねよその折留守を使ふなといと憎さげに期を推して先に立る観得ぞうち見てゆくかに市中の酒肆へとてぞ伴ふ且しく小文吾八頭を撻け目を又見仰て思ひ儕く又見人ども寄ぬ安からぬ外に花掻流る汗の麻衣あさましきことが身ゆゑそとゆら屈く立あがりつ裾に縢く沙を拂ふて襟を合し。さるにても房八が日ごろに似げなき無法の挙動八幡の相撲を根にもちて身をも親をも忘れたる物の勝負は争ひの端緒と知れど名を好み誉を鈎るは世の人の情といひながら原を他人の争ひを身に引受て妹夫とよりわれや怨を結びたる皆是吾儕の心ならぬ渠いかなる狂ふとも打倒さんる難くもあらねど敵にあらぬは親の戒。知らぬ妹は兄が慈悲互に身みるは互の幸ひあるが身ごもりの人なれとのおもふを入なるで笑ひもせべし挾しもせん相撲に負ぬこれよりも只勝るは馬鹿者の無法なりきと嗟嘆しく乱れし鬢を

うち掛つゝ再び歩をいそがして邁こと僅に三町ばかりなるに。藁塚のほとりより捕手の兵八九人簇々と走出て逃さじ遣らじと捕籠たり。かゝりければ小文吾は驚きながら。欲遑に紅く花さかせたる。帕痒樹を小盾にとり。某犯せる罪あらん。何に人を認違て捕んと欲するぞと辞せはしく陳すれば。かれ小文吾争ふなと声高やかに呼はりて。野装束せし一個の武士。この地の荘官千鞆檀内を先に立し。文五兵衛を擒捕まで。数兵等に牽せたり。物蔭よりして顕れ出るを。小文吾は信と見て再び驚く親の縲絏にかゝれるを。いかにとすべきやらも。其処につれて立るべき件の武士は。さもこそと間近く立対ひかへ小文吾。汝は是許我殿の御内にて武者長を奉る。新織帆太夫敦光なる者識すや。癖者犬塚信乃とやらんあるものゝ云云のよしによりて。御所を騒し奉り。捕手の兵犬飼見八と組撃して。芳流閣の屋の棟より河原面に翻れし。船の中に滾落て跡を暗して落亡たり。

かくてそれより。某追捕の厳命を受たまはり。昨夜通宵路次を急ぎて水に索め陸に故に郷間にこの浦に来て且く長途の疲労を休へ荘官檀内に相譚ひて竊に信乃を索る程に。件の船を葛浦の澳に漂ひしを。けふ辛くしてこれを獲たり。その船にありし。その人あり。かの信乃は見八を水中に推投て陸より逃れ去りぬと欲なれば此の浦に潜居るもやあらんと思へば檀内にさゝへてぞさて市中村落かちもなく。竊に穿鑿してけるに。汝が親古那屋文五兵衛が旅宿所に昨夕両個の旅客泊れり。その一個は今朝立去りぬ。又一個は滞留せしを。此彼共に武士なりと縡詳にいひきこえつるよりて。文五兵衛を荘官許呼のぼして。彼旅客の相貌骨法。又その滞留の事の趣厳に質問しに。返答甚胡論なるのみ。疑を累れば彼滞留の旅客こそ正しく犬塚信乃なるべしと。偽らば文五兵衛も亦是同罪なるによりて。索て縛めて。兵共に牽立させて

檀内を郷導すとし。且またみづから古那屋に赴きて家捜せんとて来つる折檀内進みて汝を見るに彼は小文吾と呼るゝもの文五兵衛が冢子なりと告るによりて。これなりや識らずして見放さゞりしものにあなれば隷兵に下知して遮留め縲の如くに及ぶるを。親の縲絏を救んと思ひし汝先に進みて件の旅客を搦捕せよ異議に及ばず親を本とし身を縛の索を破んぞあらず隨にしてまうせ旅人の模様ならばゆるすや。と威しつ賺しつ説示せば檀内も亦進み出小文吾豫て知り侍らん。當領主千葉殿は御所の御方にあらねば領主の下知にあらずとも縲怨にあくらん事後の咎を脱とるもかとても御所ざるの鄰郡を騒せそあのびに穿鑿して信乃を搦めよと仰せしとぞ。かれば一旦彼癖者を癖者と知りながら宿貸さるゝあすとも自許せば其外を免されて賞禄を賜ん素より信乃は武藝抜群勇力無雙の者なれば詐計て搦捕る欤不意を撃て刺殺し。其首捕て献らば親の縲絏を釋のみならで御所の御感に預らん其身の名誉領主へ忠節和郎は拳法と相撲にて名我近郷に知られしものなりや抜も力もかゝる時播して國益あれと思按を決めてあん報せよ寔に大事の処ぞと名利に喩を口功者捕手の尾頭に使ふべき底心とぞ聞えける。小文吾は目に耳に見るに就き聞くに就き苦しき親のうへ義を結びし友のうへ。浮沈存亡この時に何とかは掟て被て驚き心地はされども色にも出さず頭を擡仰の趣悉く承りぬ。あれども某は昨日の祇園會にて潰退に推されて昨夕もけふも宿所に在らぬ目今飯宅の中途にて不慮に其咎と蒙りし親の縲絏に驚くのみかは其旅客は武士ならん百姓ならんも知らず見もせずそれともかくも有れ親の縲絏を放させ給はんと思ふなら案内とつかまつりなん先に進んとねがひ願し所存なれどもその

る虚説ゆゑ。昨夕泊し旅客なる家捜をせられぬる。外聞をいかゞはせん。憂き板戸に低き檐。葺藁屋も賤きのゆへ城郭證据分明ならざるに。貧乏隠れも家の内を隈もなく捜されんはなかなかに恥にゆへまでぞや。数ならねども一丈夫。人に侠者といはれたる名を惜めば。歎かるゝもなかなか餘あるものなれ。加旃その癖者嘗滞留志でも武藝勇力捷でたる大刀風なれば鋭からん。さらば多勢をもてすとも捕逃さじといへばいへ。三十六計欺詐を首とす。されば隊勢を遠離て某に任しあらば。何事も親の為なり。もしも宿所に立入ずともその旅客が在所を詐計て搦捕ん。縦その便を得ずとも。酒を強て酔臥させ。寝首を捕て献んとの謀は。いかでとあらしくて。當坐を脱るゝ才子の辯舌説勝されて。帆大夫は然もこそと打頷き。汝が意見説得て理あり。信乃は万夫無當の勇あれども。隊兵に砍られて。此度も亦捕もらさば。毛を吹て疵を求る過失なきにもあらん。現後難を脱れんずらし。さらば且く汝に任せん。よろしくせよかし。といひつゝ櫃内を見かへりて。骨法圖をへと手に取て。さやくと推開き。小文吾是は彼癖者犬塚信乃が骨法圖なりけり。武士ならず百姓ならず。その旅客の年紀全骨までその図に引合し。一毫も似たらんには詐計寄て搦捕よ。錯認慎とも人たぐへを咎あり。市中の出口。江河の船場は土兵を借かく嚴重に守らせん。されども遅きなるべし。今宵一夕を限るにせん。明なば有無なるべし。なぞなろうぬる故と。骨法圖を隊兵に遞与になん。小文吾は受とりて巻て懐へさし入れて。襟を繕ひ。既にかう命かけたる奉公を仕れば。願あれば親の縲絏を宥して某に預させ給へかし。とのせも果ず。帆大夫は高やかなる頭と共に声を高ふ立。否ざる絶さて稱ぬるよ。親をその子に。子をその親に委ねざるは律令の本文。汝なりとて一つ穴なる貉ならん。彼虚と衆らぎ癖者信乃を搦捕るとも首捕るとも。


帆大夫途に小文吾を搦捕んとす
文五兵衛
小文吾
新織帆大夫
荘官たん内

両箇に一箇功あるべく。文五兵衛は人保の親を救ふも罪なるべし。まいて汝が心にあらんや。假令願ふところと叱懲せば小文吾は忽地望を失ひて嘆息しつゝ頭を低又いふよしもなかりけり。當下莊官檀内は帆大夫にうち對ひつゝ曛昏になりなば彼癖者は夜に紛れて逃亡るものやあらん。とく小文吾を返させ給ひて出口の戍りを肝要なれといへば帆大夫後方を見かへりて現日は海に没んとすなり。小文吾は且く放ちまゐらしつる義に偽りなくとも、かくも功を立て莊官許されて出よかしと邁とりいそがして文五兵衛を牽せつ。檀内が宿所へとて衆皆齊一身を起せば小文吾は何とせんと応もあへず立て目送る子よも親まさに今日のあはれさはいかにそ度見るにさへ暮ねども心の闇に迷ひつ。後へ牽るゝ縛索未の歩申過ぐる鶏は物ならず別れの悲しさ誰が人告る夕烏宿巣をさいふに引裂れ歎きの杜欲願事をいはぐ心代千早振神しそ知らめ。

子は親の為に隠し、親は子の為に隠しぬと直なる道のなかにてしかくさとあはれなることのおもひ立さまで追立られて跌く老の背影杖にかゝりながら呉竹の暇の藪に隔られ看てみえがたくなりにければ小文吾は慨然と胸を拊ち歎息六十に近き親の縲絏を釋ことは易く又難なる義の一字も亦重なる故なり。且く艱苦を忍びなば。とにもかくにも救ひなんや。父をも許らく彼人ても縡安らけく恙なく尋思もするとも、浅組ぞつくとなりの相の鐘の声きく。恒ならぬ胸に応へて天うち仰ぎつゝしばらく女々しくもしつゝなく物を思ひながら宿所のかたへものして。わらはに躊躇ことなみ。なほ諌て端折し裾より長き腕刀も縡突詰し二軽の家路をさしていそぐにも倫間謀者をめく跟らるゝことはあるやもせんといへば四下に眼を配る心隙なく折るまで夕の風の涼きゆふも汗を喘ぐばかり。まつ檐下近くなる随にとりん室の店前は過半簾に垂籠て寂寞として裡面は暗く戸代ゆる口は一枚繰掛たる戸を閉て進入りつゝ燈火を

とひとりおもひつゝ。そが伏庵へ赴けば。素よりなる燧盆火を鑽音も外に憚る。二ッある行燈に幸ぞ移しとりて。一箇は店前にさし置き一箇は引提て子舎に赴くに。現八は左も右もなく信乃は只ひとり病臥したるのみと驚きながら。まづそのやうを訊るに信乃は起る程ならん。その金瘡の破傷より猛に腫疼る苦悩堪がたし。又現八は薬を求んとて潜に武蔵なる志婆浦に赴きしを信乃は後に知りたるのみ又文五兵衛は裏に在官許ありてさく出て去りしを告るに呼吸せはしく声細りて小文吾は憂の中に又一層の憂をまして且苦しき限りなれど親のなきさへ居ればこのまゝでも親に便なしけれどなきがれる懇に遽しく火を起し粥を烹復しく勧るに信乃はその疼痛の些しおこりて寝ながら絶に箸をとる折から店前なる簾を掲て誰もをらずや。をらずやと呼びつゝ裡面に入りぬめり。是何人ぞ其は次の巻に解分るを見て知らん。

里見八犬傳第四輯巻之二終

南總里見八犬傳第四輯巻之三

東都　曲亭主人編次

第三十五回　念玉戯に笛を借る
妙真哀て婦を返す

小文吾は粥を再煖てこれを信乃に勧る折。高やかに呼門して裡面に入る者あるけれど応もあへず立とまりに障子を礑と引閉て店前に走出て見れば是別人ならず。鎌倉の修験者念玉也。左手に大なる校尾螺を携たる。右手に渋染の扇もて円月のあかるばかりにあふぎつゝ。店行燈のほとりに坐す。小文吾をこなたうち微笑て関取目今還りつる。我も昨夕の神輿洗は笑しに倍て熱閙なりしそのはての比彼此の侠客共が角巻は殺風景何の浦も壮者の如は武速進雄の神慮にも測るべし。今朝還ると

ならひなれど。濱邊ハ夏を忘るゝまでに涼しくもあり。蚤蚊もあらざれバやすらかに塩焼ながら幸ひ世をわたるも見きゝしつゝてけふも。彼処ぞ消しつゝ暑裏に和殿の力を借りて。争訟は全く捷ぬ。心にかゝる雲霧さへはれ。緯の序にさくらの舊跡真間國府臺のあたりまでも。遊も歩くべきなるとて。長逗留になりぬ。明日歟明後日ハ帰府すべし。今宵時の程にこそ又厄會にあるべけれ。と他事なくいひきて小文吾ハ。わらぢもぬがずと奴人ども出てゆけよのひとて。困じ果てゝ沈吟ぜしが。さてもや留別にあらねども。然るを今宵ハ心ばかりの饗應をすべき答なれども。いかにせん。この土地の習俗にて。婢兒們ハきのふより走百病させたれバ一人も在らず。親さへ人に誘引れて近郷にいぬれば。留守ハ唯某のみ。庖廚の事に疎くとも夕膳を進らせん物ほしうハなきかと問バ頭をうち掉て否。今途に飯も酒も。たうべて來ぬる後なれば。縦百味の飲食でも。翌までハ腹に席なき。例の一室に客ハあらず。幮貸給ひね。とく寝んといふ程に貝を突鳴くやと声うけて立んとするを小文吾急に推とゞめ。まづ行燈を置さして奥の院ハ常闇へ。灯を挙もすべし待ねといひつゝ貝をつくづく見て。そハ珍しき大貝也。何処で購ひしと問に右手に拿たりし。あれハ鄰に濱邊なる人の家よりあまた些の酒價と換たり。水花盛なれバ一升なれども二升なりとも。へつらへ是見給へとさしよせるをそばまで拿てと見かへり見る現犬ぬる梭尾貝え濱邊近く處にされず。かくの如きは多く見れど物ハ始む所に聚べり。梭尾貝なれバ修験者の目に在らしめにてとうち微咲べ念玉も笑へ傷を見ることなく彼処の壁の下なる尺八の笛ならずや。和殿ハ笛を好る歟。こゝ歟目歟と指せバ小文吾も透し見てかつ。いひて尺八は某音曲を嗜むにあらねど。近属俠者といひてぬるハ一箇印籠一節切を腰に著ぬハ稀なり。それもそや今ハ廢ましり彼ハいぬる日

誰なるが。措遺しつるものにやといふ間に念玉ハ膝を進め臂を伸しつゝ件の笛を撈よせて袖もて拭ひつゝ歌口を澤して梵論ことゝ吹試み。是はいとよき尺八也。その主定かならねども今宵一夕和殿に借ん寝るよりハ外にせんすべもなき旅宿なるに甲夜の間より幮に入りて蚤の腹を肥さんはあまりに興なし。況も今宵ハ庚申なり。拙くとも吹てこゝろ徒然を慰るこそ究竟の遊ならん。遂くまづに月をもめづべし。のぞくとのひらけく笛を携て身を起せば小文吾ハともかくもおん身の随意慰めたまへ。その尺八ハ要なしと回答て聊く遽しく。燭を秉て穏を行燈を引提て念玉を別室に安内して預りたる行李を。ども遮与しく舊の処に来りつ。ひそかに嘆息して腹裏に思ふやう。揖て加く彼修験者に今宵の宿ハ影護しきぬべしとく今更に出しがたし術も有り。よしや強顔のひとつらくも他処へ移さバ疑れん渠尺八を吹遊して夜と共に月を

倹んとのむしハ心あまてのる歟させなる悪心ハありとも密事を知る身の仇へ刺殺して口を塞んぞの機に臨で変に応じてかくもせばそれにかハ病臥せし。奥なる人のうへなりし譬へ病難のあらば命に恙ありとも稲塚にて帆大丈に。諾ひしる理まではとひ延さぬ手逼の難題その折に遮与されし骨相圖ぞそ心憎くも響あれとも慌しくくちハうち披ひしのさなかが復よくあんなりやと懐へいれさて入ながらなかへふと左右の袂を撈探て衣領を披ひて振へども袷紙さへなかりけり。原来途すがら遺せしかも夏ハ衣物の薄かるに黄昏時のいとせはしく走り還し彼処より遠くもあらぬ程なるになかりしもあらば鈍まりかり免遮莫要なる物ハ惜むべきにあらざれども倘途にて人の拾ひ許しなば其疑ひいよく吾侪に係るべし門より内にありやとてそのあたり隈なく立遶れども梭尾貝に足踏入しく仰ぎまに輾んとして推駐めそれも何ぞと取あげてうちみれて

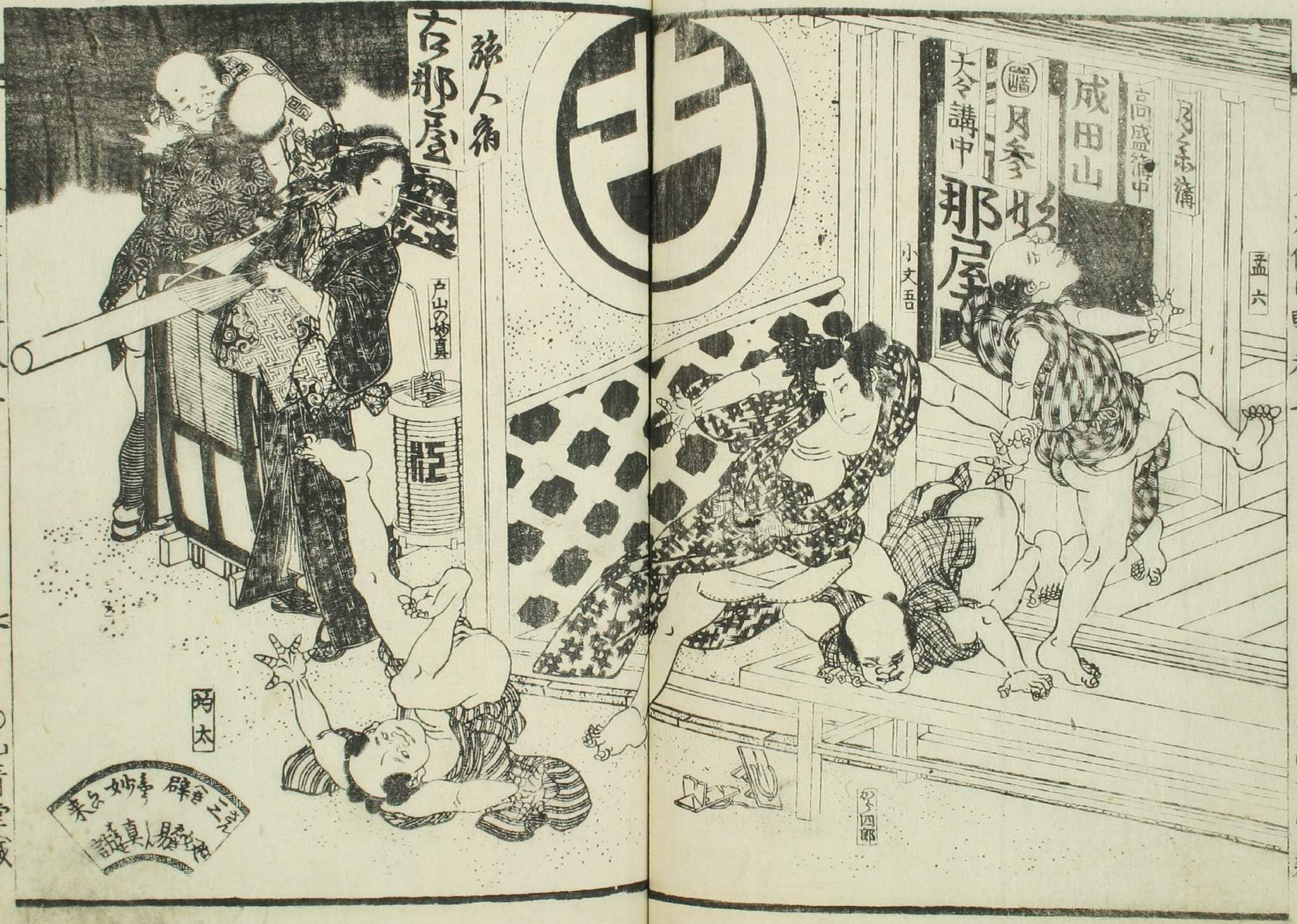
更に奥をしらざりける。不覚に旅修験が笛を愛てこの貝をぞ傍にもちて忘れざり。譬ば此梭尾貝の海中にして生るときは運動するのみ声を聞ず。その肉を枯し。殻を留め死物となりてぞ吹るゝときは。その声数町の外までも聞ゆ。人のうへも亦如此。その居を失ひて他郷に浮浪するものは鱗介の水を離れて久しく帰るによしもなきに似たり。況罪あらばいとゞしく沈落し。隠さんとすれども人にはや知らるゝは声ある貝の吹れてその音の響わたる如し。且罪ある人を罪するものはその沙汰の逆なるゆゑ。その罪ありて咎を稟る人威勢に壓るゝときは順て禱る験もある世にあれ果敢なく幽微なる白よむよりそれぞ山伏の萬より稱る名のこゝろもつひにとかる死順逆の峯まで霽るも雲もなし。それのみならずそゞろやまふに合ふる貝を擲ちて眼を睜り氣を籠く言に出さねばひとしく苦しき胸に當る火のあるは恨みえかくてわかれしは何ぞざりしも又骨法圖を索んとて遽しく紙燭とりて門邊に出んとする

程に。皆よく来よりと外面に囂しく呼わたる。樞戸礑と推開きて関取在りやと額さし入れて塩濱の鹹四郎を先にたてゝ板扱均太。牛根孟六などゝ呼れたる。土地の名だゝる破落戸。三人齊一店前なる板床に推並べ。小文吾へ見えて紙燭を振滅し。氣立しるく入ざまなる三人揃ひて何事ぞとゑぶるに坐せよ箕子が挨んとの外せしも果して鹹四郎は手拭を肩に投かけ関取今宵は些物いはんとて三人を佛が臺座をとるまでに来迎せり且録に居て拜まんとのへ均太も傷よ。鹹四郎戯言吐ども。われ一番地取の夜稽古に。三人がまづ肩を入まんと禁ぞ。信とも見えざ孟六も亦進ミ出関取斯皆うち連拉て来つるは別の議にあらず。年来和主が弟子といへども根が技もよし地力ある吾們なるぞ彼此の辻相撲に怯を取らぬ犬田は現よき弟子をもちぬと人が誉ればおのづから和主の鼻も高うなるまではけふ一日で見限りとて浮世は倒さまなり。門弟違うて師匠を破門

その趣をいはんに。この三人ハ總名代今よりしてこの葛飾に和主の弟子ハ一人もあらし。さるよしハ今より頭高に口を利さぬぞ。忘れたりとも恍惚るゝと諸声ある諸胡坐嚔けハ聚る蚊を打て膝に拍子をとりてけやしと小文吾ゆのく冷笑ひある咲や奴原がさらぬ物をのみもぬ欤。総角の時よりしてこれとも相撲を好みし父ハ関取なとのみもども世にまろふにもわらせ。寔に田舎の素人技弟子ハあまたとも又あらくとも吾儕に物を缺べし。実情由ぞる立ハ面り。望に任して破門せん。その情由をいへかしぞやと問ハ三人ハ膝立るほしいかども知ぬるところぞ。昨夕濱里の拘擇を和主がひとり截判れける適俠者とられよ似ず山林に在人されし栞崎の為体。間道よりし筵にうんる人よりし人の風聞ハ千里を走る世の常言。誰とくされぬものもあらし。泥膾揚く踏まれる師匠ハ弟子の面汚しさるによりし破門されるそ朽をしとおもふぞや。敵手ハ正しく妹夫借財でもある欤にござれされくるほ阿容々々と猫の糞踏たる花の肉ぬハ路傍の弛腸のみ和主ハ門の腰脱犬田畢竟八幡の取組にあづかりし團扇ハ怪我の功名緊要の時もハ山林に手も足も出ぬ薬鑵の湯煮章魚真赤よなりても恥知らぬ陰囊をあるべ。穀潰しや実せや成らざれ舌を咲さぞと訛声高くとぶらしく異口同音に向火を焼つくまとまし小文吾ハ騒ぎる氣色なくある復しくもいと咻し扶揺よ羽を搏大鵬の志を知らずして共音に囀る群雀に囑賂を養ふてとまし。ゆへあらぞ栞崎ふて房八が敵手にあらぬハ親の為こぶ為彼ホ夫婦が為負るハ勝よまるとあり道理をさらぬ白徒を避て通るハ羞なるぞ。そを名のおぞに怯せしと挾まるめくあらべくのき吾身に絶て痛からぬ情由ぶに笑けハ要へものし。とく邁と追立まべこ三人齊一身を起し。邁といわども去ざらんや。師弟の因もあくなりても。この一郷の面ぶせする人の口ゆハ戸も建られ。他人にありし後日の

手形に極印打んと。鍼四郎が肉を拳と共に足を罩ふく筋斗を打し。續く蒐る孟六と均太が腕を捩揚て。起んと蠢く鍼四郎が背を楚と踏居させバ。二り人ハ足を翹け面を皺めつ天うち仰ぎ。ある疼痛や腕が抜ん。放せくとぞうに共音に弱る鍼四郎。かくぞめげんて大の字に身を平めつ。て眼を瞬りある苦しさに堪かねし人あともあまき目子が飛も出るばかりにせん背骨が折るゝと叫びにあへぎ。おのが名にあふ塩辛声。敷板掌て喘ぎけり。小文吾はさもこそあらめと懲せし隨に手を緩めず。奴原骨にあたへし。釱奴怒ぶハ親の戒人の拳を禁るのミにあらず。挙て抗るにあらぎ。是までの奴がのに一度ハ許をなく。ゆけと孟六均太を推遶らしてひとつよせて外面へ。ぞ佗撲地と突出せバ。三間あまり跟と走跌し転輾ぴつ。又鍼四郎を引起して項を掴て推落すバ糾まるが如く爪走しておのれあまりに倒まる。皆貝くハ泡も起ぎ狐の如く

ちゞくまりて猫の如く背を高うして。やうやくに起あがり或ハみづから脉を診ま或ハ腰を摩沙挲り。膝頭に唾を塗つゝ口を喝め眉根をよせて此彼等く息を吻送にしてよりかれ捩挟くやと諸声に立あがる。鍼四郎ハ萎の籠に啼く如く舌うち鳴らし。均太孟六疼ハ去りきぞや。俠骨を磨けバかゝる事の四訓ハあれど利生ハなし。間のわろさよと呟けバ。二人ハ倶に嘆息し。循環がよろしくバ七難八苦ハ安婆の厄力に負ても口に勝のがれるのハ意地あれども。いかぬハいかに弁飲の地酒二斤ぐ氣をあふさん。弱るところと慰める。均太ハ腰を擦撈てあてろ遽てとゑかうなんらう等々玉を送しつけとの間に孟六も足に踢られて透しつんてあふござると連綿錢三百遍与せず。引提て誘よく先まつみてか腰を反しつ折んがちつれ拉て野干玉の夜のまかよふ味酒屋三輪の杉の棄栞せし馴染の店を投てゆく足音絶て寂寥なり。小文吾ハ行燈の戸口を出とら推向て。ある外面にひそうけて


月参講
高盛講中
成田山
月参
大？講中
那屋
孟六
小文吾
かぢ四郎
旅人宿
古那屋
戸山の妙真
舸太
其三 會碑妙真女なら來
首ちか房八真んを諺

門の戸礑と引よせて。樞ハ一重。夜ハ五鼓打添る里の鑼子木も。恒よりハ早き心地して。僂く獨うち点頭き。その頃の夜の短さよ。今暮ゆくと思ひしに。白物們にかゝづらひて可惜時を移しつ。彼奴等がよしもなく買かゝりし高声のさてゐる奥へ聞えけめ。かの人ハ其処にも彼処にも影護しとおもふまゝ果ぬ尋思の片胡床。膝を抱きつくづくと思へバ悲し親の為今此ハいかにしてこの夜を明しあかさん。暗き処にわらはせず寝られぬまゝに蚊のらんいと痛し限りあれども今宵一夕堪へ田圃を沽り家を售り財なく贖ふに足らずとも己あり代りても救ひとる術あらばや救ひとらん。奥なる彼人破傷風の妙薬ハこれぞ亡伯父の傳法あり。然れども求め易からぬ。鮮血ハ今これぞ股を劈き絞りを取るとも何ぞ死がそれに合まれ女子の生血絶てあらず。これとこれぞ身を傷りともせんなき支え。只彼人を船に乗して今宵潜に走ん歟。いかにも里の出口ハ水陸共に豫より警固の觳兵ありとぞ聞く。それを殺閙して脱るとも。そハこゝろ父の命危し。嗚呼然りなれバ天つ日ハよに誠ある人のうへをかくまで照しあらざる。彼人ハ是孝士なれバ。これ親ハ是義士なれども有繫に孝と義の一隅を知るなら。善に與しく福ひなく義に仗て禍あり。然ども恨むべきにあらず。世に幸あると幸なきとあり。亦その人の善悪よ由りもあらざりけり。そを天命と知るときハ縦え元を喪ふとも。その志を移さんや。とざまかうざまにもしく暁るまで計策をめぐらせどもわらざる思ひしるの皆画餅となりぬらん。許我なる人、現八の邁ありせバ又商量をせんものを在ねバ便なく在るも便なし。いかにすべきと胸に問ひ胸に答へ憂わびしくの思ひを餘り。あやき明の鹿なうなくよ尺八の笛の音奥に吹遊む。なべて妙なる管の名も思按も今宵一夜きり。望ハこれぞ友のうへに心ハメル手人の智をカル手乏しくうちフサグ。紊れを何日かナヤスべき。あなそゞろなる遊びかな。彼修驗者ハ撥尾貝に

換つ笛を今ぞ吹く。別室も近きにありて隠れぬなる物の音の慰ハせぞ
なかくに心の憂を添るのミ。現さまくの浮世ぞとも。ひとりよゐるのハひあわさ
ねど子舎なる信乃ハやうやく身を起して細き燈火ようち鬮ひこうゆく末と
来しかたを思ふに就て猶あのふ果敢なる露の草枕旅の宿りに恩義の人を。
連係させんハおもろゆゑ郷に犬田が屈度の色に出しハひめとあり。加旃あわで
の翁ハ荘官許召されて甲夜過るまでいまだ還らず俟れぬ人の鬱寄て
高嘯せし物のひびざま皆おどろへきわぶるゝ村雨の刀失せしよりいと日蔭
の花とのミ凋むなる病著に身のなる果ハしられたり。絆の難義に及ぶと
やらんが刃に伏てられ死ん豈誠ある人の親子を見くも苦めんやよに惜からぬ
命なれども栗橋なく袂て今し額蔵の荘助が侍人もやつハ本意なからん。
濱路も亦不便ん玉椿の八千歳までと久後かけて憑みてしにかへらる殊

更に恨やせんせん歎やせせん彼等のミかハ現八小文吾資ある男を不覚に早る。
短慮と後にいはんかも。虎ハ死して皮をとゞめ人ハ死して名をぞ遺せ死を遁き
時に後死ねバ世に疎まれて恥多かり。あの尺八なるこころが為に弥陀の慈航の棹
の歌調舞の菩薩の音楽欲なるその雲路も俟りて期に至らバ刀を
把るさながらの力ハあらん。君も覚期を究めなる心も清しゆく水のかへらぬ
悔ハ只なし。特に面なし先考なる亡霊御遺言を仇にハせねど疎しかりける
愆より。野心間者と疑れ身ハ落人となるを果て非命に終らバ後ていかばかり父祖の
名をしも汚しやせん。不孝の罪ハ九ツの世を易るとも覺ひがたし。是のミ末期の
憾なれども過世の悪報と解ならバ佛説迷ひハ煩悩有無を離れて自然に任
せバ死るも生るも皆命ならんさあらバえにいかなく瀧の碎けても。あらぬ人
難て肝向ふ心の痛さへ今返さし。いとも切なる壮夫の恨をわがミを外にぞも知るや

ちるもや尺八の声と倶に吹遊む夜ハはや五ッ半輪の月に代ふる辻挑燈を轎子の簾に照させて引そはせて外に来るものあり。年の齢ハ呉竹のよそぢあまりの孀婦の尚黒髪を惜げなく断る侭の短髻に結留の髪挿も目立ぬ無地絽の羅衣に白帷衣を下襲前結せし繻子の帯に結副たる韓組紐を柳の腰に山鶏の雄の下垂尾の長庇向上て門に進ミ近つき物まうさんと呼ぶ。門ゝ樞戸をさと引開れバ小文吾ハおのひとりなる。頭を擡てとゝはんとする折しも母なる戸山の妙真なりけるぞや。甲夜過るに只一人欸何事ありてか来ませしと問ハ微笑うち点頭いる吾儕のまゐるまで沼藺と大八をゐて来つれど途にて暮んとおもひしが彼にも轎子に乗しつれ吾們も持病の血暈あれバ轎子に舁せて揺れより歩よりゆくも夜行も涼し。よかるべく来つるにはからぬに。従者倶せんもさほどゆかし水入らずなる推薦客。時ならぬやおのれまでん巨戸を開くまじねと他事なく小文吾ハ今霄ハなぞや折よく来る人の斯多かると鬱悒かれど白地に告べくもあらざれバさりげなく欵待つゝそよとて来ましゝ且誘なへと上坐に勧めて躬て門の巨戸を内より廣く推開ければ轎夫ハ土間に息杖衝立進さ入、板席なる框際まで轎子を横ざまに舁居て簾を直と掲揚るぞとみえしかバ沼藺ハ熟睡せし大八を膝に乗しつ、縮羅の單衣緋の繻絆帯を段子の黒入茶の交野賽を片締しく照斑の玳瑁櫛笄鎌倉様に田舎備ぞ花やかにみえても十九なる蘭し子もちの夜の鹿秋にも遭ハぬ別来し心の痛ミ色にみえぐく轎子よりやをら出んとするを揺覚されて泣く大八を抱れあやしつゝおぢつに背を敲著け家兄皺暑に恙なく家ぞもいよいよ健にをハしまさんやとぞらする低る頭の病みげに撲地と落る釵児も別の櫛もとうち歎く涙をみせじと背向になりて闇なれバ姑の背を楯に取て走る當下戸

山の妙真も轎夫にをしへつゝ、喃人々よ、夜中は過たれども吾儕は今宵退る。かしこの前面なる杭根のわたりは南を向て涼しからん、且く其処に俟てよとのたまふに、皆承りぬとて轎子を外面に擡出し、巨戸を礑と引よせて辞し去れば、樞戸を又おろさせて閾をまたげる且、妙真は小文吾にうち對ひ、阿男こそ臥房に入もあへず、狭く堪がたきまで炎熱なるに、羞悪なくてぞとゞめ去年までは息婦とも孫をも神輿洗に来しなれども、このたびは何やら事のあるかして出しかね、本意なかりし。婢兒達は知らずやと問ふ言に、榮に花はあれども、小文吾は兩夜の月と霽ぬ疑念に眉うち顰め、否家翁は人に誘引れて真間へいられて、いまだ還らず。婢兒們も走り百病して、奥には止宿の修験者の、折のあしくて人氣なく、款待態の疎さよ。納戸は絶て風も入らず、且くあらで相譚ふ人、扨も婦人の夜行を厭ひつゝ、沼藺をつれてもあらで來ませし大かたならぬ故にぞあるめと問かへされて、妙真は衣領推

緩めつゝ、小膝を進め、現推量せらるゝ如く、いと恥かしき事なれど、凡貴賤も男女の子もてしも、親の隨意ならぬものなれど、年来夫婦睦しく、孫さへ擧たる母は老樂幸あるものと、近所の人々にも羨まれし、今恥しき夫妻の口舌の纏よりて、憎からぬ媳婦を離別の断して、憎まずに來つる心の苦しさ、神ならぬ身の誰なへあらんずや。去ぬる日の八幡の相撲に房八が打負て歸りしより、左に右機嫌のあしけれど、敵手は沼藺が家兄なり。慰めかねしとの子の當惑一日二日と歴る程に、何とかしけん房八は、生涯相撲を取らじとて、額髪を剃落せし。昨夕俄頃に濱邊の抒擇和げなかりしが男の截判如才あるゆゑ、わきざめれど根は腹だちのおさまらぬ、篇されこそ房八は憤恨甚しく、女房去てとの確執の黒白を判るごとく、母が諫も用ひぬ短慮悍婦は去歳の秋古人になりぬ。今さらに誰とても相譚ふものもなさればこそ、人に送られて

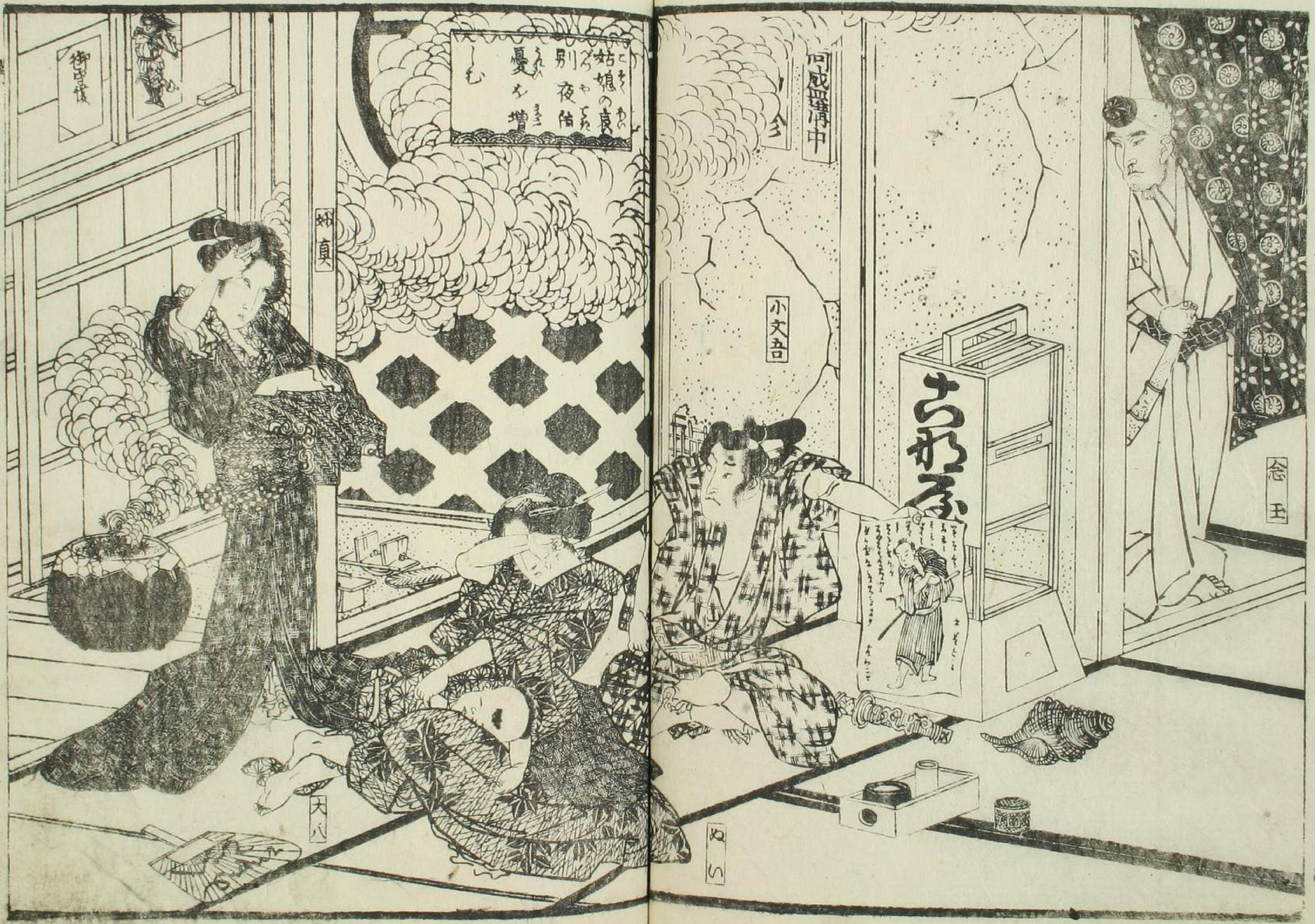
情由も得告ず返さるゝのみ。わからねば母親の役なる縫ぬ役に倶して来つ。熟に馴染て濃中を裂くはらからの葛の布縫合さへせぬ紊苧のくりかへし。浮世の義理と丈夫に勝ぬ女子の甲斐なさ。可愛や沼藺は磐蝉の鳴より外の術なかりき。心の誠を知りながら男　あるまじく慰めかねて扶けて轎子に乗する折。大八が跡追ふて泣くは理り母と子の別れを虫が知らせて挽携る袂を振払ふて出されもせぬ。年しもせねば四ッといへどその冬の師走生れの年弱なれば。まだ乳房をも放さねば二葉の小草なる。その森の蔭ならましくのぞら延る月日已て綾も合轎に乗して来つるを。さらば外祖さへ許よくゆきて美衣著るをえせざらん。物賜らんと餘念なく膝踊せし稚児の心は智恵ある聖乎神乎。門まで来つゝ母親の膝倚子借て熟睡せし夢の浮橋中絶る。歎を知らぬが歎きのひとつ涙の種を蒔なくに憂愛の毎に生出て忍の草とやいふならん。愚癡、女子の苧車託繰返し又かへしても返らぬ難面離別の情由。発てにもたゆらの執念もかくにも執ずくやしもあらねど。いとゞ酸鼻き姑の言葉露を結びて添し沼藺はよくとぞ泣沈む。小文吾はつくづくと打ちなかめて嗟嘆しつゝ言詳する大家の口状大かたならず。ろくろを沼藺は又かしこまりてのみふるへわなゝき。いふのんしぬるやうに外に去る深き意味とあはれやいかにぞと向ふ母子が面く頭を擡げ女子のうへは五障と三従と昔からのをしへあれ。ながらぬ身がなれば良人は理あれども情なきぞ。四年以来声立てゝいひ懲されしこともなく心を小めて家の内風波立ぬ取る楫の朝な夕なの船日記世を渡る業も人の手に任せぬ身ぞ小暇なく馴し住ひの川添の門の柱は朽るとも死なでぞ出されど。とあひしあふひき飽もあかれもせぬ中をさまよく還る親里の閾もこえかねん。と只願ふは両方の心なきの和ならば胸騒しき風雲の舊の峯上にかへさまほしけれ。かれこれと迷ひ来し涙の雨もとく過て是よりぞ袖の乾きてん。吾儕は撲て傷

らむ。いくその艱苦を受るとも。恥も厭ず恨もせず。品よく応接しぬるならば。十日の飢渇に糧を獲て。千年の齢を延んより。これにましたる歓びの又あるべしや。とばかりに涙坐にあふれ落て。膝に抱く子も袖濡されて。隻手を空しく使はぬ瘖瘂ぶに撓げるを。当下小文吾は又さるらぬ釋て。氣色稜ろ行燈の灯光に妙真を佶と見て。大家離縁の趣は大かたならず聞えたれど。今は一个の難義あり。沼藺は親の女児なり。某がとてもかくも房八に妻せたるに。又この家は親の家。親の他行に離縁の判を兼て引が道理に背ん。況大八を幼稚も母に隷ふべきものなれど。老父は今宵還らん歟。明日も明後日も逗留せん歟その時日は定らず。留守ゆゑのしや。女弟でも一宿も留めなん。今宵はこの従ひて親の在宿あらば。日に又出る房して来ぬひね某が知る所え。と敦圄わくる立んと底はし秋を楚と引とめ。阿舅その辞がたく。氣をとりま鎮て稍ありて。推居て鼻うちかみ。姑と婦の中のよからぬは世界の不思議と人もいへど。沼藺はよろづ老実なり。房八に弥ましく孝行にて。あなたより又房八に弥ましく憎まれぬものを。のがまくらきさして外にみえるべき離縁とならんを。夫の意地一旦立て後は又治る術のありもやせん。縦爹こは在さずとても。あつき爹この家あるをも。爹々の宿所へ女児を送りて来て返せば。留守の役受とるものが道なるべし。又大八は坐艸のうちより左の拳の人なき。あるぞ。物を含ることかなはねば。尩弱者をも持あまし。母に添して来せし秋と。おのづからはや知らむ待れど。尩弱の孫を可愛さのあまりにはふりにあてて待りあふる。を母に隷て来せしを子に覊されて。房八が武れちかろも折まよりし。孫共侶に婦をしも召入させんとおもひしど。掉頭の花歟掌の中なる玉歟と。一日も側をはなさぬ一個の孫をまるに留めて。祖母ひとりきは別れて何処へ還らるべき。卷八

とまれかくもあれ年歳ハまだしく智恵ありて。身長も伸て庸尋の六七ッなる侲子にも劣らぬものなれバ。その里の子共が綽名して大八とのミ呼ぶ程に。祖父の命けて賜せし真の名をバ呼びもせず。闔宅のものまでも呼熟し。彼が渾名の大八へ原是車のるゐにて先輪といふ謎ことゝ後に暁り疎しく呼ど。おのれど口癖のなほらねも現名詮自性の。ぐ拳の人なをにあるうしとのを念力も届ぬ醫療加持祈禱。神に佛に願言をかけしも四とせよなるやなれぬ要なるつまでそなくなほら告るハ隈なき心の誠。その疑なく大八を留めじとなるが。渠ハ旅客房錢を出さず渡世に負て。宿貸も犬田との獨行にありながら。まだこらへしも母と子同行二人かくとも推辭もえぬといひとくいとと口雄々しげに淀なかりける辯舌を心の憂ひに濁さずて澄して辭の歩水渡しの。現船長の母なりしを小文吾ハ信乃が今宵に限る手遍の難義女なるとて留めかねてぞ密に送

知まじくべきのひまもなくて返さんものぞと初よりおもひしかバ。今妙真が理譴て説ども屈せず冷笑ひ口賢しくもいふやう。客店のあるじなれバ旅客にして宿借るにすら甲夜過て座席も暇き宿にも餘る旅客を推辭もよふなきことなるぞかし。なほのみ大八を祖母に俱して還しもせん。沼藺を留めよといふハ渠今親の家なりとて返さるとも離別の状なし。離別の状を添ざれバ是私の逗留なり。縦同胞なれバとて男女ハその差あり。傷に人なき留守の家に尚ゆゝしき妹のを留めおく暁ちえず。瓜田の履そハ兄なるが影護し。枉て今宵ハねそく還せ。去状なく復来まじといふせも果ず。妙真ハ思ハずほくとうち咲ひ。原来おん身ハ離別乃状を望しきに云云と固辭なる状なさるゝるぞかし。一文不通の夫なりとも妻をさるに離別の状を取せざるものあるべしや。其を出さぬハ吾儕が情誼遮与せる再び結べき離縁の状ハなくにありといひて帯の間より一通の状を取出しつ。ほとり近くさしよせるを

小文吾は受取て見んとて披けバ去状なるで。裏に途まで書たる犬塚信乃が骨相圖に愕と駭く當惑の。難義はいつぞや見し鏡影は認ても。心騒ぎぞ。そゞろ卷て側に措き。こゝに許し状書ざるなる離別の状は三行半。世間普通の文言などの骨相圖に換へ。房八が所為なる歟。亦唯おやの所為なる歟と詰れバ。妙真顔うち見て恍惚なる大田とのそはおん身すら知りつらめ。滸我の御所より火急の穿鑿なる犬塚信乃と中さんを含藏するのみならず。親族縁者も罪せられんと嚴に徇られては這市川の郷のきゝなんぞ。あくもよくのなるなるべし。それよりのよしをやかによりて女房をさる房八を理なしとのこのゝしり。その去状を受納めなくは。沼藺はさらなり大八をも留めおかで送り来ぬる吾儕も本意なる心地ぞせん。その去状を受じとならバ荘官許へ参りて訟庭に浪速江のよしあしいはんそはさへ。おん身は事を好まぬ歟否のぞでうれ事を好まんならバお沼藺を受とりて。その歟否を又縡の難義あすやにそゝぐその去状なく許すべき歟いかにぞや。と問詰られて。小文吾は困じ果て。うち点頭大家さのをち急りのひぞ去状楚と納めて。沼藺は仰られん。大八をも今宵は某預るべし。有無の答はたゞ父の還りて後と房八にさへ待へなひ稀し一夜はそや更たまひのそぶせあへと稍うち解る辞の花柯折れては脆き袖の露。妙真は目をおし拭ひ。扠は納得ありし歟。もしとぬるなるぞぶのなは送に身の為なるを吾儕に怨はなけれ。あの女現苦しきは浮世の境界。三年以前の秋の比亡夫に後れて。頭髪を剪て形貌まで烏髪尼。妙真とよぶ逆朱の戒名血脉さへに受たれども。尚年ごろ死なる子夫婦の戒に浮世を棄なく。朝夕家廟に對へ看經の暇もなく日毎の出船入船の舟子の駈引廢物の水楊。世帯を執れバ舊の名の。戸山と人さへ喚ぶ。不古妙真と更纔りと告れども。又忘れてや或は戸山よ妙真よと道俗二名をひとつに合して遂に戸山の妙真と呼るゝは。いと鳥滸なる事なれども夫と妻と


姑娘の良
別夜佶
憂を増
しむ
御影像
妙真
大八
同盟講中
小文吾
ぬい
念玉

なき婦と喚る姑と。かゝる縁しハあらずかし。本末遂ぬ産霊の約束事にぞあらめ。人の心ハ善も悪もうちつけにハ見えぬものなれバ。口ハ鬼々しかりしとの婆が兇け毛だちても痴なる婦を追出せしと人ハいふめれ。これも無益の諺言なれ然バ吾儕ハ退るべしが沼藺ハ陝き心から病煩ふかく親同胞に劬労をまさ被なひそ夏の夜のいぶせきとも大八に衣推脱して寝冷して風ひかし煩しめなんと思ひつれバ。泣腫せし目を推拭ふて頭を擡。年来の高恩忘れざる孝行を竭しもゆるせかし。かくてあるべき別ならねバ。とてもかくても真夜中に帰りなんと思ふ郷にもあらず。かくふたゝび還しまゐらする心苦しさよと。ひとへに人をも落る涙をもとゞめかねてぞ共侶に惜む別を慰貌に又吹遊む尺八に妙真ハ耳を側て彼笛は音ハ鶴の巣籠焼野の雉夜の鶴。凡生とし活物夫婦の哀別親子の恩愛いづれを疎かにやハとせん。別ハ歓ならで憂るのかぎりぞやと。欷く涙ぞおさへかねて小文吾に告別して立鳴の翅に遺を一滴濁さぬ水に任して見送る兄ハ辞なく妹もよゝと音にぞ泣く心細げなる繁栈の門の樞戸推開きて妙真ハ外に出て。はやくと呼ぶ程に轎夫ハ遽しく轎子をかゝく来まゐ居つ。乗なんぞやと促せバ見かへりもせず頭を掉。廿二日の月もはや出て天の色づくまゝに。夜ハ既に更ぬるに市川へと還るべく豫て用意せし今宵の宿をもとめんにあれバ吾儕に跟くて来ねと窃にさゝやかれて轎子を扛して赤羅引東の町へと急げども進ぎかねたる足引の山路ならねど入る心地して迷ふハ胸の私雨に露けき袖をうち合し。ひとゝも頭を傾けて。おのひくぞ務まゐる。

第二十六回

忍を破りて犬田與山林戦ふ

怨を含て沼藺四犬を傷害す

人さまぐに志を道引ちぐかる折均太孟六鹹四郎ハ甲夜の遺恨を復

さんとて古那屋の門に潜来つ。或は戸に耳をよせ。或は戸節よりさし覗けば。燈燭あかく声きえ時なほ早し。と退きて耳語あめくろ後方よりこゝろ残して来る者あやも見咎めらまじ。と三人齊一瞻迷ひて庇間よりぞ背門のくさにぞ隠れけるさ程に山林房八が母妙真に送られて女房沼藺を去らしかど。彼方の回答もなかりしかば。又小文吾に對面して昨夕の確執を果さんとて。更闌て只ひとりまづ戸口に近づきて。裡面のやうす窺ふに小文吾は沼藺と端居しつゝうち歎く声。喩き声。何と薫中に聞えたり。その緯の趣よく推究めく後にこそ裡面に入らめ。と尋思して門の柱によりかゝりて身を欹て竊聞せり。かゝるべしとは知らざりしく。沼藺は母が為に涙を禁め不慮のことよりこの男の厄難。叅くさま還らせめひるが何とまうしてよからん。甲斐なき児女子ぞと思ひぞを。しくや家兄よ兄商量をせられなば果敢なくあへなくならんよと大八を納戸に臥させて。

叅くさまの候待らん。嗚呼胸痛や。と身を起せば小文吾吐嗟と立塞がれ。沼藺は何処へゆくぞ。と辞せはしく禁むが呆れて顔をうち目戍り。あな狡猾事物咎めなさるまで来ても親の家納戸へゆくに科あらじ。といはせも果ず頭をうち掉り。継親の家なりとも留守もせず兄が随にせん。知らずや今宵は庚申まち。守る夜なれば祈願のありて齊戒すれば親類でも他家よりまゐるものを留めぞ。況奥へは一歩も許さぬ関の戸を開くまじ。心願を空しうせんや。と鼓圍に[illegible]うへ只子舎に病臥せし。信乃をも見せずと慢にのみ罵むまで涙漣をそゝぎ言ず待るべし。今宵は去のが花妻なる旅人まで隠しおくとも妹に偏のあるべしやと怨ぞ進めが眼を瞠し尾陋の推量奇怪き祈願の外に物もあり。一旦鎖せる出居の関戸疑ひをとく許もがれ。欲強く納戸へゆかんとするが齊戒を障碍となるは是悪魔の所行に似たり。ゆかばとてもふとも置をかのものぞ不便なれども親子共侶擔下に

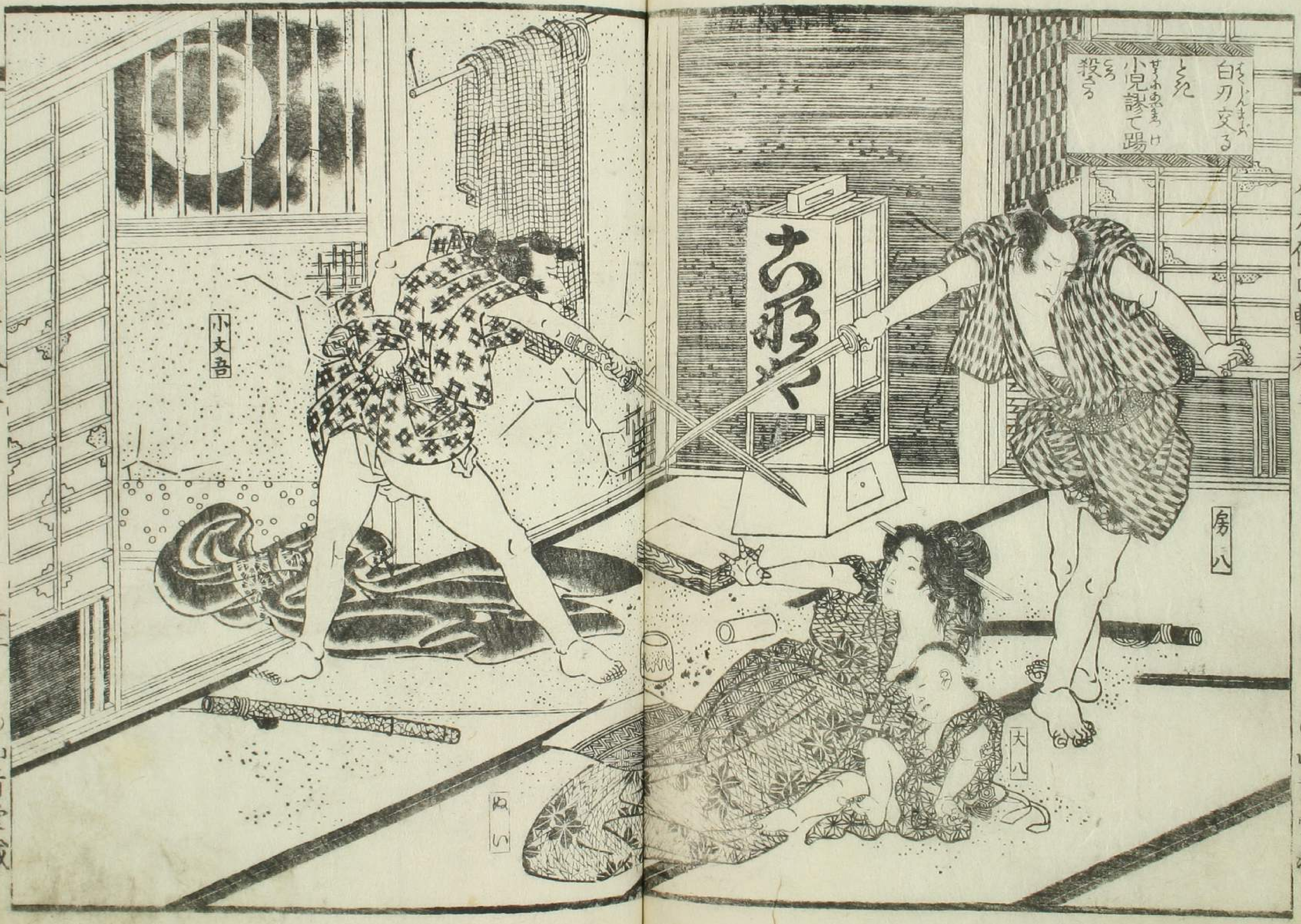
立て夜を曉せしからぞ。と罵り懲して。搔繩を引立つゝ。戸口に推おほせんず。あるゝやと叫ぶ母の声に驚覚る稚兒も共音立てぞ泣叫ぶ。小文吾はさのみぞと思へど見るさへ共倡に弱る心を鬼にして泣声奥へ聞せじと。樞戸礑と踢開きて推出せとする程に外面より手をのばして。沼藺が肩尖推戻し。閃りと内に入るものあり。小文吾は是戎信と見て房八なり。咄小文吾歟何とおのれ真夜中に向ども知れたる確執の後段別にいふべきともあらず他人になるまでそ潔白く。果さん為よ夜をこめてそよぎ来つるなるぞと迭の問答由断せざりき。皆ぞ房八を樞戸楚と引閊たるを。當下小文吾は舊の席に退きて一刀取て傍に引著俟間あらせず房八は拯光るも長脇刀に四下も陜しと裳を褰て續て進む前房の正中。小文吾がわたり近く向脇あよへも高蹴跪膝突つけて疾視る。沼藺はそひくるも更闌てまちる良人の勢ひ兄も有繋に亂色ぞる心の底を汲とりて騷ぐ胸は荒磯なる浪より危さ一期の浮沈和諭るよしもあらず泣に咽上る大八を横に抱きて合せ給ひ。乳房も細る吾里の苦労後に立退きん心届ぬ片手業にせんすべもなく行燈を壁のもとにぞ推退けて。そと搔起も燈心の丁子頭もそゞろめなる。見まゝ滅んとうち歎く。房八はそのまゝかへんもあらず腕を扼て声をぬやと立。小文吾。和郎も男子ならば栞崎になりて踏まれたる恥をし恥とおもへ。辱めても窘めてものかひのなき臆病者を。敵とは取らんは大人氣なけれど。此一言も聞せしるあまさへ女房を去するなれども。渠が所蔵の衣裳調度をまづ返さんと。後日の異論奥蓮に物成挾くは慾に轉ぶと人やいはんそれ返さんとて齎しつ物撿めて受納めよとのみを小文吾は聞て何ぞ中らんとおもひしに沼藺が衣裳を返さんとて欲人驗に更闌る今宵ならずとも限らぬへ是衷に妙真刀祢に荅しく子ころ親をしらず還らねど。狂て妹を留めしそよりに情ある姑の面に顧しす志

のミ回答ハ親の還りてこそといひつるをきゝ咎るぞや。と問せも果ず冷笑ひ明日久らん欤明後日なら。生涯還らで果んならいと覺つかなし文五兵衛を俟とそいつまで俟るゝ兎見えねバ。小男子を今返さんとてくめて来し物ぞ受らせよとて宛止ん流行摸様に京鹿子美濃の八文飾磨の褐沼藺が秘藏の衣の中に。和郎が欲がるのこそあれと。これハ見認らずや。と向へて懐より取出しゝ血つきの麻衣のまゝハいつふとさしよせる小文吾ハ見てくうち驚き正くそれと掛る目を拂ふて左に取るほしさぞ欲かりん欲かるべし。昨夕入江の蘆原ゟくとい小文吾膝推進め。これも甲夜闇里黒白を別かず。句。背肩にかゝる一包袱。句。誰とも知ず後より。句。引とでむるを。句。振拂ふ。句。賊の手煉も如法夜に。句。引綻せし袱の裂衣口を漏て遂るとの衣。句。見ハ知らずして突退け。皈宅の後も、とかく心もつかで今せくに。句。うちつけく胸が潰るを欤。句。原来その折癖者ハ房八汝が所為なりしと

今ぞ讀る離別の状。句。三行半も夜賊遠見黄昏時に書つらねたる途で拾ふて又途で母に遮与せし信乃が骨法圖。句。志つれバ機密をみなに知く。句。女房去りしハ出奔の注連連係せしまぬ身の用心ぞつらに隠せし喪家の犬塚外より洩てハ物もなし。なのまゝまぐの好甲斐に賞銭を己が酒の價荘官屋敷に驚れし。親の縲絏を解んとなるが信乃を搦て吾倚に遮与せ否小さうに汝が贅託罪人舍義にまゝなるわざとハせも果ず腕刀の鍔下握く瑠を突立この期に及びくるほ陳ぶるや拒べ奥へ踏入て索を被んぞいふにぞ。と逸に怯ぬ蝸牛乃角芽立る争ひに沼藺ハ悲さやるかたなく慌迷ひて兄と夫の間に入て推隔あハ不覺え外にや洩さん家兄よ賢兄心にもおもひあやまち志なふる今さへめてなる家なるの大人の縲絏も人の所以なるべく親ゆへ換るものわざし。ころぶ夫子も亦心つよしの難義を幸わり貝に罪人捕へて何にせん磯うつ浪も當て砕け。

雨ふりてこそ壌も堅まれ。あらそひのまゝにいひ果てゝ胸の火も滅ん迄に睦ミ相譚ふく。親をし救ひとまゐらせ。是にまさる幸ひの又あるべしやと氣[illegible]咽く。彼方此方を和諭つゝ声うちくもり泣潤ふを。簀子の下の蟬も霎時その音をとゞめけり。小文吾ハ今さらに事を好むにあらねども。執念く怨む房八に既に大事を知りまつりしが忍べと親の箴に刃に被し紙索をも今さら厭ふに遑あらず。己が頭身の息ある程ハいかでか彼人を遁すべきと思へバ。些も退かず立発んと刀の柄を握詰る。指の汗に鞘釘も濕る可え。當下房八ハいよゝ焦燥く。あるまじき女子の截判。泣バとて口説バとて宝の山に入りながら空しくてかへらんや。喧嘩の側杖打れんより。其処退ぞやと敦圍く衝と立さまに礑と蹴る。爪頭狂ふく大八が腕肚を蹴たくられバ。苦と一声叫びもあへず。そのまゝ息ハ絶にけり。沼藺もその子を抱るまゝに横轉輾くよゝと泣く。房八ハ[illegible]物ともせず。

信乃ハまさしく子舍に進む前面に小文吾が立塞るを抜打に拳尖くすゝ[illegible]刃を鍔もて受留ながら紙索も斷れて。小文吾ハ今ぞ仇なる堪忍の二字も反故と恨の刃尖抜あはし。丁々と鐔を削る迄の大刀風四下を蹴立く戰ふを。沼藺ハせうなく身を起して見まゐらすバ。己が子を息絶させまつり。いかにせんかやと泣つゝも見るに堪ずバ見ると良人ハ一上一下と砍結ぶる生死の際。この子もいと惜し彼首も危し。夫にハ去られ子まで殺されて己が身ひとつぞ愁に生る甲斐なき火宅の苦ミ。力の下に玉の緒の絶なバ絶よと忽地に志を勵して。かき抱たる大八を撲地と投捨。身を起させ衰しくあまやかく些も擬議せず。そも情ある一短慮な物にや狂ひさまよふらん。止りあへと呼かけつゝ打あふ白刃の中へ入らんとすまバ。小文吾ハわゐふうし泥けと疾視く。この世も立ねどあちこちと擁前禁る女の念力。身を投かけく良人の袂に携るを透さず振り落る。房八怒れる眼を反して礑と蹴倒せバ[illegible]撥矢と


白刃（しらは）交（まじ）ると見 小児（せうに）誘（あざむ）て踢（け）殺（ころ）さる
古那や
小文吾
房八
大八
ぬい

折飛て髻結断離る乱髪纏らしく臥つゝも足を抱げバ踏入さまに起んとする頂の上に晃く良人の刀踏入て。小文吾を撃んとうち振る拳捻て沼藺が乳の下礙と砍る灸所の深痍に霎時も得堪ず苦と叫て倒れけり。是へと驍く敵の透間を得させじと進む小文吾が閃す白刃の電火房八を右の肩尖ばらりずんと砍割含たる刀を戞と捨て尻居に撲と平張仆を。再び撃んと振揚る刀の下に房八やよ待。犬田のぬしとあやとせらしく禁て左手に突立頭を挙て蜻蛉の息吻あへぬ深痍の苦痛小文吾を詰しと。いへバ些も由断せず血刀閃りと取直しく片膝突て佶と疾視卑怯なり山林いかなれバ疾く其期に及びて何をか云んと窘まれバ眼を睜り。その疑ひを理りなれども。われ本心を初より諦さず特に義を守る和殿ゆゑぞこれを砍べき且其の痍をとるも我抗まバ小文吾をもなきなかるらむとおもひるらう刃の濃血を拭ひて遽しく鞘に納め。単衣の袖を断離て拭と結合して房八が瘡口を楚と巻て端に結びなされ。房八痍ハ浅かり。いかなれバ人ゆえんゆかりをや山林と呼かけられて息を吻。喃阿舅犬田殿栞崎なく理不盡なる体ハ豫より和殿に怒を發させて撃れて難義を救んと思ひなれど事成らず。親の諫めと堪忍を守るならへきまでもなくよし有るべし大勇にいよく羞て立別れつ。さりとて已べきとあらずこゝに母に豫より示あはせしよしあれバ沼藺を離別に假托て。甲夜より和殿の氣色を試み今宵再び推て来て。あらなく本意を遂ずと告れバ小文吾眉根をうちよせ。そろ沼藺し山林これへ沼藺が兄といふとも和殿に大恩あるのみならず。然るをその身を殺ほまでに志を盡さまし。これ疑ひの一ッなり。縦和殿のあるのて可惜命を隕さとも今宵に逼らしこゝ難義を救べきよしもあらず。是疑ひの二ッなり。ゆゑ故ありやと向詰れバ房八ゆゝて声を励しされバ

しかし其ことわりを言ずとも便なき人輪田の説因果の理。物の本にはつれ〴〵しるしたれども。皆これらは人にあるべしと。一切思ひかけざりき。是も果敢なき今般の懺悔告るも面なきことなるから。一昨年の秋世を逝りしは。父の病危かりし時窃に母と某を枕辺に喚迎つけて。これは些の小廝より。おのがあぶに身を上りて。一子房八は成長りぬ。これが齢五十を超て一期の望分に過たり。あれども心に恥ることあれば戸山は房八にも素姓を定かに告ざりき。名のりするそのうで死るが冥土の障なりぬべし。よりて窃に告るのみ。抑これが父は杣木朴平と喚れたる。安房の青海巷村の百姓なりき。性として武藝を嗜み殊更に侠氣ありき。この故に故領主神餘長狹介光弘朝臣譜第の忠臣金碗八郎孝吉ぬしの武藝を頻に景慕して。その劍法を受んとて彼家に仕へたり。かくて又年を経て。佞臣山下定包が神餘の執権となりて。淫酒を勸めて民を虐げ。逆謀萌を見せども。光弘これを曉らずありしかど。金碗八郎ぬしもそのゆゑに諫るものは皆退られて。その家竟に乱れたり。これが父は是義氣ある人なり。里人等が為金碗氏の為に瞋憤ていかで定包を撃んとて。同志の友ども洲崎無垢三といふ壮夫を相譚ひ。彼定包が遊山を窺ひ落羽𠷉に埋伏して。乗たる馬を心當に射て落せしは讐ならで。領主光弘にてぞおはしける。無垢三は當坐に撃れしが。父は領主の近臣那古七郎と血戰して七郎を砍仆せしかども。その身遂に生拘られて。軈て刑戮せられけり。この條の錯悞は。みな定包が奸計なれども。これが父漫に思ひ迷ひて。かくも領主を犯せしかば。金碗氏は里見を佐て功成り名を遂し後。禄を辭して自殺せりことも。これが父の故とぞ聞えし。當時吾儕は十四歳。母と倶に裏に有まゝなれば。獨安房國を亡命して。この地に漂泊る程に。里人に汲引せられて。この小廝になりにけり。これよりして年あまた心を盡切て仕へしが。先主は愛敬びて。才ありとて終に家督の

男児なかりしかバ吾侪を女婿にせんとおもひぬ。なるに去歳より通家になりし房八が
舅丈五兵衛ハ那古七郎が弟なりとぞ今歳はじめて仄に聞ぬ。渠その婿兄
の讐なる杣木朴平が孫なりけるを待も知らずいかにして其女児をもて阿容と
房八に斉眉させたる。これを復さるゝ疑ひなし。あられねバこそ口舌もありしかど怨を
隠して好を結び終に子孫の患を遺さんさまでとて沼藺が怜悧死人も羨む
娘なりにいちはやく挙る孫に乳房を放さして去せんハいとも愍びかる死
まじに見る那古が弟と知ずして通家になりし八悪因縁孫が拳の入なきも
ぬも三世の後までに怨ぞ惹く彼刀祢なる（神餘那古金碗なとふ）の祟欲と思ひ屈し病
煩ふてこゞ死期ちかくなりにし人の怨を解んとするハ陰徳にやあるといふなし。
房八ハ親に代りて祖父の為に汚名を雪め彼舊怨を釋とおもふ冥の子
男児孝行なりん且房八ハ祖父に肖ず侠気ありて武藝を好り義のために
命も惜まず戸山も心を雄くしうなく且が子を諌奨しぬへと窃に遺言せられけり。
父ハ義理に惺愡たる既已かくの如し。これハ親に及ばずとも其の子として志を嗣
ざるべしやといひ起ん。祖父の汚名を雪ん為に杣木の杣の木偏を除て下なる
木字に相合し。みづから山林と名告れるハその此よりなるべし。
舅丈五兵衛殿親子の為にハ人に異なる志を竭して後に親の遺言明々地に
告ざりやといへども折もなく實義をあらはさん術もなし。さるべしぬる日八幡の相撲へ
和殿とこゝに目星に指さし。修驗の募に任せしめたら吾侪ハ絶て勝負を
好まず技も力も和殿に及ぶべくもあらざれども怪我にも勝ばやと念じて果
しく負しを歓びなるさへ何であなげきとらぬべくとくにいひ立り娟るあくきしら
のみかくさきの祇園會の神輿洗を覩がてらかくその濱に来て遊びし山獄父五丈
兵衛を訪んと思ひて入江橋を渡る程に獄父ハ遥に水際なる蘆分船の中に

なく怪しき両個の壮佼と。うち相譚ふゆゑ端なく呼も立ざる所に。其あたりに近つきて。よそながら窃聞しけるに犬塚犬飼値遇の奇譚和殿も亦その相似たる玉さへ痣さへあるよし聞くにまさりて感激して今更出るに出られず蘆原に躱ひて獨情おもふやう。現八も亦相似たる玉と痣とあるからは彼人々の隊に入りて世の豪傑といはれんものゝ過世あらばこそあるなれど義を結んと願ふとも許さるべきよしあらざれば同盟の数へ協はず。當所ハ千葉の采地にして滸我の御所の御方なり犬塚犬飼穿鑿せられて難義に及ぶとあらバ。竊に男子力を勠して。己が性命を隕すとも。その危窮を救ばや。さらんには是父の遺言を果さんにハこの時にあるべしと竊に思ひ決めつ。かくてその日ハはや暮て彼人々ハ古那屋へとてあるじの翁に伴れ。和殿ハ独り留りて件の舩を推流し血つきの衣ども背負ひて立かへらんとせらるゝにぞ。わが身も遺憾ながら卒とありけんと蘆原より立出てもひく所に恍惚に引留しを和殿ハ癖者なりとて。振拂ふる勢ひに名のらく呼もかけられず。且く挑争ふ程に吾儕ハ膳をいたく打れて倒るゝ間もあらせず。和殿ハ走去られし跡に遺せし麻衣あり。倘他人に拾れなば殃危其処に起らんとおもへば躬てとりあげて更闌て宿所に還りつ。母にもたれにも告ずして犬塚生追捕のよしを莊官より徇らるゝ當下これ又おもふやう。己男ハ客店なり。彼人々を含藏ふとも人の出入多かれば程もなく顯れて犬塚犬飼ハいふべきもさらなり。親子も罪せられん。さればとて今更に義を結びたる人々を出し遣るべくもあらず。所詮今己が命を隕して其身の危窮を救はずハ竟に脱るべからず。この入江の蘆原にてつく〴〵と倒観しに彼犬塚が面影ハ己が面影に似たるあり。さればこそこの頭をもて犬塚生の首級と偽りて滸我の御使に逓与しなば獄父子に出崇もなく犬塚生は落しやる。

便宜ハこれにおよぶものなし。然ども似ざる所あり。吾ハ相撲を好る故に額髪を剃ざれバその面影ハ似たれども此の俤なくハ欺れてしと思つれバ要時もわざと八幡の相撲に負されバ生涯土俵に足踏みじと寓言して今朝俄頃に額髪を剃落させ鏡を把て覗しつれバ年紀さへ面影さへ犬塚生によく似たるよりていよ〳〵深念を決し。竊に母に云云といふよしを告しかバ母ハ涙さしぐまれて許すべくもあらざりしバ。己れも有繋に請なやみて自殺の遺書せる程に母ハさすがも關窺て禁めかねてしかれバ泣つゝ許されけるなり。母も亦我ほに恰悧く男魄あるにより。今生の告別なるを皆いひ盡したる緈の由を知らん為に俄頃に沼藺を離別して親家へ返さんといひたらし離別の書を母に任して。己まてやこの濱に来つゝ栞崎まて送りて和殿が宿所へ還すにあらぬ折ふし往返の人もあり。又數盡ん為の便宜の場え和殿ハ身がわりの意なくも犬塚生とならバ面影の似たるを視る目ハ誰かわかるべき。これ死たるの後にも頭のみ彼身がわりに立すやと思つるなれバわさく也と思へバ些も躊躇ず濱里の確執に假托て理不盡に譏罵り蹴倒しても爭かで親を知るにて堪忍がその孝心なれバもなく本意を得て遂に別まゐる途より酒を酌んとて只管誘ふ觀得を先に立て出し拔て取て返して稲塚の辺まで来つるに和殿ハ既に難義あり。滸我よりも犬塚追捕の大将新織帆大夫とやらんが數兵にてよもや圍し剰山獄丈丈五兵衛殿ハ縛られて牽れたり。吐嗟と胸を騒げども救ふべくもあらざりしバ藪蔭に躱れて一五一十を見つゝけり。かくて和殿ハ虎口を脱れて家路をさして遠しく去りたまひし跡に一通あり。取揚て見れバ彼骨相圖なり。麻衣といひ繪圖といひ不思議に他人の拾はざりしハ手に入る繂の幸ひ今宵ハ決して本意を遂んと思へバ心に勇ありて示し

ありしころ中宿に赴きて。竊に母の來ぬるを俟て云云と密報て彼骨相圖を遞与せしハ和殿が心を騒して今宵殺さん為なりき。さるゆゑに甲夜の間を背門の辺に潜来て犬塚生の大病も和殿が苦心もよく知りぬ願ふハ阿舅大田殿こゝが頸取て役にさて山獄父の縲絏と犬塚生の危窮を救ふ手段をめぐらせ給ひ怨を釋とりるなりよしを一期の功すこく。昔杣木朴平ハ定包を殺さんとて領主を犯して刹那古七郎を撃とめたり且その師なる故主なり。金碗氏にもこの故に腹を切せしめ給れども今ハその孫房八が云云の義烈によりて、孝子義男の寃枉と山獄丈の縲絏を釋ゆゑと口碑に遺しなハらバ祖父の汚名を雪むべく父の遺訓も空しうせず死して栄あるよし歓び百歳の壽を保て富貴の人とならんよりも遥にまさるなるべしやその身の欲ひに就てなれ不便なるハ沼藺大八親子三人がかゝで日にあはぬ所に命を隕ぬ。亦是祖父の悪報欤妻子にハ一毫も意中の機密を告ざりしが怒に殺して去るとのミ思ひくさへも恨ミん。さればこそ必死を究めし且沼藺ハ年なほ二十に足ざりけりけれバならん後悔に後家立させんハ便なしとて事に假托離別せんとかくてまく渠が為ならんと思ひし故につまもあくまでなせしを悔しくき。かうなるべしと豫より悟らバいかでか返さで死大八さへに隷て遣りしに渠が成長る後まで外猶父に教育を托んためなりし思ひしハ仇なりて過失といひなから。妻をも子をも手にかけて殺して竟に身を殺も輪囬応報かくまでにあるべける欤犬田殿この悪縁を結びし故に沼藺が枉死ハ夫の餘殃獄父の歎きも和殿の憾ミも想像ぬ面目なし許したまへと血に染し左手を挑ておろがむまでに心の誠うち諦も傳稀なる孝順節義深痍ヲ屈せぬ長物語に小文吾耳を側て齎を拊て感嘆の目をなべて死て涙を拂ひあひうちむし山林和殿ハ親の

遺訓を守りて舊怨を釋ん為身を殺して仁をなすを。心操こそ微妙けれ。和殿の祖父が謬て犯せし罪は重くとも子孫三世の今にしてその汚名を雪る孝順和漢に多くあるべしや只大塚生の面影ハ。和殿とよく相似たるものから。累世の主君の為にも身を殺してその死に代る忠臣ハいと稀なるに。和殿とこれまでハ通家なりし犬塚生ハ相識なるのみで且八幡の相撲より快からで見えしかど窮難今宵に逼れども外ならぬ憂苦を告てその智恵を借んと欲せず。況身うらやまるゝ者なれども企及ぶべからねバ。切ひとつけざりしに今由なき貧をうちて父の縲絏を解くよすがにも。これ同盟の士を救ふ便点にもあらずや。直意外に出て欲しく又思しき是一下しほん。人を殺して人を救ふハ素よりわが願ひにあらねど犬塚生も如此なるらん。志なくて今更に推辞てその意に従ハずば水を擲て湯を辞るが如く。和殿をあたらに狗死させて古へに益なきを

いふがハせん。又沼藺と大八が枉死ハいよく意外の殃泉傷の涙胸に盈溢臟腸を断といへどもみな薄命の致すところなれバ。歎くのミせんすべなし。さなりと妹が刀を犯して身を殺せしも狗死なるまじ。こゝろ家に相傳る破傷風の奇方あり。男女年なき少壮のもの。鮮血各五合を取て合してその瘡に沃ぎ洗へバよく死を起して生に回しその瘡も亦愈ると帶の塵を拂ふが如く百発百中縦ど譬ハ養由基が百歩を隔て柳葉を射つるが如し。便是こゝろ伯父なりし。那古七郎の傳方なりとぞ。父に口授せられしかど求めて得べき薬剤ならねバ施しかたしとおもひしのミ。犬塚生ハその暁よりして破傷風にかゝりて命危しまゝの故に犬飼生ハ武藏の志婆浦に良薬ありて求んとて潜やかに今朝しも彼処へ赴きしかども道遠なれバいまだ還らず。縦和殿の便点に任して今宵の危窮を脱るとも彼人の命終らバ亦何の益かあらん。されバ

沼藺が枉死ゆゑなく圖らずも男女の鮮血を獲たり。不幸の中の幸歟。天歟。人歟。欲する所只塞翁が馬に似たり。是はしも犬塚生の孝心義膽世に捐られしを憐みたまふ神明佛陀の冥助にあらずや。亦何ぞや心安からぬ山林和殿と我等と前世は相殺したる讐敵、今は舊怨氷解して恩義は千引の石より重かり。その功徳をながく口碑に傳へて義烈の亀鑑にせざらんや。さはいへかく迄逞しき志氣ある壯夫をよしや彼玉はなくとも又その痣はなくとも同盟に請加へず久後さへに憑しからんに親子二人が共侶にあへなく命を隕しつる恨のうへのうらみなれ。賢にして且雄々しき大家なりとも郷とて空しからん。いよゝ傷くして頽折て歎死なん痛しさよ。嗚呼何とせんとばかりに悲しむ愛哀苦浮世はうしや丑三の鯨音遠く聞ゆる。いとゞあはれをそゝられける。

里見八犬傳第四輯巻之三終

南總里見八犬傳第四輯巻之四

東都　曲亭主人編次

第三十七回　病客藥を辭して齢を延ぶ　俠者身を殺して仁を做す

房八がかく莞尒とうち笑て、物識る人は常にいふ。積善の家餘慶あり。金言寔に故あるかな。犬塚生は父祖三世忠信孝義儔稀なる。その縡の趣は船中にてみづからいふをこゝに竊聞して詳に知りたりき。さればとてそれとはしらず妻の不慮に命を隕したる。鮮血まで自然と彼人の藥となるも天の冥福なり。過失もかくてこそ聊面を起すに似たれ。夫婦の恩愛今更にいはぬ心のなるは千萬言も猶足らず。不覺に時を移さんより、とく鮮血を取りあへ。一刀にて死ぬとも全體はまだ冷ず温熱失ざるほどにしく絞るとも血を獲んや。とく〳〵。といそがせば小文吾この詞に従ふて、やう

疾くに立あがれども四下にさゝふる器なし。何をがなと見かへれバ。念玉坊が遺れる彼按尾貝。横はりて。行燈のほとりにあり。是究竟の物ぞと。ひとりうなづき携て左手に取て。仆る女房を引起せバ。苦と叫び声と共に。鮮血ハ颯と濆る。瘡口に貝を推著て。南無阿弥陀佛ゝゝゝゝと唱る間に。韓紅貝乃半分を受とめける。小文吾ハいとゞしく。弱る心を励して。お沼藺ゝゝゝと呼活まゝ糸より細く目をひらきて。家兄。よぶ使へまで存命て欲よに憑し誠心を説明さまし幾條の夢をとむかりうち傍に。我いはんにも声をもらさず男を起さんにも動きえず。あくろに泣。貌びる。疑ひ霽て共侶に滅て亡く身を惜かずで惜む名残ハ今一下ぞ。いかで言葉をかハ嶋の。よるべの岸に渡すらで瀬に迷ふ心地に。待ほどとりふ声ハぞ。冬枯の朝の原の虫の音よりも哀果し。今般の呼吸に小文吾ハ胸寒りて。武心も庭泉流す泪を掃ひ落し。原来お沼藺ハ現る事大かたに似たり。然らバ冥土の迷ひの霽ん山林ハ彼処にぞと良人のかたに推向れバ。房八ハうち見て目をとぢまされ。お沼藺よ。なひけもなく狂ひし刃ハおん身の薄命。ゐが子の横死ハ過世の業報。勸解て今さらかくまでによし恥しぢやあるまじ。夫婦の鮮血ハ世にありける馬傑の。その死を起す薬剤となるぞ。是にまさる功徳ハあらじ。心よく迷ひも去ば正念となりて乱れぞと奨されてうち点頭。それのしるしゝ得ながらに思ひ捨ても堪ぬる死ぞ只八大八がるすのうぞ亡骸なりとも今一下見んあへまじやとうち歎けバ。房八頭をうち掉て。それも益なし。歎をまさん皆是諄言。女々しかりける面ちかきよく。この布を解袪くるが血も取らまくや犬田殿と。いふにいるとこんな白の松がえでに結びけし。布を解んとする程に喃。今雲時吾儕にも告別をと外面よりして。密音立て禁るハ是戸山の妙真。閉て入りて又闔る戸を走れども運びかねし。手の舞足乃

踏所。こゝにもあらで房八と沼藺がほとりに身を投かけて。哽かへり泣沈にけり。且して目を拭ひ喃房八。豫ての覺悟はやましく。かへらぬ旅の伴侶に媳さへ孫さへ放遣る。こゝろぞ身ひとりをいかにして。翌よりは又誰を友誰をよすがに慰ん。子を先だてゝ幸なきのみか。はかなき世の例にもなりよりいへらん悲しさよ。寝てましぬ宿に獨不樂く苦しきこの夜を曉さんより。切ておん身の勇しき最期を看一看べやとて。窩稱に宿を起出て又この檐下に來ましけれど。とてもかくても存命ぬころぞ子と知らで迹追て。只に來つると叱られん最期の貌こそ彼のかたみなれ。るゝ窩稱ならねど。逢ずとてよしや返らんと思へども。足の進まねば。閉ぬ戸口に身を倚かけて。音にのみこそ啼夏虫の。ひとり焦れて又濡らすと檐の玉水これならぬ。雨ならで涙の外ならず。かゝるなるべしと知るならば。沼藺を送りかへしはせで。大八をさへ隷てはすてさで。鴫の羽搔。百羽搔かき口説ども盡ぬこゝろの這悔となる

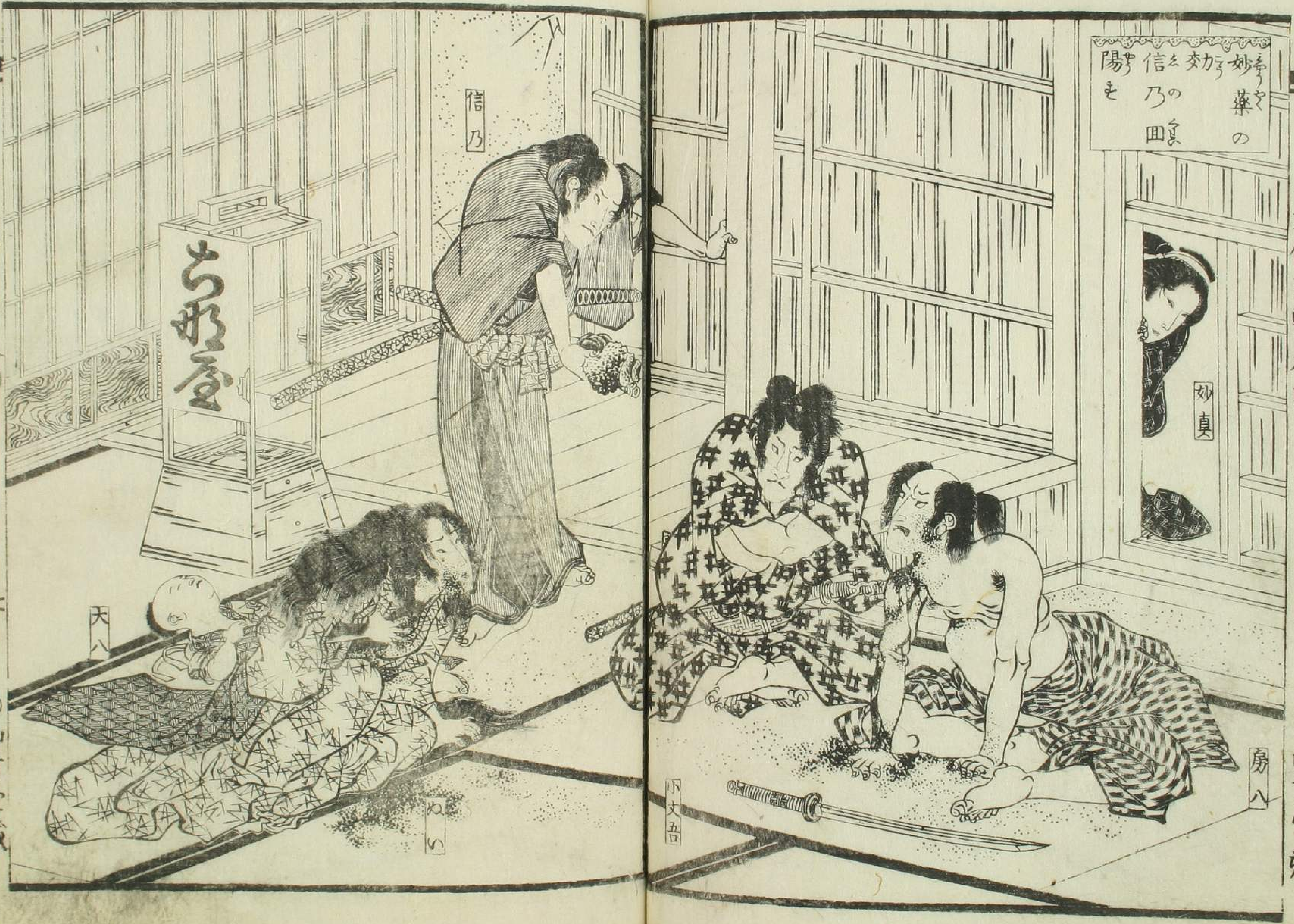
しきに。思ひくらべつ犬田ぬし。親子の憾はいかならん。後の歎を今霄ぞと知らせまるよしもなきを欽喃ば沼藺。吾儕は豫て事情を知ながら。あなたに告ざりし心つよしと恨まん。惜しや利鎌に嫋草の。霜に先だつ幸なきはよし為にても大八が最期は特に遂憾し。やよ孺兒よ祖母なるぞ。いかにぞや。と亡骸を抱きとりて搖動して又哽ぶる千行の涙は岩走る瀧のいとせめて。碎る胸の苦しさ殘るかぎりも知らぬ歎せり。沼藺は有繫に姑嬸の声は聞けど。哀傷と深痍に息を吻ぬ。されど房八も共侶に弱る心を励して。母なれよ。さのみうち歎て病なづらひまふなよ。父の遺訓を果さんとて身を殺せば。母に孝なれど。子に又不慈の行あり。一个は是にして。両个は非なり。孝道寔に難なる便りなくなる母の手頼むれ阿舅犬田殿。これを慰に顕身の息ある程にぞ苦惱けれとて。この布を解てよとのぞみさまして小文吾は慰めかねて嘆息しつ。これも謬て妹夫を殺べく。又謬て妹を

良人に數まゐらす。父といへども誰をか恨ん。大家よ。勦死ハ理りなれども。今更千萬口說も要なし。後世のいとなミこそ肝要なれと諫て軈て房八がほとり近く身をよせつゝ。布引解バ漬る鮮血を受る法螺の貝吹うつく無常の風さやき。死天の山伏なれ登て岩幗む鷲の峯入に夫婦手を携さ子を肩て往方へ十萬億佛土蓮の臺法の雲踏み迷ひそと薦めたる母も喘ぐく唱名乃声も涙に口隠りなる。程に犬塚信乃ハ暴に小文吾と房八がうち合しゝる大刀音の子舎へ聞えしかバ。事こそあれと安からぬ胸を鎮め苦痛を忍びて身を起さんとするまでども腰の立ねバ枕辺なる刀を杖にして身を坐行とゐ息を吻死幾間もあらぬ家の内を虫の跡に如くして出居と前房の間なる。障子のほとりに来つると死房八がゑや瘡を負ふて。その赤心を諦しる彼條の物がたり。その妻その子の横死のみなさえ聞ゆて病苦も外になるまゞ且驚き且悼まく感涙を禁めえず。人を忍べバ躬もよろめく僅に障子一隔にして。その処へよろほひ行つゝも。苦痛頻に堪がたけれバ。そかゞて其処に俯くをりから。又小文吾ハ信乃が為に房八夫婦の鮮血を貝に盛るに及びて。信乃ハ愀然として安堵なる。頭を擡て思ふやう。生を好し死を憎むハ則天の心なり。君子ハ庖厨を遠ざくるとぞいふなるに。今己が命終るとも。いかで人ハ義士節婦の血をもて薬餌にせらるべき。人々の心操を貴ぶべく欽ぶべく。謝して且受べからず。彼房八が孝ある義ある。類を古今にヨヌく得がたし。己が躬も翌ハ保がたけん息の内に對面して志を告ばやとて辛く坐行て進み近つく障子の腰に手を掛ても開るだけの力だになく。あるも果し身の衰微をいと朽をしく思ひたり。當下小文吾ハ鮮血を貝に受しかバ。房八ハしばしく奥へと頤にして頻に進るにぞ。小文吾猜しくうち点頭甲夜より異なる事に紛れて一下ならびも彼人の病を訪ねる暇なかりしが。今さらに心の疚しかくまでに

調ひし。良薬を空せんや。さはとてやをら身を起し。溢るゝまでに血を盛る。梭尾目を右手に持て。子舎へとて遽しく障子を莎羅と引開て進み出んとする程に。然ど信乃は足踏みて。跌躓て持たる貝を忽地礙とうち落せば。信乃は肩より脛脾まで透間もなく血を沃れ。衣羅さへ肌膚に徹く。彼瘡口に流入りぬ。苦と叫びて仰反たり。小文吾はいよく驚遽てこゝろまどへば。是信乃なりけり。そもいつの程より狄犬塚はこゝに来りけん。不思議に獲たる良薬をうち落せしこそいと惜まるれ。てやよりかくせんと後悔にてたのむよしもなく。項と腋へ手を扶かけて起せども。はや氣息なし。声ふり立て呼活べく倘念玉が覚めやせんと思へば。奥に憚ありいふにもたらずと氣を励さまに動るにぞ。妙真もこの為体を外目に見しかば。さながらに行燈の灯口推向て。いかにくと向ふ程に。信乃は睡の覚るが如く。身を戦しく目を開き吻と息して

起直る面色忽地回陽して。枯たる枝に花さく如く。腫色つれし金瘡は瞬間に結痂て。邪熱は祛れ身は軽く元氣平日にいやまして。心地清々しくなりにけり。小文吾はこの光景に再び呆れ。歓びかつ愆てうち被し。薬血の効ありけるに。とそゞめく暁りて面を起し。扨云云と告るに。妙真も亦これぞ子夫婦の為なる。いと本意ありとぞ称ける。當下信乃は形を儼して。小文吾にうち對ひ最に大刀音の聞えしより。いと心もとなさに苦痛を忍び身を坐行してやう〳〵来つるぞ。来つれども障子を開るにあたはで。俯て縛の疑をうち聞くからに感ずるなり。さるに彼夫婦の血をもて。おのが破傷風に沃んは忍びがたき所行なれど。推辞やとかくする間に。跌まどひの失ゆゑうち被られて。鮮血の効験病痾立地に本復しぬ。今更辞まうすに由なしとて。その恩を謝し。義を感じ。且妙真を慰めて共倶に房八がほとりにいたりて對面し。姓名を告て。その義勇を誉。恩德を称へて。この

死を憐み今生にて交る日の久しからざるを歎きつゝ。又いふやう。某[illegible]ども。和殿夫婦の恵によりて。難治の金瘡愈ぬれども。和殿夫婦を生[illegible]死良薬なれバとて恨みハせで。これ幸ひにて難を脱れ志を得るといふべし。さればこの衣を染る鮮血を後々までも秘蔵して。その恩徳を子孫に傳ん。親の遺訓を守りなん。ぬるゝ怨を解けバとく死でも事の済べきに不可惜義勇の壮夫の。その身のミかハ。妻をも子をも殺さるゝ天道暗きに似たり。嗚呼ちよさしも命とのめん歟。且毋御寿のいと賢なる内室のいと貞なる。その子も成長るならバ忠孝義勇親に肖く。世の馬傑なるべきに後なくなりぬといと惜るゝ加旗大田親子も亦是忠信孝義の人なり。斯良吾の人々の縁を結び義に伏なバ。彼杜津日の神支弥家の艱ハ歎に憂事繋ぐ船にて。死成救とし。これゆゑなるやうとゆへバ今又難治の病著不思議に愈しも枯ひなき經を誦く。菩提を吊ひ追薦回向を法師の所為こそ且何ぞめくまの恩義に酬ふべしやと感嘆の涙を拭ぐ露の玉清き心ぞあらはれける。小文吾も妙真も人の誠の憑しく。いと理りとおもふのみ慰めかね愁嘆の外に辞ハなかりけり。そが中に房八ハ絶なんとする氣を引起して歡しげに信とこそ君子なれ。犬塚ぬし信あり義ある賞美の言の葉を善知識の引導も千萬僧の説法もなほ是に勝べし。只和君の難瘡本復なし玉ハバ進退更に自在なるべし。かゝれバ共に頭をまく彼帆大夫等を欺きて。水陸の守兵を退け後安く和君を落しまゐらせて。その翁の縲絏を解せん錯らぬ犬田殿ぞかし頭をとりそふせバ。小文吾頻に嗟嘆して。それ早く山林まで〳〵數刺深痍に届せじ。今までもおのれと勇悍和殿の如くならば難ふくかくあるべきのみならず痍ハ灸所に係りて縦名醫の門に立とも存命べくもあらざれバ。是亦その意に従はざらんや。さらバ今さら影護ありて巳む今宵ぞ宿



妙薬の効 信乃の回陽を

信乃
ちや屋
大八
ぬい
小文吾
房八
妙真

せし。彼修験者念玉のミ、渠ハ別室にあり。甲夜過る比までハ尺八を吹遊びて、その後ハ音もせず、渠熟睡して、一毫も縡の由を知らずハ許さん。今の世の人心、笑乃中に刀を隠せバこそ。只彼がる氏のミいふくと思ひて四目八臂にあらざれど。その寝るや寐ざるや、見んとる暇あらざりけれバ、まづその臥房を窺ふて詐しれるす、あらバとく禍の根を断ん事ハ浅易しく成りて。ゆく後を防ぐべき心盡しも仇ならんと、耳語して告るに。身を起せバ信乃ハ仰のきうち点頭て趣合さなに。言ひ合するとそ、わさ某子舎に在しと、凡別室のくと欤とおぼしく。密譚に声をたりつ。只そのゑのみそるをぞ。響に某彼処なる障子のあなたに在しとおもべく、簀子の閾む音せり。見んと欲せしに病苦甚しけれ。折るも進退しかね、なるに任せず、且暗くとも人欬猫欬或ハ鼠の所為なりし。倘その修験者なりバやと。いかに小文吾うち驚きて。その念玉に疑ひます。且密談の声せしを。課しあらせしのあなたく竊に背门より来つるならん。この條乃そや洩まく、密訴せらるとも脱れがてし。由断大敵といふめるか。鈍や大事を悞らぬと漸愧後悔措ても有ぞ。腋刀の鞘釘走せてと舌潤しる忿懟の面色進むに。妙真推禁めつゝ。その人同類あらんにハ、敵の多少ハ揣まがくて。漫に立まあるなと忍びつく、まゞ房八ハ氣を悩あげし。今般の苦痛ハとくとのそぞろにぞ。信乃も倶にと遽しく、刀を含るく身を起し。小文吾に引そふて、齊一別に室へ赴んとする程に。出居と前房の间なる障子のあなたに人ありて。忍ひやかなる声をかけ立出んとするを且く等。安房國守里見治部大輔義實朝臣創業の功臣なりける、金碗八郎孝吉が獨子金碗大輔孝徳法師、大坊同藩の士故伏姫君の傅なりし。蟹崎十郎照武が家男蟹崎十一郎照文にあなたにあり。今對面して疑念を釋ん且く等と呼かけて障子を颯と推ひらきて並拉て近づくを。誰ぞと見れバ是別人ならず。大先達念玉ハ燭を手る

旅に窶たる墨染の麻の法衣を腰短に褄端折して白拵の脚絆を穿。頭陀袋を背にかけて左手に網代の笠を拿。右手に錫杖を突立つゝ徐々と歩して上坐にぞ著たりける。さら是、大なり。又修験道観得は髻髪を髻結して段々筋の麻衣に精好の野袴の段子の下縁取たるを腰印に著くて。朱鞘の両刀を跨さ白木の小四方に書札四五通乗たるを恭く捧持て、大が次の席に著ぬるは蜑崎照文なりき。名のみ聞けるものもあれど、誰ならむとしらざれば、その吉凶を料かねて心せられけん。當下、大が席上をつらつらと見巡らして人々に訝るまそ初より實をもて汝達に告ざりしかば、わきまへられずもあらん。そハ年来故ありて仁義礼智忠信孝悌の八个の文字おのづから見えたる八顆の玉を索ん為に六十餘國を行脚したれども一个の玉をも見ることなかりしに今茲五月の初旬、杖を鎌倉に曳て程に昔歳竹馬の友なりし。蜑崎十一郎照文が君命を稟て、賢良の勇浪人をしのびくに募るとて関東なる國々を潜行くに環會ぬ折から行徳にての力士あり。そが一人は臀に黒大なる痣あり。牡丹の花に似たりとの風聞仄に聞えよりその痣牡丹に似たるといへるものあれば、いざその膂力をも試るべく又その痣をも見んずやとおもふて竊に十一郎と示合し是は鎌倉の修験者念玉と假名を告り。彼も亦鎌倉の修験者観得と假名を告て途すがら從者を傭ふがごとく衣裳も行李も似つかしく山伏に扮立て共侶にこの浦に來つ。先達職得分の争訟に假托ていぬる日八幡の社頭にて犬田と山林が相撲の勝負を試しに技も力も劣らず優さまで但房八は小文吾に藝術聊亞なるのみ。その折果して犬田が痣を眼前に見ることを得つ。よて捨るものにあらねども、只力にして智恵なきものは是則牛馬に等し。兇勇にして残忍なるは是則虎狼に等し。縦犬田山林等人に捷れ力藝ありともその心術正しからずは薦るに足るものならず。よく行状を見究て後にせんと深

念じて遊山翫水に假托て十一郎共侶に逗留して今宵に及べり。かくてきのふ甲夜の間に是濱里より必ず来て呼門ども応るものなし。よりて背門より入らんとて漫に立迷ふ。生垣の間より不圖うちのぞけば、あなた親子は子舎に犬塚犬飼等と團坐して彼玉の字の痣の事、又彼額藏の荘助が事さへに噂せしを、聞とはなしに竊聴る。又闚窺つ年来の宿望成就の時到れりと歓びは餓鬼にして地藏の宝珠をえたるに勝れり。さりながらその宵はこゝに宿らず、背門の庭より取てかへしつ。十一郎が旅宿よりいそぎて竊に云云のよしを告謀ありて今宵又こゝに宿りを鶏が鳴く東に廣き國にも類稀なる房八が孝順義死の事の趣、犬田親子が良善信義及犬塚が賢にして薄命なる、又犬飼は友の為に志婆浦に赴きしいくそばくその憂苦艱難竊にきゝしりて、且感じ且悼ることこそ袖さへに濡しく。[illegible]浮世の笠ゆずり其処に在る身も有繋にて出てくるしき人のうへ説諦るべき時宜のなかりしが

竟その中に浅ましく果かくまでに時を得ずして今はかうしと身の行衣を被ながら姿を更め旅より旅に寠れてあるゝ行脚の老僧なる、人々に示して且房八がその妻とその子の臨終正念幽魂解脱の導師とならばやとて、二十年あまり埋木の花さかぬ身の墨衣、舊の姿にあらざるもこれも昔は憂に堪ず捨果し世を、すみ染の袖もて掩ふに餘りある四個の義士なる不幸薄命或は一慈父一賢母或は貞婦と小児の枉死ありへば、むしろ薄命を歎きしこれが身は數ならずぞ南無阿弥陀佛と唱へてその概略をぞ説示す。當下蜑崎照文は扇を膝に推立て諸賢者侍るなりや否や。されば主君里見殿は文を右にし武を左にし、當時無双の良将なり。この故に仁義にあらざれば動きたまはず、礼智にあらざれば起たまはず、忠信にあらざれば用ひ給はず、孝悌にあらざれば賞し給はず。されども安房上総は南嶋の盡処にて賢を招くに普からず。よつて某主君の密詔を奉て封疆を出て英士を募め。

且二十有二年。絶て信のきこえだになかりし。孝徳入道ゝ大坊が存亡を訪んために今茲東八ケ国を徧歴つゝ、はからずも鎌倉にて法師と再会の事の趣、目今、ゝ大のいはれし如し。されば、ゝ大と某と姿を変て、この地に来つ陽には不快になりて臥つゝ陰にて水魚の如く影の形に従ふ如し。さるゆゑに某は甲夜に背門より潜よりて倶に別室にあり、ゝ大が笛を吹くと見えし時立出て、おの〳〵の為体を窺ふつ。それ退けば、ゝ大法師が立かくりて窺ひつ縡おちもなく聞見して感涙ほろ〳〵袖を濡せり。犬塚犬飼犬田等は既にわが主家に宿縁あり。山林はそのゆゑなくとも亦得がたき豪傑なり。われともかくも相謀なく、犬塚が今霄に遁る窮阨を救ふべくは早すでに命に代らんとせられしは遺憾し。わが主君里見殿はおん父季基朝臣共侶に結城籠城の折忠戦の義によりて成氏朝臣の御方なれども近き比は讒佞の執権横堀史在村が奸佞非法のゆゑあれば、かの御方には疎遠にして交りもあらぬ如く[illegible]

なれば大塚難義に及ぶ。われ亦一臂の力を勠して追手の兵を殺ちらし、相伴ふて本国へ還らんとて、そのよしなれば人々心安かるべしと叮嚀に慰めつ、その意を詳に告るになん。僉駭然としてうち驚き惑ひつゝ夢か覚果ぬ夢に夢みる心地せりけるが中に信乃小文吾は共侶に膝を進めて、ゝ大照丈にうち對ひて、両君の本名来由を示されて疑ひ忽地氷解せりといへども、道徳は又何等の故に仁義礼智云云の八个の文字見えし。八个の玉を索るは又何等の故なるや。又身の痣牡丹に似たるものを竊に愛顧せられしやらんといとゞいぶかしくと辞齊一声すれば、ゝ大はゑみつゝうち点頭つ。おの〳〵の理りさる縁故を告ん。その所以は如此ことと彼八房の犬のうへより伏姫の始終の役行者の示現感応并に白玉の数珠のこと、おのが出家行脚して二十二个年歴るまでの凡事の顛末を、安西景連が滅亡の條より伏姫自殺の條まで辞短く解示しつ。さそのかみ伏姫は賢にして心操いと雄々しく、孝にして慈悲ある才

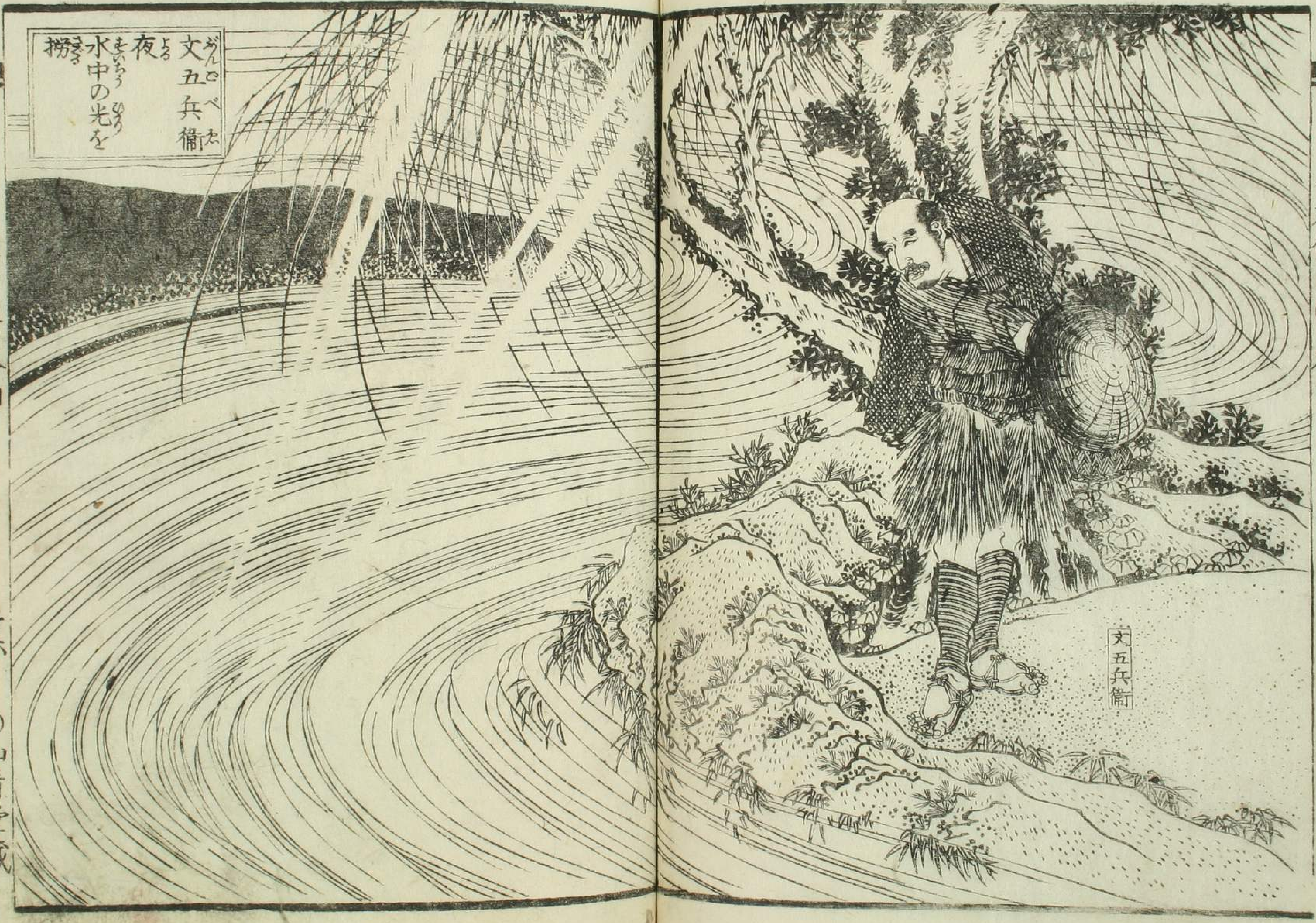
貌無双の未通女なりしに。親の故に八房の犬に伴れて。富山の奥に入りしかど。絶てその身を汚されざるのみぞ。法華経讀誦の功徳によりて。彼犬さへに成佛せり。しかれども因果脱れがたければにや。物の気もその氣を感じて。懐胎六七个月に及びしかバ。義に自殺をなす折。その瘡口より一道の白氣忽然と立升て。彼蔵得の数珠の玉共に中天に昇りて乱れ。仁義八行の文字見えたる。その八个の巨玉ハ八方へ飛行して失て残れるハ地に堕たり。是謬て鳥銃もて件の犬を撃殺し。剰姫に傷けれども。君公の仁慈なる。當坐に自殺を禁めて。その身親某が髻を剪て捨て出家を許しめ給ひしが。その時失たる八个の玉の往方を索て又舊の数珠に繋ずバ帰らじと誓ひて故郷を立去しが。はからずも汝達現八ぬし又彼犬川荘助も感徳の玉あるを見ぞ。その玉に見えたる文字ハ。かの数珠と符合せり。且彼八房てふ犬ハその毛白と黒の斑雑へて黒きハ牡丹の花に似たる。その数八个の斑毛なりければ八个の花房といふ義をもて。八房と名つけ給へり。さるに汝達荘助等まで四個ハ倶に身中なるその痣牡丹に似たるにあらずや。かゝれバ汝達ハ。おのおの父あり母あれども。その前身ハ伏姫の胎内より顕れ走りし白氣の生れたるなるべく。その因を推して果をもていへバ皆伏姫のおん子にして。義實朝臣の外孫なるべし。且おのおのその氏ハ或ハ犬塚或ハ犬川或ハ犬飼或ハ犬田と皆犬をもて稱するも是不可思議の因縁なり。かゝれバ汝達四人の外に又四個の犬士ありて。その相似たる玉と痣を具足したらんの疑ひなし。今その人をしらずといへども竟に全く聚ざらんや。これ宿願稍時到りてここに半を果したり。疑しくおもはゞこれをよく見よかしと説諭して。伏姫の像見なる。数珠を取出て示しつゝ信乃小文吾ハ豁然と。玉の来由を感悟しつ。遽しく彼数珠を受てつくづくとこれを見るに。現自他四人が秘蔵の玉と一毫も異なることなし。只顕れたる文字なきのミ。数珠ハ百顆にして数とりの八个の巨玉なかり

けふ原来吾們が所持たりしにみるこの数珠の巨玉なりけりといへどもなほこれまでと
これが過世怪しむ両犬士と俱に妙真も感嘆して件の数珠をとりて拜みて幸にて。
縡断ざるかし。夫婦が耳にも入りたりけん房八は苦しげに吻と息して眼を睜り。よに
羞ぢし死人ならざるよ。子の横死は惜むに足らず。されどその隊に入るよしある死なりけん
後まぐれと欲するは噫憾べし憾べしと只管嗟嘆しまをしけり。大はこれを憐みて。
その係らに立よりて。やよ主房八さのみな憾そ。汝犬士にあらざるとのみ。その義
烈は犬士と共に後の口碑に伝らざらんや。且又則汝が祖父安房の杣木の朴平が
武藝の師なりし主なりし金碗八郎が獨子なる八郎大輔の自殺のもとは定包を討滅せし。
功成名遂て栄利を願はず。死してはよく亡ざる是忠臣のまことなりさすけれど彼
朴平が失なき。かれが父の憾る所。誰かこれをよしとせん唯この順孫房八ありて祖父の
悪名を雪るに足るよすがとぞ見る。今汝が為に朴平が疎忽の罪を亡父にかはりて宥る

あなかしこ。かれが冥府の累にして。清果を得よかしと諭しつゝ辞をちからに小房八は告と
向上て左手を抗て頻に大をうち拜む欷ひさへすと妙真は又哽かへりて哭に
けり且して大法師は妙真がほとりに臥させし大八が亡骸をと見かう見て嗟
息し。この小児憐むべし。死して時を歴るといへどもその血色変らずしてさながら生る
如くに故あるらし。亦奇なりとひとりごちて小膝を突て女をしぞ死骸を抱起あげ。
そがまゝ膝にうち乗して脈を診んとて左の手の寸口を楚と捉と斉く大八忽地
甦生して曰と哭と頻りに臆生まれてより握詰たる左の拳を初て撥開けるに
掌の中に玉あり。信乃小文吾木が玉と異ならで是も仁の字見えたり。加旃
大八が腋肚に痣ぞ生つ。単衣の腋散よりは黒かに見えたるが形牡丹の花に似
たり父房八に蹴られて死たるの痣はいで来しを人ゑるに今まさくも見えざりけり。
凡この席にありとある者がかる奇特に驚嘆して歎きを復を歓びの声は旱魃に

雨ふりて枯たる稿に八束穂をみのらするにも、なほ勝るべし。さるが中に妙真は、歡び余りつ涙を拭ひて、小文吾と共侶に又屍を慰めて、耳の辺にて声立て、房八よ房八よ。お沼藺よ。大八を甦生して、如此々々の奇特あり。云々の事と稚児を引よせて、玉とらせて、やよ喃と呼活すれば、房八やうやく点頭て、原来この子は宿世の渠を坐艸の上より見て、左の拳を攫ねば、羸弱者とて賤しめられし、大八といふ渾名さへ負せられしも、かくまでに親に勝れし、渠その玉にて瘂なれば、犬士と誰かいはざるべき。これぞ冥土の餞別に受る親の果報なり。母もさこそはあるべけれ。適よき子を産ぬと誉られて、沼藺は目を見ひらきて、笑しげなる貌しやとぞ、末期の一句果敢なくも、玉の緒終に絶にけり。噫惜しやと、妙真はむなしき骸によりかゝりて、喚入せども逝しより、かへらぬ人の数に入る、親と子ともになりて、大八は母の喃乳汁賜てよと携るを駭きて、小文吾は、その甲斐なきものぞと、後よりまた抱留めても、とゞめあへぬ涙なれど、哀別離苦顔を背けて、泫然たりし當下に、山の妙真は頭を擡げ、涙うちはらひて、大八に対ひ、孫大八が生れながらに左の拳を攫りしは、胎内よりしてかの玉を握りてをる故なりき。彼伏姫と申さんの菩提を弔せ給ふなる、道徳のかゝる縁綱ありて、うち発くべき為なりと暁りても、奇怪しく待就て、この孫を大八と喚做せし人乃負せし渾名にて、先輪車といふ謎は、實は真平と名けたり。房八が親の字を真兵衛と喚れしも、その真の字をかくさんとなり。祖父が如此命して、氏は則犬江にて、家號も犬江屋と喚れたり。今さら思へば、その名も亦犬といふ字を冠せしも、不思議の因縁なり。願ふは今よりして、孫が名を犬江真平と呼かへて、物の数ならずとも、大士の後に居らしめなば、今目を閉る親へ孝養、これにまさるものなしと、涙ながらに口説ば、大八は幼くて、莞尓とうち笑喜哉々々、祖母の情願、氏も家號も主を識る犬江なりし、亦奇あり。且その親房八は身を殺して仁をなせしに、その子は仁の字の見れたる

玉を得たり。孝ハ仁ハ五常の最たるもの。通天の心にして賢者もこゝに居ること難し。今亡冥平山親に代りて犬士の隊に入るものなれバ。その眞の字をおやと讀む。親の字に写更て犬江親兵衛仁と名告バ。その子にして親あるべく房八ハ再生して犬士の隊に入るに等し。且房八の二字を轉倒せバ是則八房也。沼藺を轉倒せバ是又いぬ也。妙真が俗名なり。戸山と富山と和訓おなじ。倶に名詮自性にして八房の犬富山に因あり。又妙真ハ真俗二諦一念三千の妙旨によりて。その夫その子その婦と倶に清果を得るの義あり。その禍の胎を推せバ房八が祖父あり。朴平が失ありて光弘ぬしを犯せしかバ。嬖妾玉梓時を得て逆臣定包を佐けたり。主家を横領せしに起れり。又福の基を推せバ朴平が獨子あり。犬江屋真兵衛その性直也。かくてその子孫の為に舊怨を釋んと欲して。慈善の誓願を發せしかど果さで。その子房八遺命を守て身を殺して仁をなせり。則二世の功徳に生れり。因果の脱れがたきハ鳥の林に集る如く。虫の草に聚るが如し。只悟れるものハかくまでその死を歎くべからず。只その生を楽むべし。この所以や。と解示せバ。衆稍無明の醉さめて有一阿と感じたる。當下小文吾膝を進めて。犬江よりにも道徳の教化ハともかくもあれ。就て又一條の奇談あり。外姪大八の親兵衛が玉を握りて生れたる。今さら思ひ合するよしハ某総角なりし時二親の夜話に往時寛正三年の比かとよ。この入江河の水中に夜なく光明を放つことありけり。人みな怪みて怕れて水底を撈るものもなかりしころ父文五兵衛ハ年来漁獵を嗜むにより一夕網を携て入江河原に赴きて件の光明を心あてにしべく網をおろせしかど。物ハつやく罹らねバ其孔に望を失ひて。その暁に宿所に帰り。次の日網を乾さんとて引揚て擔擡ると見網の中に物ありて漏落るとおぼしく。錚と音しけり。その年沼藺ハ二才也。親の網を乾す傍に這よりて。彼落たる物を撮て口に入れしバ父そを吐せと驚て。その口中へ指をさし入れ泣をも厭ず探れどもはや呑下し



文五兵衛（ぶんごべゑ）夜（よる）水中（すいちう）の光（ひかり）を撈（まさぐる）

たゞまけるにや竟に及ばず止にけり。いかなる物を呑たまひけんと思へば安き心もなくて。そや日数経る随に。沼藺は恙もなかりしかば。漸くに安堵しとぞ。彼水中の光物は名劔にもやと思ひしが。夜を犯して網せしかども。底には藻屑もなかりしものぞ。この後は入江河に光明を放ざりしなりと昔語にせられしなるを。顧ふに女弟がいとけゝる時。網より落るを拾ひて呑られし彼玉なるべし。かくて彼玉はその腹中にあること十五年。沼藺が十六歳の春。房八に帰ぐに及びて。いく程もなく有身りて。その年の冬生れたる赤子の左の掌にその玉を握りてしかども。時到らねばいまだ披かず。今又こゝに四年に及びて。件の玉は見えずに亦是不思議のことなるぞやと告るに。人々耳を澄して。いよいよ感嘆したりける。

第三十八回　戸外を戍りて一犬間者を拉ぐ　徴書を返して四彦来使に辞す

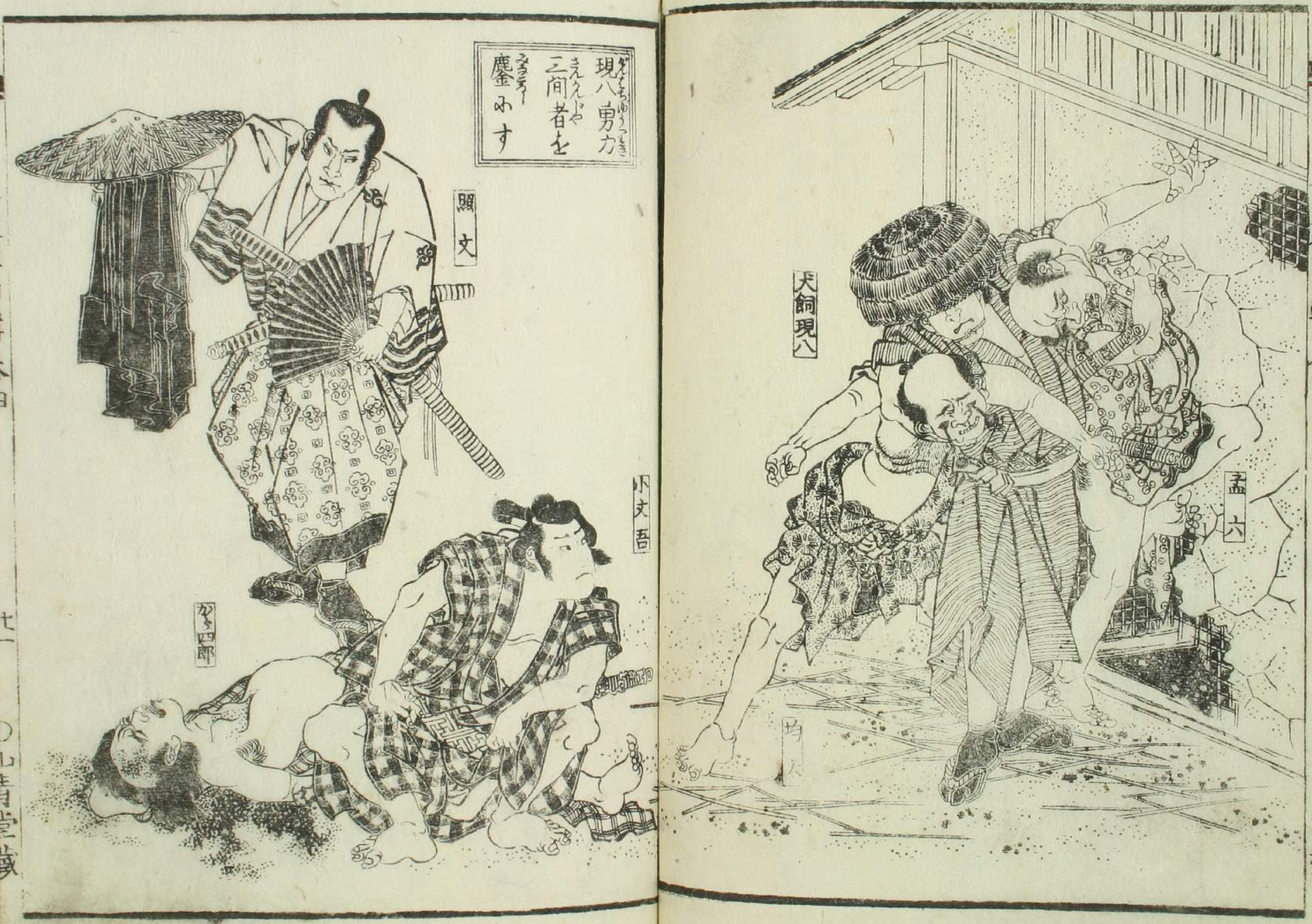
信乃は件の物がたりを。ほくほくとうち聞く。稱賛特に浅からねど。さていひけるやう。某総角なりし時。家に畜ふ犬のあるは。昨夕あらまし親子に告まゐらせし。その折に外より立聞したるが道徳にも似ざりしならん。彼巨犬を與四郎と名つけしよしは。其全身黒白八ケの斑毛ありて。その足はみな白かり。因て四白といふべきを訛りて與四郎と呼べり。後にその犬の斃れし時。庭に埋うづめけるに。次の年の春。そのほとりなる梅に最も異なる子を生びき。一蘖に八子蘢りて。世にいはゆる八房の梅是なり。且その梅子に仁義云云の八行の文字見れて。鮮にぞ讀れたる。日を経て文字は消失たれども。その核は今尚あり。彼與四郎は乃母の感得たる玉を呑ぬとは知らずして年を歴て。玉は犬の瘡口より。忽然と顕出て某が手に入り。梅の異名を木母といふ。木母は則母の木なり。今この児と号ぶ玉はおのづから母よりのぞき来れり。且彼梅子の八房に生りたると。與四郎犬が八个の斑毛とみるに。かゝる因縁ありしなるべう。なべて妾に暁らず。加旃梅子に八行の文字見れしも。亦某と荘助と外にも六個の豪傑ありて。その相似たる玉と痣と具足せる。夢の告あり。伏姫上の神霊いまし神

宜なるかな現八房の犬を轉倒したる。房八沼藺の鮮血をそゝぎしは。よしや男女の血を洗ぐとも。さらに難瘡かくまでに速に愈べしや。それのみか又彼血を盛し貝は修験の法器なる役行者の利生もあるべし。左にも右にも此の夫婦は。再生の恩人也。惜むべし惜むべし。その身犬士の隊に列らざれども。その子に譲るの故をもて世をはやうせらるゝとも今は彼梅子なる八ケの文字を消失ぬれども。八房の梅と房八夫妻と亦是名詮自性乃義あり。核を夫婦が墓に伏て末世に功徳を標すべし。かゝれば其子大八の親兵衛はおのづから骨肉の分に繫る。後年里見殿に仕まつらば。倶に戦場に臨まば。某なるとも其の子を負て敵を鏖にして功を譲ん。倘その戦ひ難義に及ばゞ。近づく敵を殺拂ひ或は前面に立塞がりて。その死に代りて今宵おのづから受し再生の恩に答へんかくもし山林今中途にして傾逝の遺憾何物にか譬ふべき。悲しかるを友をあはれぶ心の誠二鞋の隔なき胸をうちあけて懐嚢に納る梅の核を捜りて出し。包紙を推披きて房八にぞ視しける。されどこの梅の核は後に件の夫婦が墓に蒔れなばより芽を生じ。八株の弱木年を歴て。その実は房に生ずべし。里人なべて件の梅を房八の梅と稱へ又八房の梅と喚ぶなる間詰休題。房八は大かたならぬ信乃が誠心の歓しさに苦悩を忍びて梅の核をとりながらくるしく膝折起し。吁賢なるかな犬塚ぬし。博愛言下に顯はれて。某を過世あるらしく。犬士なることは残らざれども。金碗殿の子息にをなせし。大道徳に邂逅して。祖父が罪を宥られ。いとすがく死年来の夙願成就せしのみならず。齢甫て四歳なる大八の真平は親に代る義を取て親兵衛と字せたる。仁と名つけらるゝ。意外乃大幸。今般の歓びなる欽亦このうへにやあるべき。かくてぞ子は犬士なり。且その小父に犬田あれば後見をせらるべく。犬塚ぬしを師として頼まく。此彼の愛顧によるならば二親なしとも何をか憂へん。面影の怪しかりしまでに犬塚ぬしに似たりしも是その因果なれば。なからん。加以某夫婦も玉に象る八房の実生の梅もて墳墓の標ともせらるゝなるが。

さりとて員外の犬士にあらねど。望足りぬと答る間に。あくるよの惜む別を促し良久して。榯に鶏の声立て。天は明なんとぞ乱れ鳴く。房八耳を傾て。はや鶏明なりと東を見やりて。さらずば勤死によりて時後るべし。己が死も遂に空事なるべし。阿舅々々。介錯たのむ。とく〳〵と焦燥ば。小文吾は今更に推辞べきならねども。猛死覚期にのぞめるを。足も進まず拳も撓て。応をなして立たり。当下蜑崎照文は房八小文吾等にうち対ひて人々よ。己が言を聴け。促すとも。惜むとも。生死は天理自然にして亦いかにともすべからず。むかし我父十郎は。伏姫富山に入りたまひし日おん傅を命せられ。直に汗馬に鞭うちて。姫上を追まつる。彼山河のながれ瀬を。わたさんとせし程に人馬倶に推流されて。其処に命を損したり。さるに某此度君命を稟まつりて。大約関の八州に。賢良武勇の雋傑を募んと欲する程に。大法師に環会て。その引接に依る。ゆくりなく伏姫上のおん子に等しき四犬士に相見ぬ。賢を招くの本意に称へり。さるを

山林房八郎は。その義その勇犬士に劣らねど。非命にして今終るとも。且里見の家臣なるべし。己が君公の徴書なくにあれど拝受して夜臺に就かば。その子親兵衛幼少くとも。君臣二世の恩義深うをも。身後の栄子孫の為にも亦よかるにやと鷹揚のこゝろを速く小四方なる一通を取あげて。房八が額に翳させ又小文吾を見かへりて犬田生この意を得たる歟。房八郎はけなげにして里見殿の家臣なれども。その身必死の深痍を負ぬかくまで忠勤に餘日なし。只その僚友犬塚信乃が厄に代り死を救ふで。主君の為に得るに等し。是莫大の忠なり義なり。救ひたる深痍と知ても。いのちまでを苦痛をさせん。介錯も亦惻隠ぞと。将大も武士魄に。小文吾有理とおもひかへして腰刀引提て身を起せば。房八莞尓とうち咲て。鄙言にいふ人は武士。世は唯なさけ。蜑崎ぬし。尊意謝するに餘あり。己は賤しき船長の子に生れても。幸ありて武門に入てその死を得たり。さらば阿舅の刀を労せん。いざ介錯そと掌を合して項を伸たる。

あなやと。小文吾が椽側なる刀の光に吐嗟とおどろきて母妙真は身を辟くより堪ざる胸は枚久の潮けりよせて砕けてちるなくも消てゆく子をとゞめかねし涙の出水海に入るが瀬による亀の浮木にも復あひがたき死別のかなしさに声を立じと噬縮る。袖なる共に腸の断るおもひに哭沈む。信乃も有繋に哀戚の胸を痛めてうちまもれば、大法師は房八がほとり近く對ひ立て。経誦被りて偈を示し。なづらふに授る念佛の数は十声と八声の鶏の音雌は鳴ねども母は哭く。まだきほのくらき心の暗を照してもともすなく振揚る刀の晃も東天紅雛塒なるらの羽搏と。共に閃めく大刀音は無常迅速夢欲とおどろかす覚るべき死天の山林惜や杪の獨花の。ちり際清き最期で。妙真はかくよりかゝるべしとは思へども。なほおもひ沼堪で伏沈き声をも絞りて號哭べし。膝を枕に再蘇せし稚児は驚覚て。そゞろの鳥乱て見んとするゝ爹さま喃と立よれども。小文吾は遽しく血刀鞘に納めて。その亡骸を見せじとまく。房八が身にて小袖をぬがし。信乃が血著の麻衣をとりて披えてそれを被たるとも知らねばなほ稚児を詞はしげに又見えずりしく。奶々さまはいづくにまで欲さのその独臥のみ祖母さまのむつかるによる物数まふて賺し遊しあはぞや。その替に吾儕が乳汁賜てんと死顔をさし覗きて細小なる手を懐へ入れんとすれば妙真はよゝと堪かねて慌忙き稚児をかきよせ引よせ抱縮る理りなれど大八よ。縦百年の[illegible]。爹々はかへらず。奶々も泣起ど。慕かなしきをなりひそのりて随に止ず胸を張や裂んとうち歎く。直愛に洩ぬ袖の露。皆ともに又死頭を低て慰めかねて愀然たり。浩処に外面俄頃に騒しく。投らて立音。叫ぶ声。檐下近く彼のこゑしつ衆皆齊一驚立る中にも小文吾はいちはやく土間に飛下り。梱戸を卒と開きける間あらせず外面より撻と投入る人礫に。その人框に頭を撲して脳黄塗て死ぞける。人々はいよゝ驚けり。信乃は身をもたげて紙燭とりて小文吾ともろともにみれば死したる人は別人


犬飼現八
孟六
均太
照文
小文吾
かゝ四郎

現八(げんはち)勇力(ゆうりき)三間者(さんかんじや)を鏖(みなごろし)にす

るゝぞ。是則甲夜にまぎる。塩濱の鹹四郎なりけりと謂る程もなく。敵を左右に挾まれて。衝と内に入るものゝありけるハ犬飼現八。拉れたる間者ハ是鹹四郎が等類なる牛根孟六と板扱均太なり。大力に締著られて。目をそらさまに舌を吐き。悶苦しむ息吻あへず。當下信乃ハ立かへりて。樞戸を闔しが。現八ハ両敵を一度に撻と投果ねて。膝に引布て動せず。小文吾信乃ホ又對ていふやう。某畏義に志婆浦へ赴きて。破傷風の薬を求めしに。彼藥店ハいぬる年。鎌倉へ移住しぬ。今ハ彼処にあらずといへり。忽地望を失ひて。惆然として。おのがまゝより又鎌倉へいそがばいかで急ぐとも。けふ翌ハ還りがたし。犬塚生ハ大病ゆゑに。往返に日を過さばよしや薬を購得るとも。轍鮒の窮を救ふに足らず。とて立かへりて大田親子によしを告て相譚ふに。みなはせんすべのなかりしをと。肚裏に尋思しつゝ。そゞろまでに取て返して且くも途に憩はず。只管急ぎにいそぎし程に丑三の比及に門まで歸りしに著しかど裡面にいとくるしげなる人の声のきこえけり。訝しけれバ伺ひて入らず且く聴定めて後にもそとおもひて彼処に立在つ。あるじの翁が不慮の窮阨山林夫婦その子の為に犬塚生を庇ひに難瘡早に愈しかバ。大道徳と蟇崎ぬしの人さへ大かたならぬをもとめん。欲しさに息しさる潰まして四月ハおちつかで進み入らんともく又ならず。山林ハ深痍を負ぬその妻ハはや縡絶て。犬塚不思議よ平愈しぬる事。今圓坐に著たりとも死まじき人の生るにあらざなれバ何とも心痛るを勿いまで天の明るまでまちなまべく外を防ぐに如ものをるやわらじとおもひつけまえ駒繋ぬ袖垣に身をよせて音もせず時を移せバ果して二個の癖者未庇間なる壁を穿て簀子の下に身を潜し縡を窺ぬると敵しくて蚊に刺されたる尻を搔き蟷螂かまる面を捫で。又齊一庇間より蝦蟇の如くに跂出て。檐下近く立聚合彼罪人信乃がるすを設も吟て欲されと認めたり。

とて荘官許へ詣て甲夜の怨を復すべく。賞銭は心に須べし。とて走れと密語て歩を竊りて共侶に去んとしける後より。某矢庭に跳蒐て。一賊が衿上掻摑て引戻しつゝ捽胡せず残る両賊は駭怒て。打んと拳を閃かす下を拂ふて筋斗らせ。起んとする初の一賊を又掻摑て裡面へ投入れ。組んとせし両賊を左右に挾まへて一人も漏さずかくの如しと辭せらして告るぞ。小文吾ゆくりなく聞ば。この三個の癖者は名を云云と喚て妻もあり子もある奴原之辻相撲を好めども心よからぬものなれ共。近属はよせ付ざりしに。甲夜に此奴に推蒐来て云云のよしありしがその怨を報さん為欲再び潜近づれけん縡あるには危かりし和殿彼処に徴り。せず遂に大事を惹出でん。密議を聞ける奴原なれば命は既に夏虫の火虫の己なから死に就くの息緒絶しく禍の根を断ゑざりしといふに現八は両敵を膝に引著壓へし俛に項骨屈して摑折けれバ苦とおめく声に叫びも果ず。諸声脆く目鼻より。血を流して死てけり。かくて現八と孟六均太鹹四郎等が死骸を片隅に推累て物うち被てよく掩ひて。さて信乃が病著速に本復の歓びを述て小文吾が苦心を労ひ引まうけ。大照丈にも又對面し。貝妙真を慰めて。山林夫婦が義死を嘆賞し。その子大八の親兵衛が犬士なるよしを祝しける。當下小文吾は現八にいふやう。犬飼生は外に立て縡の顛末を聞けりといへ共今さらくだくだしく告るも要なし。既にそや天は明ぬらんに。猶豫せば彼帆大夫に殺兵を将て必来るべし。縦贋首をもて欺きおほすとも。さではよろづに不便なりき。六首級を齎して荘官許へ赴きて親を救ふべくかまへ來て門を出ればよく見ゆる橋のほとりに繋るは家の釣舟なり。水陸ともに警固の殺兵未釋ざるを見定めて。房八沼藺が亡骸はさらなり人々を舟に乗して潜かに市川なる山林が宿所まで退れ。事人和殿は前にあまたの地に来りまさず。

大かたハ案内なるべし。因てさくらちに任せ。まつろぬ夷と密語ハ現八やゝくうち点頭。さてその事ハ心中さとりし犬塚生と相譚てともかくもまづ天ハ既に明たれども猶かゝ暗るを今朝ハぬるく霧立つめれバ咫尺の間も別ちかたし。さるにぞ鳥の声だにせざる旁己の昨夜なるべくせば。この霧決して霽べからず。皇天后土吾黨を祐させ給ふにぞあなかしこよりや出るに遅くとも縡の妨あらじといふ當下、丶大ハ照文と見かへりて既に四犬士こゝに聚合り。御旋を俟べきのみやといふに照文こゝろえて信乃現八小文吾にうち對ひ。嚮にも演説せしかバ。おのおのハ大かたならぬ里見殿の由緒あり。かの黒印を受納めて主従の義を固せしまゝよ相伴ふて安房へかへらん。兼て勿論なるべしと答えさせて徴書を人別に遞与にけれバ信乃等ハ謹て拝受しつゝ是を照文に返しつゝの為某等ハ幸ひに尊藩に宿縁あり。譬ハ後に将軍ましく官領まし〳〵徴させあるにとも他禄を受べきものゝあらねども。されども今俺們五人の外に又三犬士あるべきにいまだその人に遭ず。その三士ハありやなしや目今定かならねど、さりけれども額蔵の荘助ハ既に同列の犬士也。彼人ひとりこの席に欠るをいかにせん。彼犬川荘助ハ故伊豆の北條の荘官なりし犬川衛二が獨子也。その母親ハ蜑崎ぬしの先考と聞えたる十郎ぬしの従弟とぞ。寛正六年の秋九月。その父衛二ハ横死しつ。妻子ハ追放せられけり。この年荘助ハ六七歳乳名を荘之助とよびつ。母親ハ辛くして稚児を携ひ、往方ハ水長鳥安房に親族ハ蜑崎のみ其知るよしを心あてにその冬の比より武藏まで來つる大塚の里にて母親俄頃に病ありぬ。是により荘之助ハ土地の荘官蟇六が小厮にせられて額蔵と名つけらる。今も尚彼家にあり。身ハ村落に成長れども武藝を嗜み謀慮あり孝あり。且信義を重ずれども實に泥ざるの豪傑也。餘人ハしらずして某未だ彼荘助と倶ならで官途に進まバ是不義と愚意の趣かくの如し。賢察せられまひなんと推辞バ小文吾現八も辞齊一亦かの如し。某が願ふ所も大塚と相

同じ。一圓大塚の里に赴きて彼荘助に對面して。こゝまでの事の趣を告ぐれバ犬塚のそならんや。某等も本意にさぶらへり。かくて且く武者修行して。おの〳〵武術を煅煉すべく。里見殿のおん為に敵國の案内とその強弱を窺知らバ後に資とならんとおもへ。されど又この五人の外に二犬士あるなれバ値ずして輕べきや。八士全く聚りて安房へ參るとも遲からじ。その徴書ハその日まで和殿預りたまひねと志を述しバ。照文ふかく嘆賞し。三士の辭讓寔に賢なり。嚮に某蜑崎よく犬田生の大忍の凡ならぬに感佩しつ。世に大勇士ありとのふもまことのあらじとおもへり。かくて又あるよ來て犬塚生の信義博愛犬飼生の遠慮勇力のいづれか兄とせん。孰を弟とせん。倶に蓋世の豪傑なり。又彼犬川荘助ハ伊豆の北條の荘官なりし衛二が子なるが某と再從兄弟なるのみ。犬川衛二ハ横死して。その家斷絶せらるゝと。某近屬北條を過りし日里人等に傳聞けり。その子ハ今も恙なく。犬士の一人なりける歟。幸ひ甚し。北條ハわが父の故郷なりしとのくめなれバ。遠くもあらぬ類族のうへ年來迭に疎濶にてその家の斷絶を今茲はじめて傳聞侍し。戰國の習俗是非に及ばず。それハとまれかくもあれ三士の辭讓も謂ありて某も倶に大塚の里に赴きて荘助に對面して。徴書を授くべき歟。貴僧の意見ハいかにと問つゝ丶大をみかへれバ。丶大ハ霎時沈吟して。武藏なる大塚の荘助ハ管領扇谷麾下の軍將大石兵衛尉が城郭あるを。倘額藏の荘助ハ云云の勇士なりとて里見より募らるゝとのさたあらバ。彼處へ愧るが大石が陣番に荘助を取籠て決して赦遣すべうもさぶらはず。さあるときハ可惜一犬士を喪ふにあらずや。貪道ハ行脚のものなれバ。彼處へいかにもして荘助に對面して命を傳ふるとも人の疑ひなかるべし。さあれども蜑崎生ハまだ四犬士を識らず。その一人だも倶せずして安房へかへらバ何を裹何を徴に反命をまうさるべき。かゝれバ犬江親兵衛と

その祖母妙真を倶しつゝ親兵衛既に安房にあらば自餘の犬士を招ぎても。竟に参聚ふべし。貪道も一トたび故郷へ還りて君の見参に入らんとの願ひなきにあらねども。むかし失ひし八顆の玉のまだ全く聚らざるをいかにせんかくれば満願の時至らん日に七犬士を伴ふて見参すべくおもひしよりまづその徴書は野僧且く預るべし。犬塚犬田犬飼にも且市川より退去して大塚の里に赴き竊に古人の蹟を荘助に告るそよろこぶめり。貪道は山林夫婦の為に追薦の讀經なして後に彼処へ遷るべし。この義に從ひ給ひねとのべが照文大に歡び別に四通乃徴書をとり出て前の三通と共にしく大に遞与けり。當下妙真は照文等がほとり近く親兵衛を果らしくさそひけるかば。かゝる稚児をとゞめなく安房へ徴さるゝのうすよろこびに絶ましても二犬士まち推辭あるべき物数ならぬ親兵衛がひとり先だちて参るべしや退くとも進むとも人々と共に侶にと宜ひける。

情あるかな今孫をのみ徴さるゝは影護く侍りとの理りあるよしは小文吾も外侄乃為に辞を添て只共侶にと辞しかりさまけれども照文はやゝく許さぬ気色あるて。説諭さんとて争ふを、大かた急に推禁め今又これらの問答に時を移さんは要なし况て親兵衛は小児といへども亦是犬士の一人なれば則麟趾龍孫といふべしこれを他領へ措べきにあらず今にて安房へ遣されなば後に議ある遅延にあらぬを文五兵衛が還り来るまでは外祖の意見もあるべし。抑伏姫上のおん数珠は役行者の通力にて。授られしもの也。されば又や姫上の幼稚をおはせし時より卒れおはしくその日まで行者の示現あらずくもりて顧ゑに見え十一郎と犬田山林が甲乙を試んとて修験者に打扮てこの地に来る。それだも四犬士を相識るのみに非も亦役行者の利益なるのみ。ゆゑに親兵衛が進退も亦おのづから便宜あらん朝霧あく立こめたりとおもひたる時移さぬ小文吾は謀りし侭にして荘官許多ぞとて促せば何とか应。信乃が血書の麻

衣の両袖に沙羅離と列衣よりく房八が首を引よせつゝ、おもてを包めども見ゆる又哭く妙真は包みし袖の両齊間は絶て鬼人に被せるが後の屍身是や此の世の別ぞと知らずも墓に稚児は小父さま何処へ邁るに吾侪も倶にと貪縁るを信乃は賺して引捩る糸のあはれの苦しみと歎きつゝ煩悩の犬飼は目をあはしぬ齊一悲歎丈けるがうく小文吾は腰刀拿て腰に跨首級を右手に提しく丶大照文に別を告信乃現八に後のこと鹹四郎など屍は入江の淵へと密やかに諜しあはしく妙真を慰めつ又将犬ら親兵衛が王のるさへに堪ぬ歎きに懶惰て失しあふると心をつけく身を起せど霎時目送るのみ人を立しく迹に横はれるあはれ夫婦の亡骸の夫は舊の侭るならで軀と首の死別是歎きの霧と憂き霜に朽も曇く尚暗き門の戸を卒と推あけく翅たかく鳥自物朝立遠く出にけり。

里見八犬傳第四輯巻之四終

南總里見八犬傳第四輯巻之五

第三十九回　二箱に歛めて良儔夫妻を瘞る　一葉を浮めて壮士両友を送る

文明十年戊戌の夏六月廿三日の朝未明に犬塚犬飼の両義士は丶大照文等と倶に犬田小文吾を目送りる門の戸やをら引閉く舊の席に團坐しつ。まづ亡骸を隠さんとて泣沈をる妙真をおほつかなくも案内おして卒して納戸より求出する両箇の葛籠に山林夫婦の骸を精悍しく歛めて、その表を莚に包みて舩荷のごとく造る程に、大法師と照文は入江橋のほとりに、ゆきて文五兵衛が舴艋を竊に背戸川へ漕よせるに、露ふりければ人に知られず、又彼五六鹹四郎等三個の悪棍の亡骸は、信乃と現八と背戸の河原へ扛もて出つゝ腰に錘の石を

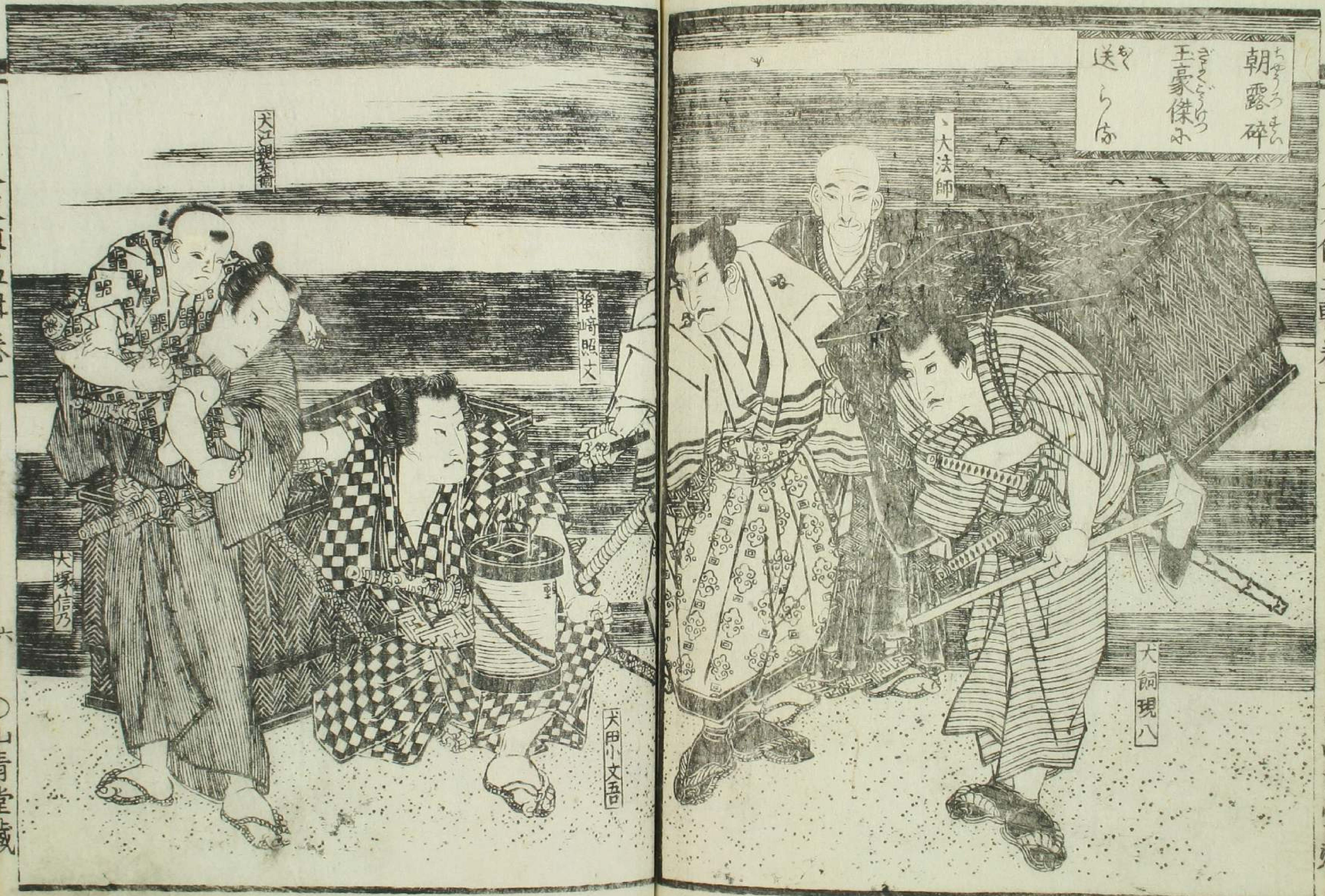
附て水底ふかく沈るゝ大八これにも回向して頓生菩提と念ずれバ人みな有繋に不便におぼえて共に念佛したりける○程に卒送もなく整ひしに天ハいたく暗うして進退既に便宜をゑたる入江橋のほとりハ戍兵絶て船に誘ふべき此の隙なりと其ぞれ頷きつゝ謀し合せる出船の纜とくくと急せバ妙真ハ大八の親兵衛を抱起て葛籠に添ふて舟に乘る○信乃現八もうち乘りて板子の下に伏してをり○當下蜑崎照文ハ蓑笠に姿を窶して艪に船を漕出せバ大八ハもとより留りて霎時河原に目送るに其處とも見えずなりて○方に是義士節婦を皇天憐みたまふにや靄ハいつしか立籠て咫尺の間も定かならねバ彼帆大夫が遠見の兵退りでありとてもいかでかこれを認べき○船路に障るものなく海上遥に走る程に靄收りて日ハ出たり○されバとあれ照文ハ楫とり迷ふべくもあらで素より安房人なりければ水をゆくを陸より易うして市川の郷ハとく吾儕の家ハ彼處ぞと妙真が指まねく船ハ門邊に著にけり○猝の便宜ハ是のみなるぞ犬江屋の篙工們ハはやく遠く船を出して昨夕より一人も在らで留守ハ耳のいと疎き炊婆々のみなれバ○信乃現八ハ後やすくて照文ともろともに河岸に登りつ妙真を先に立して柩に代る両箇の葛籠をもて母屋に運び入れて家廟のほとりに扛居る程に○あるじも慰めかねて齊一嘆息したりける○されども妙真ハ心ざまかしこく、かゝる子の義烈に羞かりけん復とて面色せず奥なる一室の塵うち拂ひ○信乃と現八をこの處に潜しつ照文にも茶を勸め膳を薦めなどして饗応の叮嚀なる又服ある折々ハしのび〳〵に家廟に對ひて香を燒花を齋て兒子と息婦の後世を弔ふ看經の外他もなく忘れんとすれバ生憎にその面影の目に見えつゝいつもしもの胸に想ひ出ては禁めかねて落る涙の玉匣開く親なれぬ身ぞと

あるかあらずか稚児は母を慕ひて大人しく或は外に出門に立て獨遊に餘念なき。鳩の車に竹馬に走り疲れし假寐の裾に衣添るものもなき睡顔を見れば親に肖て。逞しげなる生育も今茲も末は逆なる土用央にふるとふ秋の風より悲しきは殘れる老の身にそとよりそひつゝ抱き揚れば憂愁現ら懐へ手をさし入れて萎たる乳房を探るも哀れなり。かくてその黄昏に小文吾は大いらもつし行徳より来まさり妙真をゑくこれをもなくさとて奥へ案内を請へば信乃現八照文等は歡びて對面しつ彼條の首尾を咨て文五兵衛が安危を問ふに小文吾声を密して曩にハ其路を急ぎて荘官檀内許赴きしに霜深ければまだ開ぬ諸折戸をうち敲きて犬塚信乃が首捕て來れりと報しかば且して召入れつ新織帆大夫奥より出てみづから事の趣を問糺すに狐疑の用心大かたならで檀内ハ左が側に坐り縣兵ハあまた十手を把りて左右間ちかく捕巻てその紊をまもりぬ。豫て仰を稟るにつき僕きのふの黄昏に宿所に走り還りて見れば果して一個の旅客ありけりそハ武士なるべく身の中に刀瘡あるのみならで起居に聊不便なり。よりて彼を見賜ひし骨相圖をもて披きてこれを彼窺に合しみれば年紀より面影より被たりし衣の色までもその模様些しも違ざりければ聲者に撈らさくもその人なるべし。しかれど現疑ふべくもあらぬ信乃と思ふに極まりと思ひたれバさり氣なく暗ひよりて酒食を薦め更闌臥房に潜よりて只一下刀に刺殺して首捕て出走り大路廣き。僕がかつてきのふまでハ見も知らざりし犬塚信乃をうちて親文五兵衛が識にあらねバ舎藏べくもあらぬを荅に胡論ありしハ事に熟ざる老人の僻耳なるをいふなれ此度の恩賞に親の縲紲を免させ玉へと申て彼首級を取出て包みし侭に差し寄すれバ荘官檀内受とりて実検なんど備へる當下新織帆大夫ハ包みし衣をときつゝ又うち披きて首級をよく見て又骨相圖に合しくらべつ。

忽地横手を礮と拍く感ずること半晌許満面に笑を含みて某を招き近づけ。小文吾微妙に働きたるハ紛ふべくもあらぬ信乃が首級を進らしつれバ文五兵衛ハ科を免して汝と共に宿所に還さんずれも亦遅くあらじ。速に許我にかへりて是の趣を申あげなバ怠慢の罪を免るべし。とく人を走らして戍兵を退せよかし。余のことハ云云とうち案じて櫃内におちつるをぬかせたりつる程に靄霽て日升りぬれバ帆大夫ハ促装して首桶を携へ郷兵をひきゐて遽しくかへり去りぬ。さて父ハ免されしを相伴ひて入江に還るに彼権媒をまづもせねバ身の縛の釋るを歓べる氣色もなく却てうち見ゐたる胸中さま〴〵と推量れども路次なれバ告るに由なくて宿所にかへり着バ大道德に迎られてみな子舎に圓居しつゝ身がハりの事の趣房八が義烈沼藺が枉死及茱血の奇特よりして犬塚生の雑瘡平愈大八の親兵衛が玉のこと痣のこと念玉観得両修験の本名本心迄もかくさず父に報れバ大道德も人々を船に乗し霧を犯して市川へ遣しつゝそのよしを告知し父ハ久しくゆく毎に下らバ驚起ち又下らバ歓び且感し且歎く涙を袖に堰あへで膝に流れてゆく水のかへらぬ事を今さらに有繋に老の心弱くて今悔く役に立ざりし。かゝれバ汝ハ道德に倶して疾く市川へ赴きて妙真が手力を勠ね房八沼藺が野邊送りハ今宵なぞあらんずらん葬もする果なバ汝ハ彼両友を潜やかに船に乗して大塚まで送れかし。われも共侶にと思へども婢児們ハ殘してぞよしや彼れらハ久しく来るとも親子齊一おらずバ留守の程も心ごゝろとし且愁に彼柩を見バ又哀さを増んのみ家廟に撈を折添て看経しつゝあらんを老人ならで相応しからめ。汝ハまづ閣きてとく〳〵といそぐなる親の意に任して彼此に血に染る物太かるを洗ひ流して道德に倶して来れかしとて其槩略を報知けれバ人々感嘆せざるもなく就中信乃現八ハ文五兵衛が無異を祝して小文吾を

労ふとの大かたならぬ言葉の末までも山林夫婦が死を惜むこゝろぞ深かりける○且して妙真ハ涕をおさへて小膝を進め喃犬田ぬし○かくいふ我が子の志竟に空しからずして輙く追捕の人々を欺きぬれバ亡魂のさぞ歡しく思ひ侍らんずるハ蒿工ら[illegible]在らバ現大人のいはれしごとく葬のことハ今宵ならバよく影護るべし○と[illegible]バ小文吾点頭く己もさこそ思ふなれ犬塚生の急難の一旦ハ釋れどもなほ許我へ遠くもあらざれバ房八沼藺が死したるよしを且く人にあかさゞるも四鄰の人のもし問バ沼藺ハ聊故ありて行徳へ遣しつ房八ハ所要ありて鎌倉へ赴きつと答なんこそよろしかれ月も絶になりぬらし○この宵闇を究竟なる夜中の頃に如此々々といひ合して時刻をまてバ大法師ハ亡骸を斂めし葛籠のほとりに退りて潜やかに回向をしたまふ枕念仏も夢の世や彼邯鄲のあはれげに母が起つゝ焚なるハ出立の飯も逆縁の涙を鍋に落し味噌妹さへ伏まで花開きて縁しハ薄き実なし汁せく

あへ阿弥陀佛弥陀仏々々と念ぜれバ○初夜過ぎて寺々の鐘も無常を示しある流轉の巷煩悩の狗の声より更ゆく生死の海近ければ彼岸よする波の音よせくハ返る呼吸の徂徠の人の迹絶て既に時刻になりしかバかくて支度を[illegible]房八沼藺が亡骸を斂めたる両箇の葛籠ハ小文吾と現八と背に負つゝ彼盤を携へ大八の親兵衛ハこの時まで熟睡せしを信乃が擁きて墓所まで供に立んとて照文ハ豫て準備せし卓張燈を引提て先に進めバ大法師則導師おなじく両箇の葛籠の間に立せ給ひて背門口より送り出すを暫時とも留め難て妙真ハ姥捨山の姥ならぞ送られて只ひとり端居に携る柴垣の袖に涙のたまゝ繰る珠数に唱名の声しも曇る宵闇の天斑雑なる星影も定めなき世の哀別離苦堪ぬ炎暑の六月も今宵ばかりハ肌寒き風ハ本来空水火滅んとしてハ又光る蛍欽とぞ見ゆ○張燈のみえずなるまで翹ち伸あがりて目送りけり○さる程に人々ハ


朝露碎（ちやうろさい）
玉豪傑（ぎよくがうけつ）に
送（おく）らる
ゝ大法師
犬飼現八
犬田小文吾
蟇崎照文
犬江親兵衛
犬塚信乃

阡陌を邁くこと百歩許西へ入ること一町あまりて陝小なる岡ありけるこの処ハ昔より大江屋の墓所なるを小文吾のよく知れバ云云といひあへず躬から葛籠を卸まゐらせん現八もやをら卸しなる葛籠の上に附たりし鍬を両人手に把て房八が親真兵衛が墓の側なる壌を掘起すこと七八尺ばかりも穿果たり當下信乃ハ稚児を石の上に居措て両箇の葛籠を擡よせバ小文吾現八諸ともにうけて穸に繰おろし夫婦を合葬する程に大法師ハ穸のほとり近く合掌して引導の語句を唱てのらく○

諦聴諦聴四大本来空矣分別泡沫與夢幻妻子猶渡器況珍宝乎疇能随汝者儻不破壊一團心識亦焉知寂滅之為至楽頌曰荷葉與花共浸影漸瀝涼風蕭颯急催秋其気清冽其色惨淡涅槃室中物僉休息吁得時哉吁得時哉即投與以下火最後之句子作麼生看

破熟池中並頭蓮分明紅爐上一點雪　喝

唱了て退くと頓小文吾と現八ハ再び鍬をとり揚て立地に埋めをはれバ信乃ハいと大きなる石をもて来て推すゑたる左右に梅の枝を伏せて阿伽を沃ぎ莽草を挿ミ大八の親兵衛を第一番に推向て頭をよせつゝ額つかせ次に小文吾次に信乃次に現八次に照文次第に焼香回向せりこの時にも稚児ハ全く睡の覚にけんいと訝しげに左見右見つ細小なる手をうち合して廻らぬ舌に念仏の南無と弥陀頼む人なみの所作ぞ痛ましき是を見れバ彼をあはれみて人々嘆息せざるハなし扨あるべきにあらざれバ又稚児を携て僉犬江屋へかへり来つ背門より入らんとする程に後方遥に撞鐘の鯨音ハ四更なるべし妙真ハとく出迎へて人々を労ひつゝ盆に茶碗を並居て准備の煎茶を薦む小文吾ハ墓所の埋葬の為体を云云といひあへず妙真これをきゝもあへず子ハさらなり娘婦さへに彼瀬にたゝし義の為に

共に命を隕さバ世の雋傑達に柩を送らるゝよしあらんや況祖父朴平の主なり師なりと覺えたる金碗大人の子にあしまれ道徳に引導せられ八五山の衆徒を全衆して經誦せらるゝ中にも況優べく千萬人の道俗に指の縄を曳てより渠等が為に面目なり亦只これらのみならず尚仂く孤なる孫さへ遺ひ捨られずハ何でう歎きあらんやとのひつゝも又うち歎く袖に薫縁る稚児をいざとて臥房に伴へバ萌葱の幗の七布八布廣袖も今ハ化野の中に捨る撫子の躯に睡るも哀れなりかくて又妙真ハ舊の処に如く来つ蚊遣火焼て宵待バ小文吾これを見久りて大家に甲夜中もいかでとくあなより許我へ遠くもあらぬに斯らも揃ひ坐んハ危し其ハ曉かけて犬塚犬飼両友を舩もて大塚へ送るべしこのうへハ我々父子も豫ておもふよしあるを商量決着あれバ心急ぎのせらるゝといふに妙真さし寄りてそハ名残ても惜まれ切らく初七日の比まで留まほしく思へどもさる筋あれバ是もなしさぞ夜ハ深なん明果るまで幾程も

捐譲ゆへと慰れバ信乃ハ現八共侶に妙真にうち對ひて此度某等ゆゑなく令息賢母に稟る恩義ハ今さらに演盡べうもあらね後難を憚りて本意なく故郷へ赴けどもかゝれ故ある伯母夫許再びこの身を寓難かり只同盟の一犬士犬川荘助一字を額藏と呼るゝものに潜やかに對面してゐらるゝ人のうへを告べくその餘の所要も果さばやとおもふ外亦他なるもなししかれバ一所不定の身で一旦袂を分つともあるも実生の犬士あり鄰郷に八犬田父子ありいづれも疎遠なるべくもあらぬ嫡孫の為自愛して哀戚に傷られなそ再會の時にこそ心緒を盡すべけれとて告る別に妙真ハ心得をけに応をせんとて霎時頭を舉ざりしが當下蟹崎照文懐より准備の沙金を五包とり出しつ先三包を扇に乗せてぞ信乃現八小文吾らにわがほとり近くさし寄て三犬士らの金ハ三千両を下包と套りて此些少の東西なれども此度の路費を貢るのみならず私の餞別ならで里見殿の賜なるに辞みで納めたまへと

いふ三人ハこれを聞あへず。某等ハ過世あるべき同盟いまだ全からねバ徴に応ずるを得ざるに。今又何等の功ありて。この賜を受まつらんや。且大塚へハ道の程十里に足らぬ旅なる。暇の纏費ハ要なしと推辞バ。照文頭をうち掉りて。いないな其は本意に違へり。同盟の義ありて且く徴に応せずとも。その因と果を推せバ。各位ハ伏姫うへの御子なるべきものなるに。いかでその功あるを俟て賞を行ふその儔ならんや。且豊嶋の大塚ハ宮戸の大河を隔るのみ。その道の程遠からねども。犬塚生ハ伯母夫の宿所にかへり入らじと思へバ纏費こそ専要なれ。某も亦旅にしあれバ。嚢中に貯禄の多からぬを減るのみ。いささかの物受られずバ安房に還りて君に報まうす辞もなし。納めよかしとて頻に勧めて已ざれバ。信乃現八小文吾等ハその理りに感服しつ。三人斉一恩を謝しく。やうやくに受納しかバ。照文ハ又一包の沙金を扇にうち乗て。妙真を招き近つけ。老母よあれ房八夫婦が追薦の香華の料にその子親兵衛に賜ふものぞ。辞譲ハ要なきものぞかしといふに是さへ推辞がたく。感涙坐に禁めあへず受いたゞきて退けバ。照文ハ又一包の沙金を扇にうち乗して。犬塚生この一包ハ彼同盟の一犬士荘助とやらんに届けよかし。某ハ大八の親兵衛を伴ひて。安房へかへりて後に又大塚に赴きて。各位と再會せんまでのよしを傳へてよといふに。信乃ハ感謝に勝ず。遠き限なき賜を推辞まうすハ失敬ならん。然れども彼額蔵の荘助ハ今席に缺たるに。かくの如きハ冥加に餘あり。別にこの賜なくとも。某等に賜りしを彼友に分與ん。と今まで思ひ侍りき。その義なれバ許させ給へといひつゝ扇を推向て返さんとしてければ。ゝ大八ハ急に推禁めて。そハ又益なき口諠なり。俺們いまだ彼人に一面識なけれども犬士の一人ぞかし。其ハこの賜に漏らすべからず。是則十一郎が私の計義なり。貧道も示し合して賢を招き士を徴めて君命によるものなれバ。卿辞を添て遣されよ。今各位と共侶に安ども山林夫婦の為に初七日の回向もせで。もなく他郷に赴かバ出家の所行に違なく。

且く杖を駐るのを遠からじく再会せんとするその侭に納めざるべしと懇にと説諭ぜバ信乃かくての感佩して遂にその意に任しつゝこれ彼の問答に夏の夜いまだ短くて明わたると遥る鐘の声に信乃現八ハ退起て行装を整へて辞別しせんとすれバ小文吾も亦別を告て遠しく身を起すを妙真急に呼留めて準備の割籠を遞与て小文吾これを受とりて某ハ大塚まで この両友を送り届けて彼犬川荘助にも對面せんずらん。ありかれバ早く両三日。遅くとも四五日の程にハ必かへり来べし 賓客達ハよくも留めて又行徳へも憚かし。まゝ父も翌のあしたハ市川へ邁んといへれバ犬田もかくまで相譚て。等閑ならび欵待なさとしバ妙真領承てさもあらバ彼地に逗留あるべし。さもあらバ房八沼藺が初七日の逮夜の比にハかへりてまとその期を推あへでへぬ。いかでもわくバよろ後おくれと回答て河岸に立出れバ丶大照文も妙真共侶水際に立て目送る信乃現八ハ再會を契りて船に乗移れバ小文吾も

内ひとりも乗て棹とりのべて推出すも黎明の潮合に漕れて舟く船の迹を見送て世の中に別とりバ牝鹿の角の束の間も惜みて肱抱く人のこゝろなり。却説この日亭午の比に文五兵衛ハ行徳より来まつり妙真も見てくれるとなりて。さりとても来ましつれバ何ともあるざえと真成に上座にもてなせる送に涙吃して要時ハ何事も心ゆかぬぞあるドハそぞろ侭背向になりて頬りに涕をそゝぎつゝバ客も衛もなく腰なる扇を。抜出し推拭ふて胸のなくりをわかぞして。そこそく目を紛せども紛れぬものハ愛惜の歎きの霧の離かねて憂を隠さんとすれども却てそれと見ゆ。心えしけん文五兵衛ハ畳む扇を側に措て喃阿懐よ亦向上る房八が孝なり義なり潔なり今般の遺言曲に聞えりさぞたりに義を竭さんとも。世を隔る怨を執念深今さらに何とるべきかたなかりしハいとおもく。ちかしやもなきをも悪しくせんてこそ亡人の追薦ならめ沼藺なる大八が

らん。聞けバ胸のミ痛みて。諄々しくハいはねども。よし小文吾ハ彼両友を送りて江戸へ赴きたらん。又二たりの賓客達ハ奥なる方なる子舎に臥たりと向へバ。妙真涙を収て現宜ハいかでか子どもらがうへハしもなでも思ひ絶る間なかりしを。又口説立て泣ぞ冥土の碍りとなるらん。犬田とのハ今朝未明に船もて彼二くるを大塚までとて送り遣。遅くともあれ四五日にハ還らんといはれたりけれバ。後安かるべし。ゝ大道徳と蜑崎ぬしハ子舎にてやすみあれ。誘へとやゝして身を起さんとする程に。大八の親兵衛ハ外面より走り来て祖母なるに物いひたく携るを推しやりて。漫に行徳なる外祖母の来ませしに礼まうしつゝ額つくを。文五兵衛ハそが傍に引よせ膝にうち乗して。大八よ和郎ハさく嬰時見ぬ間にいとゞ大人めきたり。物果なと撫探出る袂裏の花黄葉田舎糕を紙の侭に遣与せバ。受て戴ける怜悧ものをと抱て掃て頬を合しつ頭を拊つ愛なるはて。忽地に思ひ出たる也を抗さしてゝ単衣の腋開より。牡丹に似たる痣を見て只顧感嘆なりけれバ。妙真ハ孫が腰著なる護身嚢の紉解綏て。彼仁の字ある玉をしも携出して示すにぞ。文五兵衛ハ遽しく懐紙の間より眼鏡を取出てつくづくとうちもみて深く感じて已ずや。現玉といひ痣といひいよゝ灼然之。既にかゝる奇特あれバ孫が久後もいとゞ憑し。努夫ハしめやかに玉を護身嚢に納めて腰に著させつゝ。又文五兵衛ハ妙真を先に立して子舎に赴きて。大照文に對面して遠に意を演情を説て。閑談すべく粛々なりつゝ。大八昨夕之犬士と稱する山林夫婦が柩を岡に送りて埋葬し為体。及犬田犬江の舅甥ハ犬塚犬飼なる等しく里見家に過世ある縁の趣をとゝに説示せバ。照文も亦来意を告て。賢を招ける士を徵めなる君命を述。偖々又いはれけれバ。此度某ハ四犬士を相伴て安房へ還らんと思ひたりしに。彼犬川荘助とかいふ一犬士今なほ武蔵の大塚にあれバ同盟全からず。犬塚犬飼犬田ホハ且く徵に応ぜざれども。里見殿の家臣

前諾ハ違ふべからず。然バとて身を空しくして帰國して云云と答へまうさんハ面目なし。ありもあらく此度ハ親兵衛を自他の證にとく還りて主君の見参に入れんと議せしに。是ハ祖母に辞讓せられし。なくなくよりゆかんをも亦よしあるなれども赤憑し。奇特の小児をこの市中に育つると安房の藩中におくと人となりをその子の為なれバ。可らん。謙退辞讓も更によるべし。その殘足下ざまに兼引バ妙真も推辞さん。今とそ急ぐべからねども安心の為告るのみとてバ亦ゝ大法師も共侶に辞を盡して。懇に勸めかり。文五兵衛らもうちきゝて寔に怪しき因縁なく拙郎小文吾ハちらく。物数ならぬ孫さへに大諸侯に徵さるゝはあなかしこ幸ことをゆるし孫大八の親兵衛も丈夫ならバ四犬士に先だちて何でふ徵に応ぜざらん。勿論のことながら渠ハおぼく東西ぞふるらぬ小児なるを今四犬士の名代に殿の見参に入れバとてその心から進むにあらで又唯推辞すろもその心から退くにあらで無慾のゆゑ進退ハ某とて心

のぞハぜん。妙真に点頭バとにもかくにも仕らんといへども渠ハ二親を喪ひたるやさしくつくの日子を経ず。縱七歳未滿なりとも世の慎なからんや。初七日を迎る比ハ小文吾にしたがへてまゐらせん。又これ彼と商量してん旨に從ふべ。されバ犬塚生の厄難の既にとく釋されバ世に憚の關もなし。あなまのたくらねどまさんより文行德へ來あそび素人宿ハ叮寧なれども心よしかれたのもとおさん客店の無造作なれまとこさの隨意逗留あらひねと他事もなくいふ人の誠にゝ大照文ハ歡びつゝ送みかくり慰めかり。かくてこの日文五兵衛ハ照文を相伴て行德へ赴り去りつ。これよりゝ大と照文と或ハ十日或ハ二日逸代に市川と行德に宿りて四五日を送る程に房八沼藺が初七日になりぬれども小文吾ハ大塚よりはなさへ、くだ文五兵衛ハ朝より寺に詣て追薦の法莚を資れバ大ハ逮夜より読經しつ。照文も正首に倶に席につらなりそのなき迹を吊ひける程に秋の初風もや立くて外の夏越の幣ならも流れて河岸に出ゝすだ立もかなしぞ。

文五兵衛も妙真も、ともに心をとれしか、丶大照文に相憚りて、時に七月端の二日、丶大はきのふより行徳にあり。朝とく起きて文五兵衛にいひけるやう、つら〳〵と思惟るに、犬田がはなぞかへり来ぬは必故あるをしるべし。信乃は定かに告ざれども、その伯母も伯母夫も甥を亡はんと謀らぜば彼村雨の刀を奪んとて、賺して許我へ遣るべくもあらだ、あれらの嫌疑あればぞ。信乃は故郷へ赴きても、伯母夫許身を寓るべし云云といへども、その親族ぞに憑しからぬ彼処も亦大塚が父恋の地にあらだ。只その友と貞実なる婦なる二人の人を報ずといひしのみなるに送りぬれども、小文吾をそけおきまでにおへぬは其処に不測のことあるか、彼ありとをさらんより、貧道彼地に赴かんにや。犬塚犬飼ホが旅宿を何処と志らねども、大塚の荘官蟇六が小廝なる額蔵の荘助を竊に訪ば、立地にその消息をしりつべし。縦それのみならずとも、房八夫婦の初七を果さば、大塚に赴きて、彼犬川荘助に潜やかに對面して、年来の行脚の趣意を告て、里見殿の家臣にせん契約をせんと思へり。今より邁りば翌の夜は、小文吾をねぎらく、必ずへらん頭を病るときは、といふに文五兵衛欵びて且く閑談うつる程に、折もよし、市川より蜑崎照文来ぬれば、軈て別室に迎入れて、丶大法師共侶に件の趣を告るに、照文も亦欵びて、法師彼地に赴きなば、これまでよろしき便宜はあり。某が今朝来つるも又くその事を相譚ん為なり。親兵衛が二親の初七日も又果るゝ亦までかくてあるよりは、安房へ倶せまゐらせんと祈りて、妙真にしか勸めしかば、涙もややり引く拗る小文吾いまだはべらねば、この一條をもて事整はざるを、法師は秋暑も厭はず彼地へ邁んといふにより、日ごろの鬱胸を幷くに足れり。欵ぶべしく、と只管稱賛あるからかくて、文五兵衛は外に出て便船を求るに、未の比に出船ありとありて、丶大照文に酒食を羞めて欵待も程よく果し、その時刻になりしかば、丶大は行装を整て遽しくたち出れば、文五兵衛も照文も後に跟きて先に立て、入江の船場に送りつゝ、あるべの波もかへる日を翌と契りて袂をわかちぬ。かくてしば照文は宜しくのちの趣を

妙真に報んとて文五兵衛に辞し別れて亦市川へ還りけり。嗚呼趣舍の不定なる。縡逆期すべからず値遇も時あり別離も時あり。あふて別ざれば遭ふ現風雲のたゞよひ親疎眷愛前諾後信料りかたきハ世間に多き離合と聚散なり。

第四十回

密葬を詰て暴風妙真を挑む
雲霧を起して神靈小兒を奪ふ

二犬が武藏の大塚へ赴きしより又はや三日ばかりを經ぬ。これも亦信なりしその次の旦照文ハ思ふやう妙真にいひしゝ小文吾が還らぬハ彼処の友に留られて只毎も日を弥ることありしもしらざれど昱八必と契りける彼法師さへ約束に二日後るゝハいかにぞやとすかく中も心ならず倘昨夕更闌て古那屋まで還りし歟それ行徳へ邁てんいまだかへり来ぬといはゞ文五兵衛と相譚て又彼地まで赴かバ何をもそかいさしく疑ひを解くよしわんやまたおん身に告るかしと思ひ妙真嘆息して現宜ハおぼつかなく胸安からぬまゝに小文吾とても言を食むものならぬに道徳ある何しておぼろげにやあらんと思ふのまゝ術もなし然とておん身も跡を追うて彼地へ赴かんとすとも引留られて速にかへらせんとおもひしハ是処と行徳に僕のものハ勿かれ拘ひを増んのまゝ古那屋まで出して便の有無を問せ見けんなれども昱欲昱去日ハ両人に一人信の無きハ待ぞと慰められて照文ハ寔に然りと応て聽て行徳へ赴きけり。かくもし程に妙真ハいとゞ悔しも歎く日数ハまだ多く有てけふハなき子とみなかる媳の二七日に當れるを今朝ハ生平よりもの繁さに雲時珠数把る暇もなくまして正午よりありて大八が昼寐せし間に香盛添んと家廟なる定香盤を卸しもたてく。かき退し又撥ありし灰ハ涙に湿れども立ともおもはぬ夢の迹煙とありし人そのまゝ思ひつゞけ膽言むるに心の闇を弥陀本願照させたまへと燈明を卒と撥起して緑香に穆しろくうつも香欄ハ四條五條下まちに正念唱名應頂礼皈依佛皈依法看経に外へ憚る

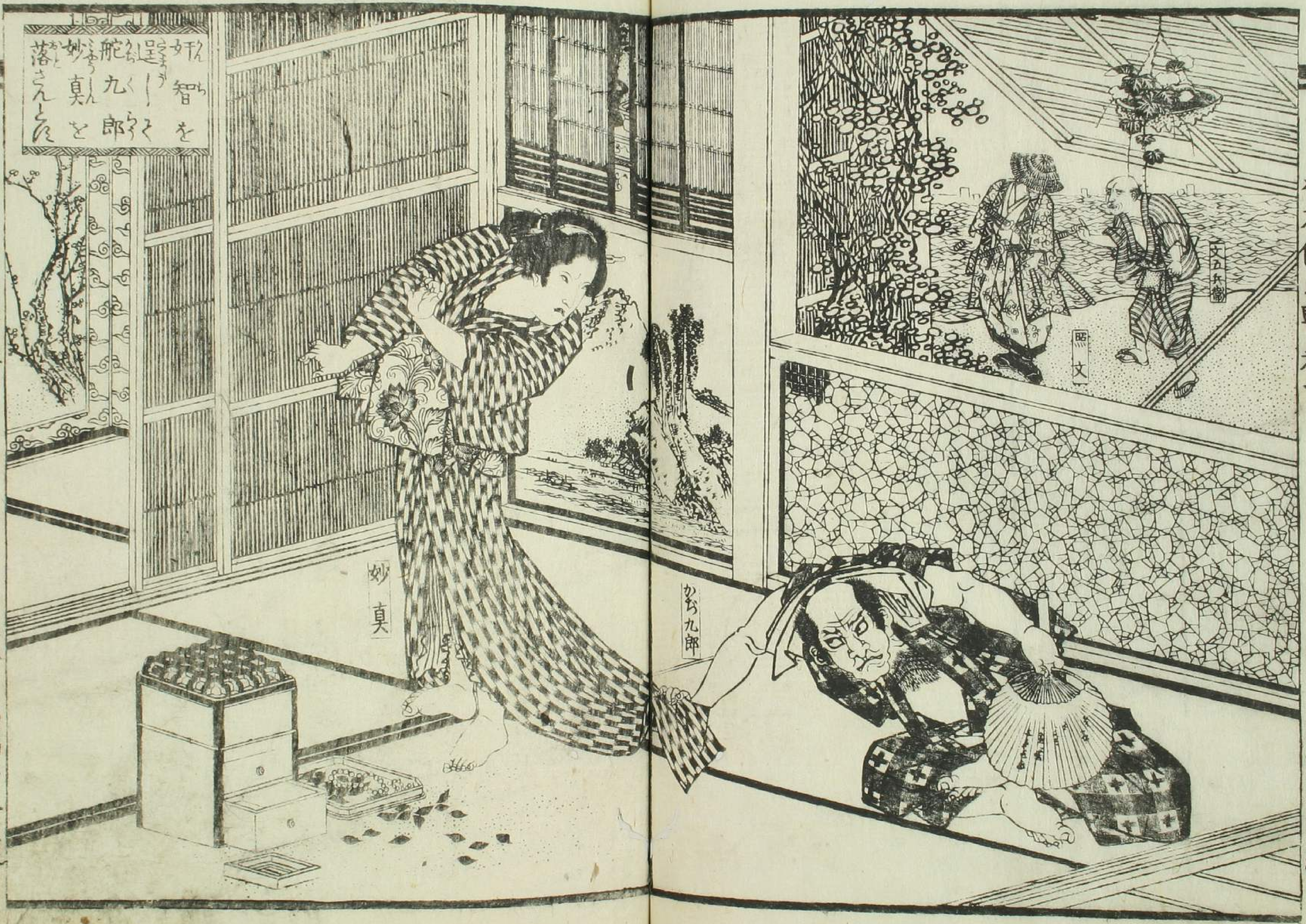
木魚の音も時移るまで絶間なく積らば功德高き山の石ぞ不打ば化るとゆふ未の比欲横日影背門の槐に秋蟬のなくなく声ぞ暑かりける。浩処に祝者高く阿懐へしう値ざりと呼かけて背門より來るものあり。妙真は誰ぞと応て木魚さし遣り珠数を收て身を起さんとする程に。はやあわたゞしく縁頰なる簀戸に會釋もなく身をよせかけて戸走り磤と推開くを驚きながら見かへれば、その人は年の齡五十あまりなるべし。眼圓に鼻大く頰骨高く唇厚く板歯一枚脱たるを臘石もて補ひたり。皮膚は赤黑にして秋茄子の如く、髭鬚は半白して老冬瓜に似たり。黄皮木綿の單衣は肩と腰と汗染て申の時にありけるに、犢鼻褌の花色しらけたるをこれ見えよがしに顯しく片端折せし裾も下さず、四空柱に身を倚て己が随なる高胡床、近辺の団扇をさも粗白なとり揚て衣領を推披き、暑しくとうち扇げば戦く胸毛の熊に似て、花繡さへ月輪欲命と書し瘦肩に掛るを拭左手に撲て、腋の下まで流る汗を顙撞げて拭ひつゝ、是は土地に名たる暴風の舵九郎と呼れし、くる宿も定めず彼此に身を傭して船を漕げども、酒と賭博をのみ耽る渇許の癖者なりける。最裏ここの大江屋主の萬工の舵折には備なく出船に遣せし。船荷を輸減をとのふよしかぬ風波ありしかば、房八からも腹立て大く罵り懲して、爾後は寄つけざりしに、今ゆくりなく來ぬれば、妙真はいかにぞと思へども得ぬ面色して、背門より奥まで進と呼門あへ來る人は誰なるらんと訝しかりしに。居起に途を斷られたる舵九郎とのまでおろふは、いつの風に吹れてまゐらへ訪れしを。やゝんと窘れども些も羞ず、その鬱悒なるなれば錢がなければ洒落もせで、濱邊の貝子勿れども風に吹れて來るまゝに、あだ波に揉れて寄るまゝ、一日ならぬ日影十の奴原が娼ぞて讒告するらんまでの哥々に罵られて、安否も問いでもとりをとまれ。かくもあれ舊し馴染を今ゆくりなくまでも氣に持てやまでかくてあるべし。

けふハ訪ん翌ハ邁んと思ひつゝ人に聞けバ哥々ハ鎌倉へ赴給ひぬる月より今に還給はず。嫂御ハ里へ返されし。といふハつや〳〵解せぬ事なる故なりけりをとて又々他の疝氣を頭痛に悪むまでとゞかざる案過せバ灸にかゝりともあり又え世話もあり是から勘で附らくれバ。まくおハ近属法師と武士と或ハ下宿或ハ二宿迭代に逗留せりそれでやがく云々と疾視し眼ハ違ざれど人の讒訴を恐くもあらん。かゝる時一を馴添甲斐かれ問状なけく阿懐の返答なまく身まかりなん仇まかりんと思ふ程によろしハ盧宅の篙工們も出舟に就くみな在らで彼客人も出ぬと定らぬ告るまのあらバ。氣の毒ながら推掛相談人にまゐらかねバ背門より入偶に故ある来歴序開き。まづかくの如し後段ハいと長かるる間近く寄りく咲ある人問べきなるものを。あへくと抑ゝあげよ席薦敲なまし招く言葉の端も伎倆あるまで猜する妙真ハうち騒ぐ胸を鎮めくかくてハいかく油断せんこそハよく心つかれかう志ハ犬ゝ寄ちる訣

縦ともかく疑くれ筋なからんや房八が鎌倉へ赴しハ人みな知れり沼藺を行徳へ遣せしハ初媒妁せられし人の去歳の秋身まかりしに今茲ハ又その後家との長病著ふ臥たりと告られければちも措れしぞを看とらせんためにこそ彼処へとて遣しつれ。又彼両個の旅人ハ原ハ古那屋の客なれども文房八が踈からぬ縁なれバ渠が還るを待なるべし。遠く来ぬる人とも在なる道遠ければ日の暮てかへらぬに遅き折ハ宿するもありつるが。やへとめなせも果ず膝突詰く呑宣を悪しあからさまに情由ハ大抵猜しつらん奴あり。とて発覧する檜垣の婦が婀娜もありしれど齢ハ四十あまりとかども根ならの縹致の捷くましくなを肪も脱ずみづくし久米の仙人に覗窺させても雲の歩板を踏外しかく勿地落人文房盛りなくるより年来寡居の枕寂しく不圖せしよりか心ともかく惑ひ添て何が寺の色界和尚或ハ連歌に香立花に蹟美吏に趣ある鋭及武士の浮浪一個も二個も密夫のなしとハいはれぬ證據あり色に惑へバ子でもなき昔物語もあるめを不便や

哥々は殺られし歟第一番に疑しきはかの墓所なる岡山に新に物を瘞めし跡ありされどもそれは犬猫でも死りとかふのみか只房八は鎌倉へ沼藺は里へといひなしの鎌倉へは路遠かりされば日毎に行徳へ来ぬかの人ども古那屋なる又媒人の宿所にも嫁は居ざるを見しとも知らずや彼岡の新瘞は哥々夫婦にあらざれば人に隠して埋めたる臭き譯あるらんとやは。今宵のみならず怪しきは里の人の噂に聞ゆる比古那屋で八犬塚といふ罪人を宿しける科によりてなど文五兵衛は搦捕られつ。その子なる小文吾も犬塚が首捕りて許我の使に進らせて親はやうやう免されたるをその日よりしく小文吾とならず地由も久家よりくだれど文吾倫も豫て疎かりし塩濱の鹹四郎盍六均太の三人交りをしたりと往古あれどもいふはいよいよ疑ふべし。かかれば岡に埋めしは彼犬塚が亡骸歟さらずば彼の山林に犬田が竊に謀し合して鹹四郎等を殺したるその亡骸を埋めても有繋に後めたければ且く影を隠せし歟斯迄も推て勘詰るにあらねば

違あるべからず。それを衆人を欺くとも蛇の道は蛇はしれるぞ吾儕を欺かんや明々地にいひ出しなば彼新瘞は何人ぞと詰問れて妙真は何と若峯に集る鷲に身を直せし兎より苦しき胸の波風を再びたび鎮めて氣色に見せじと微笑て答へけるは邪猜らるゝ兄生とし活る物の子を慈まぬはあらねども譬ば色に惑ひたる悪人は今は世に又あるべくもあらざりし一箇も當らぬ推量に疑れてはかくさぬものを隠すべくも待ずば彼犬塚信乃とかいふ人を己とを欺きて阿沼藺が兄の繋捕もしは親の為にしも素より怨ある者ならば切くその亡骸を瘞らんと思へども行徳は翰憚あり。近きの墓所へといひしを推辞れどもよく房八が其意に任しられども絶てえあらぬ罪人の軀を埋めさせしとよくまで慈悲貌に云云と人に告べたるよしとも瞞しば。ても拍く俯仰がらも笑ひありといひせんとおもひしかば信乃をも数に加へれば問わは落で語るに落るよしかくも見えたり。犬田が仏ありかくよりや彼あく七骸を埋んと



奸智を逞しくする舵九郎妙真を落さんとす

文五兵衛
照文
かぢ九郎
妙真

欲するとも既に八幡の相撲より恨を含む妹夫に頼れもせじ諾ひもせじ件の事ハ縺れあり。六月廿二日の曠昏梁崎なる山林が犬田と出會の捫擇ハ誰とてしらぬものもなし。介るを云云といへども八言の後先取次なる。その偽りあるべくのそれなよりて猜ぶ小文吾ハあの哥々を殺して逐電せしなるべし。かくてその親文吾兵衛に竊に金もて和解し身ハ子が子の亡骸を阿容々々と人にもしらせで葬らるゝわざをおもんぱかりしが媳さへなし。ある女あるゝ朔日より月さへ大のみそか夫をとり替引替飽までに悦楽をせしくせに人目すゝめの念佛三昧その術ハ喫ぬ論より證拠彼新塋を發きしく目に物見せんと立揚る裳を楚と引留て且候のといふをあり。彼新塚ハ誰なりともその職役にあらだして墓所を發らバ不法ならん。その咎に預ることなかるまじも捨て措ねしとのバかんぞ晴と時く糾その役なれバども正しく惣し不敵の悪るぞ荘官殿に訴て賞禄にせバ酒もね飲める宝の山へ入りながら手を空しく帰らんや。迷に誣る欺偽る欺一下跨なる岡山へ引かそめ給く面前に明々黎々を分てらんらん運の際ぞ覚期をせよとぞのりける。物もかしましく男が心配るとも男もかならん仇をもなかんと郷によびしそのまのあたりに人目つくましぬ密夫を引入れんより再婚を招迎しその婿殿ハ外ならで恥しかゝでその鼻なり。年の程も十とハ登らで銭をもて健やかく船もよく漕ぐ小口も利く酒ハ喫ども睦上戸なれバ物争ひせぬ柔和めの女房の尻に布かバ敷け辛防つよき八年の功亀の甲より八卦をときのみ堤の賣卜に生刺させしに女房を下に置ぬとふ地天泰なく大吉なり。身上ハ些劣れども里中に友達夥あり。山林が養父となりてもさのけなくれの実ハあれど今立地に絶更らくらの商量に乗らんとすれバ竊に岡へ埋やる。その亡骸ハ維にもあれ人に知らるゝ実ハあらで身に引受て一代の守本尊になるざらんや。否とよバ冥罰覿面荘官殿に訴て守へ牽して密夫共侶獄舎に繋いかなぞや。否とも応とも返事なき鈍りしを引く袖を拂へども又あまさぬ年に似げ

なれ色好を憎さも憎し腸あるし。いふもさらなれど玉なす汗の千々に心を摧くのミ。暴立くハ緒の破れになんと思ひ入して、さり氣なく墓所のあたりに憚りて心よくなりぬるをいのちと数ならぬ身の花もなれをさだめりに思ひれなバそれとも、かくもあれど。さなれハ時ならぬ老さるも浮氣ハ男の癖なるに苟且にものいふをいふぞ。実ありとも言ひしかバ雨の中もいとはず雪の中もかよひて百夜の情深草の例に倣ふともわるくねど。日を連ね月を累ねてあ、身が心の変らぬをよく見定めて後にこそ悔しき事の多かるべしといふなるもの。昔より吾儕に浮たる身なれバ孀婦にありても猥がはしき濡衣を被せられざるにハ何怨めて身の上を云云といふてハよに限りなき恨をえがくても思ひ捨ど思ふバ又日を隔て来ありし只今心を尽してそれも亦理りに侍らじやとあそバせて冷笑ひ一寸延さバ尋ともならんなる中もあらばいでならぬでもなく口賢にいひとくともさらに幾度の恋ならで否と応とハ地獄極楽岡の死人を掘出し骸の

人を浮たるもの。吉凶ハ只一言否なるバ否でもよし。応ならバ岡へと又立あがるを遮りて推禁て又あなたの性急之介ならバ応欲それハ亦とハ人惑ハし此方へ向ひと引よせて携るを振解れ潜りて逃れバおちこち追廻縁しなくせんかたなくもなれ折から蟹崎十一郎照文ハ文五兵衛を相伴て行徳よりかへり来つ背門なる入らんとする程に裡面にハ人の挑むがごとく踏鳴らす箕子の響に作麼何ぞと先に進みて庖湢のかたより衝と入るに舵九郎ハ妙真に携着んと追遶る部舎を拍て照文に忽地礫と突當る勢ひあまりて、がばと身を轉して倒れ妙真ハ照文のかたへ来るにちかくよれハ折からそ蟹崎なりしと思ふ間に舵九郎ハ勃與と起て照文を向上てあらびちく驚れあるハ無遠慮なる奴ぞあるか成人ともし窓の腰を折るまでいとせはしく投しハ後家の密夫欲穿鑿すべきことありて荘官へ引掲てこの返報を信とせべしと、ことく所中に立蒐る腕をすと含話て撐と投る修煉の拳法

縁頬の簀戸打倒して遥に庭の中央へ筋斗うたせて。あな疼し痛しと倒る羅漢杉に携りつゝやうやくに身を起しても敵もあらざれバ恨しげに佇みて鉛刀武士奴おぼえずぬる偶怪我の功名で汝が拳法の捷れしにハあらず。よく投られたるバこそ二度よ。膝も揖剥ねされでも炎へと裳を褰て尻推向てうち敲けバ照文怒ておぼえず懲せよ。女なりと侮りたる狼藉ハ免もゆるさで其をさして窃夫と罵りしハ何ゆゑぞや再三び尾陋の雑言今ハしも許しがたし　其処な退きそ。と敢園て刀を晃りと引抜けバ妙真吐嗟と推禁めて渠ハ名だたる悪棍なるに傷けなバむづかしからん鄙痞にハ乞児に棒打。敵るまでもなきに竟に逃なバ脱しもあらずと諫られて照文ハ歯を切て疾視へり。舵九郎ハさもこそと思ひて呵々と冷笑ひ刀を抜て威しても人を殺せバ身も殺さるゝ。有繋に命ハ惜ものゝ斫らざるも刺ざるもいかにぞや。その鉛刀もて骨のある暴風さへ八斫るゝかられん斫らバ暇をとらせんと猶預に誇る擬廣言あちこちに黏し衣の土とり

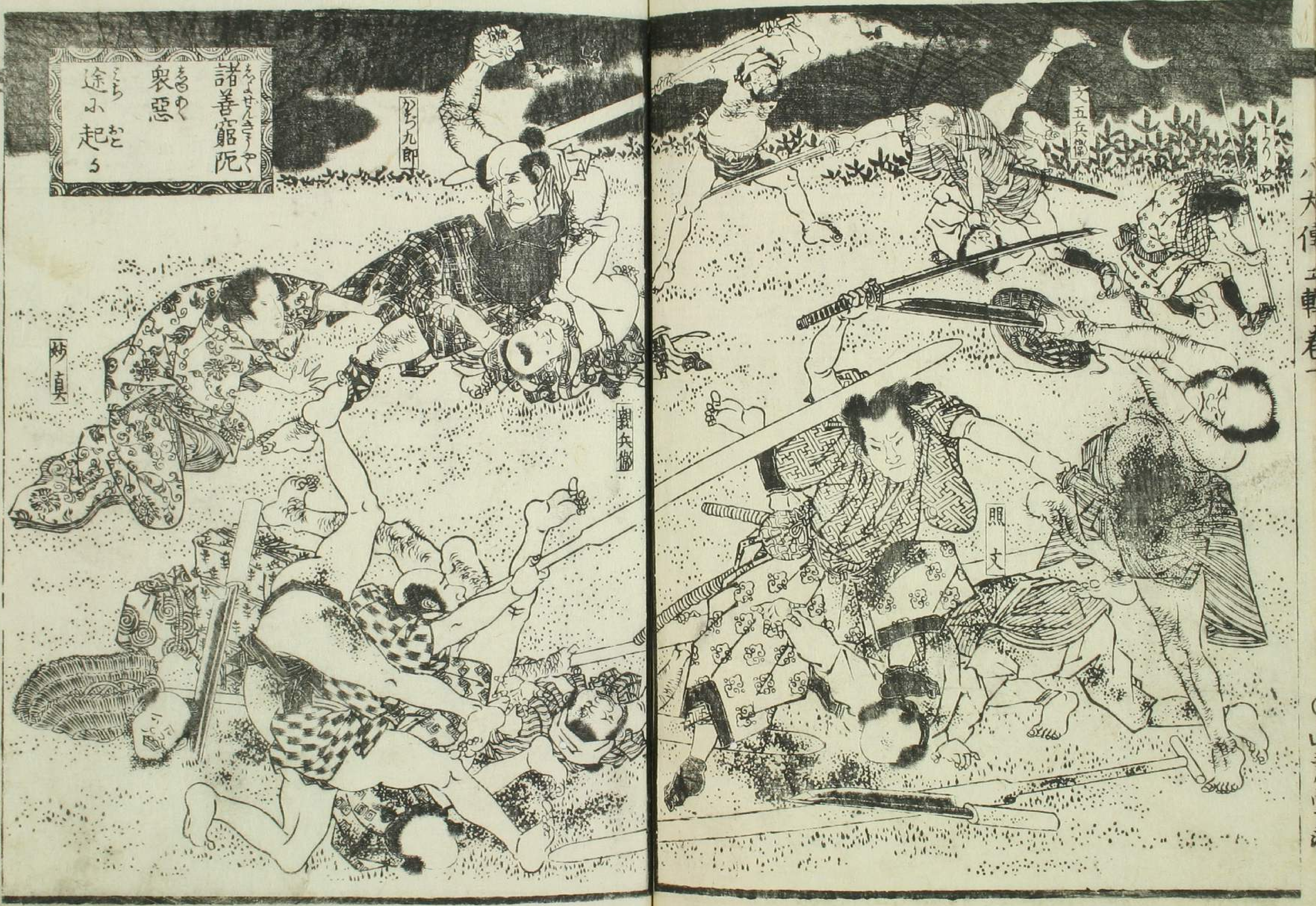
拂ひて攙る草履を取て足も空に罵りながら逃去りけり。当下照文ハ刀を收めて縁頬より背門の方を見るに彼悪棍ハ影も見えず躲を限なかりしかバ僅に窺ぬて又舊の席にかへり著く程に次の間に立在て件の為体を闚覦る文五兵衛も進入て照文と共に妙真に事の本末を咨れバ妙真ハ倒れたる簀戸を遽しく推立てさて舵九郎が狼藉なる渠が邪猜の條々いはれもなき事ハ云云と潜やかに報るにぞ両人齊一驚駭て今ならバ又禍のおこらん起る緒ありそれいまだしと額を聚めて倶に思ひを疑して照文ハ後悔の拳を捺りて嗟嘆しつゝその趣をまでも知らバ彼悪棍を撃留て禍の根を斷べかりしに既に彼奴を走らせたれバ且くも躊躇あるべしとも又いかなる故ぞといへバ舵九郎に告訴せられて彼岡なる新墓を發されなバ山林が亡骸ハその首なきなり。信乃が軀といふべしされども夫婦合葬せられしバその妻の亡骸ハ陳ぶべき辞なし。これよりゆくく穿鑿せられバ彼身ばかりのことかは露顕なして牧料さるゝまで見破れな

及ぶ。犬田父子も犬江の老母も、いかにして脱れ去りけん。ゆくへもしらず。舵九郎を走らしたりし油断ハ大敵、悔しかれども是非もなく、後れたりとも追蒐て撃果さんより外に術なしやと、いかにせん刀を取て立んとするを、文五兵衛推禁めて、宜なる理りなれど、遺恨ハ誰もさることなれども、今から追ふとも及ぶべうもあらず。且舵九郎ハこの里に定りたる宿所なし。只同悪相聚ふ無頼賭博の友のミ多かり。悪援ありといへども、譬バ千尋の堤の水ハ一蟻の壌をもて堰かるゝ愁に、今追詰なば毛を吹て疵を求る、再度の後悔ありもやせん。追奴ハ追奴が随にまかして、未然の禍を避る術をこそあるべけれ。早流ハ要なきぞかしと諫めけれバ、照文ハ僅に怒を歛めつゝ、且して文五兵衛ハ妙真をなぐさめて、喃阿嫂、犬兄ハ何と思ひ給ふとも、小文吾が武蔵へ赴きなば、晩くも十日にあまらじ。渠ハさる程道徳あり。三日四日経ても返りこずバ、八蜑崎ぬしに訪れて、共に相謀るべし。あらくは慰るよしもなく居つゝ、物をおもはんより、市川へ赴きて、又妙真と商量し給へ。つれ立て途いそがしく来ぬるを見バ、又よからずハ、もしも擣て加へなば、胸安からじ、不慮の為のミぞ来にけり。そもいかにして脱れしと問バ、妙真嘆息して、善事ハ善の報あり。道理ハ豫てしるところ。義士も節婦もなき後まで、枉津日の神の冥縁に幸なる人ハ幸なき過世の業報なるらんも、形ある身の形なき世をいかにしても遁るべけんや。吾儕ハ経られて毋失の罪に沈むとも、稚き孫ぞ恙なく人となりなバ、年来の心づくしもその甲斐あらん。女子ハおろかに浅ましけれバ、かくと聞えしより思ひ決めたるも、悼るゝ先立ものハ涙のことのミ思ひけく、又うち歎くを照文諫め奨して、禍既に蕭牆より起るを知て猶そく。長僉議ハ无益なり。しかれバ大と小文吾をあとに侯んハ甚危し。某ハ大八の親兵衛を携て速に安房へ還らん。祖母も孫に傳添ひて、且この地を遠離らバ、彼舵九郎が毒氣を避る、これ究竟の便宜なりけり。とくこの処をたち去りて、封疆まで退かバ、悪黨なれ荘官なれ、数百人して追蒐来るとも怕るゝに足らず。古那屋の主人ハ宿所に

かゝりし今宵の出船に乗遅れなバ翌ハ早旦に大塚へ到らんこと易かるべし○この條の趣をゝ大と四犬士に報知して○又進退便宜を好まバ皆伴ひて安房へ赴んか○老母ハわがやの起行の準備をせよと急しく遽なく示し合すれバ文五兵衛感佩して○この錢塞に然るべし○扨仍如親兵衛と妙真も相伴ふて猛なりく從者望しが○某ハ孫を背負ふて郡堺まで送るべしとて阿懐に急ふとも慌て物とて取送して○と心をつけれバ妙真も遂にその錢に從ふて睡覺る雅兒に新しき衣被せ更に護身袋とをぞ佟に腰に楚と著させてまた身もかろく衣とりかへて行装を整て貯稀の沙金などハ財布の佟に身に著て家廟の位牌古記舊録孫が被替の衣なぞも遽しくとり集めて下袴に包みなり照文ハ水行を便よしとすれど順風かゝねバ心に任せず只共走りに走らんとていふこれ彼を急ぬ程にきのふ江戸まで船を出しし依介とその小廝の只一個か乗りまつ妙真が縢しう

促装をさせなどしつゝ○その地へハ邅せまくと訝しけに咨るを妙真ハ曲に報ていはく蟇嶋娘が大八を云云の処まで将てゆかんと宣ふに辭ふよしもあらで任して思ふ遣るべくなりぬれバ行徳の外祖なるが途まで背負まゐらせんとてかへりも侍せで伝来れどもわれ心のどかならず吾倚も共侶にとて從者あれバといつはらん今還り来しあとをまもる遣ふハ心のなきに似たれど些の祇包あるをまでいかにぞやと思ひが依介一錢に及ぶべきを亦も易からぬまゝ一日船を漕走らしても足ハ疲るゝをかれハ今かへりしかく何かあらん何処までも倶しゆかんと快く諾ふ心ざしの淳朴ある主の為に労を厭ず他し蒿工ホと語らはねバさハとて件の祇包を中結して負しつゝおのおの草鞋の紐を締びつ文五兵衛ハ大八の親兵衛を背に負ひぬ留守をバ彼耳蹊なる老婆にのミ遺せども有繋に名残ハ惜くて笠よ杖よとまどひあのびに支度やゝ整しかバ照文を先に立て僉共侶に背門より出る人に面を

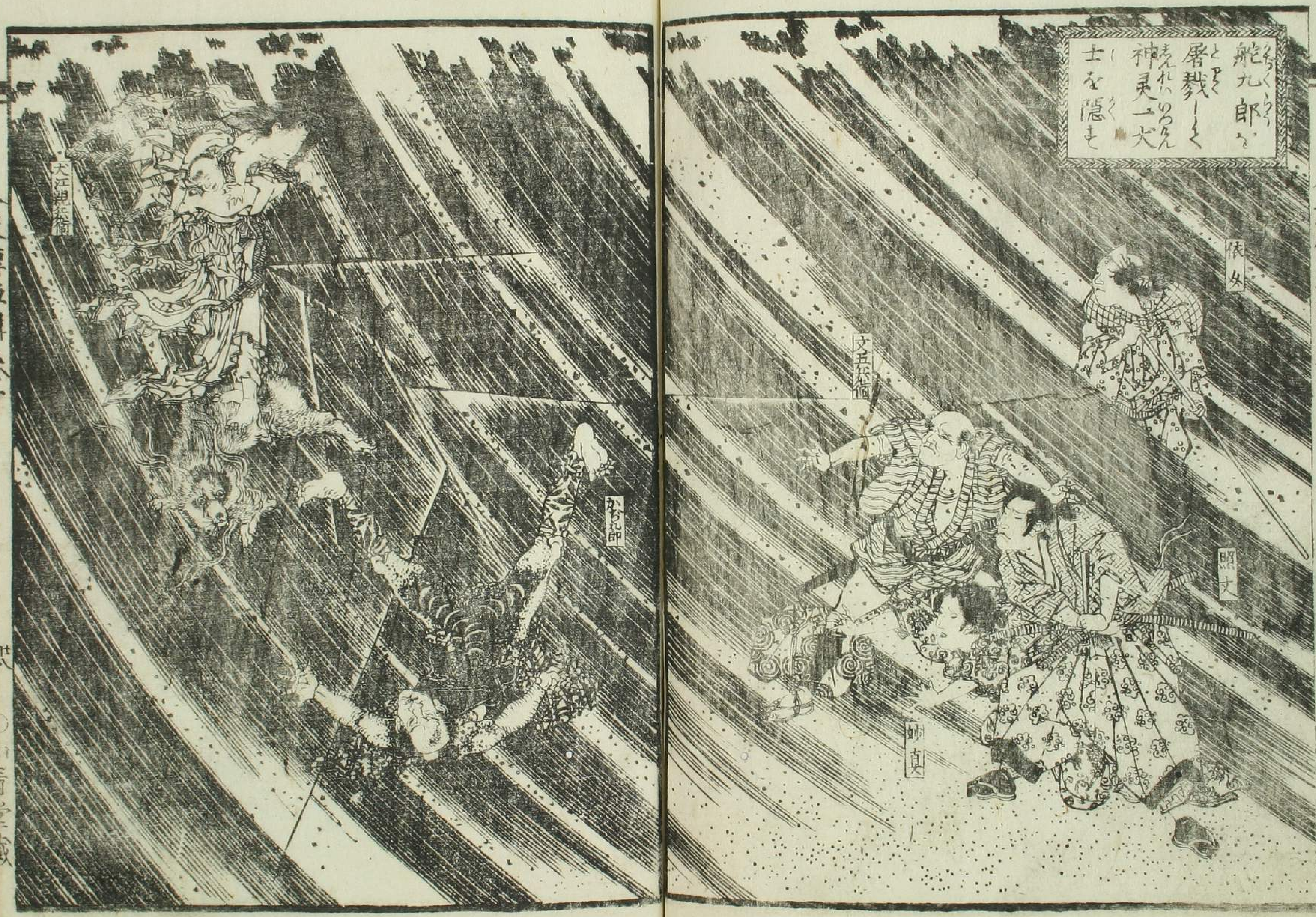
見せじとて笠ふかく傾けて間道より進む程に落日暉々として野禽飛ぶこと急也。袂に留る夕風ハ昼の秋暑に似るべくもあらで急ぐとすれど足弱の動もすれバ後るゝを待つけてハ又走る市川の町を離れて田舎路を上總のかたへ並松原やゝ来ぬれバ。處々に延蔓る茅萱の下に集く虫の声ちろくこより暮初て日没ごろになりけり。浩處に前面なる下叢黎杞松蔭より顕れ出る一個の癖者頭に手拭の斜鉢巻して腰に一口の短刀を跨たるに八九尺なる長櫂を挾て柳色染の筒腰被の牙籤煩なるに諸肩袒る單衣の両袖を前に締て毛膗陽著に衣の衿を片端折せし躬剽の打扮鬢ハ皓く面ハ赤涅にして山猿の暴るごとく骨太く。膚ハ黒斑にて罔両の祟るに似て大道を陜しと立塞るを見れバ是別人ならで。怒れバ舵をも覆し又屋をも倒すとの現暴風の名にしおふ舵九郎にぞ有る。當下暴風舵九郎ハ持る櫂を取直して横へて又推立て酒氣芬々たる声高やかに罵れ賊奴輩遅なし汝ホ既に悪事の戯房を覗まれ詰られたく後家共侶に逐電欲かくあるべしと猜せしかバ毀計の甲乙馳催して門にハ狗を附おきつ途にハ視法師を立置て夜行をうける路脈を此の海道と覰著て先へ輪く張る網に宿栖迷ひの旅烏捕へて絞るハ我の隙費らで脱れがたしと。観念して女を遞与してとく〳〵死を遁とそゆるぞ追さんやと匆匆に喤呷て疾視けり。照文これを聞あへず先度に懲ぬ不敵の悪棍今盗の根を断ずハ地方の患を何時か八除ん刀を穢すハ惜れども望に任して先物見せんと敦圍猛く挙ひ進みて刃をきらりと引抜けバ舵九郎ハ声ありて立たる衆皆出よと呼はゞ森なかると。左右なる高萓の中小松の蔭より或ハ三人或ハ五人折櫂大魚刀なんどを引提る。夥の悪黨簇々と蠭のごとく跳出て照文ホを攬篭て擊さんと競ひ蒐せバ照文ハ些も擬議せず前後左右に引附て面もふらで戦ふうちの間に


諸善竆阨
衆悪途に起る
かぢ九郎
妙真
裏兵衛
文五兵衛
よう女
照文

文五兵衛ハ大八の親兵衛を妙真に抱せつゝ小児と婦人ハ特に危し依介をゐて舊の路を市川のかたへ退去すべくとする程もあらせず後方よりも一隊の悪黨突然と顕れ出て咄と噇て鬨をあげつゝ競かゝるを文五兵衛ハ信とらへてかくてハ脱れがたしとて妙真を背に立しつゝ旅刀を打振々々且く防ぎ戦ふ老人なれども素より町人にあらざれバ撃刀をさく法に稱ひて敵ハ二三人に浅痍を負へども多勢を恐れて物ともせず依介ハ亦文五兵衛が失あらんことを怕れて援んとすれども身に寸鐵を帯ざれバ妙真が捨る杖をとりて振立て進みより　この時はやく照文ハ先二三人を斫伏せて五人に深痍を負せしかども敵ハ目に餘る大勢なれバ後方をさへかへる暇もあらず又舵九郎に近つかんとすれども推隔られて進退自在をなさゞりしが命程にますます文五兵衛と推並びて且く敵を拄へしかどもなほ一條の杖のみなれバ三方より打闘ふ敵の器械を接かねて眉間を破と傷られたる痛痍なれバ霎時も得堪ず潸と濆る鮮血とゝもに苦と叫び介ぎりて文五兵衛ハ死れ〳〵く頻りに憐む老人の勇氣も腕も衰へたる隼を難ってせられて遂延して妙真と間遠になりゆくを透と窺ひ舵九郎ハ薄暗がりより走り来て声をもかけず妙真を親兵衛もろとも撻と抱けバ吐嗟と叫ぶ身を悶ても腕の解べくもあらず角へども声も絞て泣く稚児の如とかりて哭声もなく隻手に釵子抜とりて舵九郎が抱済腕を骨も徹れと丁と刺く裏腕くまでにあらねども有繫疼痛に堪ざりけん驚き怒て霎時もあらず却て何せずと身を戦して但る両手を解しかバ妙真ハ稚児を肩に揺被逃足迅く逃んとせしを脱しも遣らず跳起りて大八の親兵衛が肩尖を丁と捆て引よする枝の果を掲てく推放擲擭て左の腋に挾籠より妙真ハ稚児を畧奪られてあはやとて脱れも得ず路のかたへおちぬ親兵衛を赤子のかへさんと見バ此ものやせで嚙むおん袪あまつ悲もあらず料も命しむれども人によりものを返せ復せと叫びつゝ泣つゝ引留んと立

関東の俗小児を罵りて。餓鬼といふ。その食を求るをの、やむ時なきによりてなり。

なれバ妨ぐるを踢倒して。暇のくえ横たふ路を。一下町あまり走りゆかん妙真を稍身を起して亦や追留んと慕ふをも舵九郎ハえうくうつて朽樹の株に尻うちうけて肱腋に抱きし稚児を弄玉のごとく抜揚て地上へ撻とうも落せバ息も絶べく哭叫ぶ声をよるべの薄月夜妙真ハ轉つ躓つ喘々近つく程に舵九郎ハ稚児を又引すりて動せバ尼奴且よくきけよ已がおろかなる従定ハこの餓鬼ハ今寂滅為楽又同行の三人ハ験計の數輩に任用しられバ一人も活てハ之をべからバ罔へ埋めし死人の縁起も彼も此も心得らして今より一期を憑とおもへバ市川へ揚く還りて今宵を二世のちぎりとなりなバ餓鬼も下中ハ措るを阿乳母日傘で饅頭の皮を剥ぎ栄曜の表盛香と又バこの細鱗を肉醤にしてく酒をまろめんあるを泌めて応をせよ応をせバこの餓鬼をとを應の石を擲合せく胸前打んと振揚れバ妙真ハ吐嗟とをすり見る目も眩くれ消て叫んとすれど声をぞ禁んとのする腰さらバ小草の上に身を投まろく共に死んと泣沈むかゝる程に照文ハ廿餘名の悪黨を八方へ投散して文五兵衛共侶に妙真が往方を索めく稍この処へ走りき来つ折から雲間を漏る月影に遥にみれバ妙真ハ道次に佇くをり舵九郎ハ推仰向る稚児を左の手に押へて右の手に石を撥合て今や打んと翳り揚ろう両人吝一驚死怒くやよ等霎時と呼被つて僅に走り近つけども人保を取られしが文のかともせんまでかし齒を切り拳を捺りて瞬もせで矢視てり舵九郎も亦これを見て頭を挙口を開て轉ぶばかりに笑ひ彼ホ両人やよ待よ、もつくバ死ぬとも一下歩うごくとも近つかバこの石をもて餓鬼奴を単撃に尼奴ハ喃譯くよ、もつくバ雲の天幕草木ハ藏棚かくまで野曠の勾欄にて看官ハ栄あれと知ものなしよく来つれども七種まで打挫ん欲望に任せんいかにぞや飽まであざみ弄べども照文も文五兵衛も透あらバ親兵衛を拯ひとらんとおもひの



舩九郎(ふなくらう)を屠戮(とりく)して神霊(しんれい)二犬(りやうけん)士を隠(かく)す

依介
文五兵衛
照文
妙真
ふな九郎
大江親兵衛

再び言葉をまじへず手を合さねども。神仏の感応冥助を黙祷して怒を忍び心を苦しめ立並びつゝ目戍る間四五十歩に過ざるを舵九郎は既に斯海激る残忍不敵の奥に乗して早く撃んとし又呵々と冷笑ひ揶揄ひなぶりし腰抜でも汝ふ両人まで死ねば後家奴も珠数を断なんさらば餓鬼奴を料理せん拳の冴をよく見よと。再び石をとり揚るが妙真は只身を抗てあれよ〳〵と哭叫ぶ声冤悲して絶體絶命照文も文五兵衛も今は忍ぶに忍れず小児を撃ば皆の大刀雖言をいはでろ迸まで乾竹割にせんずと刀の鞘ながらひつさげて走り進んとする程に舵九郎は會る石を閃して雛児の胸を望て撃んとするにあやしやも拳狂ひて地上を礫と拍しが且怪と且瞻て蹙粉になれと復撈り揚る腕忽地痲痺てされども。あやしと惘然たる頂の上に靉靆と一朶の靄雲天引降て電光凄しく風亦颯と音して石を巻起し沙を飛して草木を靡かせ鳴動に或は明く或は暗く。雲は漸々に降来て大八の親兵衛を引包むとぞ見えたりし。又中天へ巻登れば。舵九郎はされに復ならで驚きて瞻る両手を抗てあれや雛児を遣らじとて跳狂ふて撲地と輾べば足は空さまにありて身は地をはなれ雲の中に物ありて倒に引揚るが。ごく鮮血潑と霤りて舵九郎は臍より鳩尾の邉まで、ずく〳〵として引裂れる。軀は撲と落たりけり。かゝる奇特に照文も文五兵衛も進みかねて忙然たる後方より嚮に逃たる悪黨四五人。なほ朽をしくや思ひけん船棹稍藻刈鎌をの〳〵得物を閃して不意に起て撃んと進むを照文見てかへりて大刀真額に披翳し縱横無礙に砍立れば文五兵衛も相並て再び刃をとりもち振りて両人斉一両敵を瞬間に砍仆せば残る奴原舌を掉て逃去るを三反許追捨て舊の処に立かへれば風はをさまり雲霽て傾沈む五日の月の影のみ幽に送りき。

里見八犬傳第四輯巻之五終

編述　曲亭馬琴稿本

淨書　千形仲道謄寫

繡像畫工　柳川重信

剞劂　中村喜作刊刻

家傳神女湯　一包百銅　婦じん諸病によし第一産前産後ちのみちに妙なりまたうちみくじきにもよし　手あらひにもちひて氣へんをまぬかるべし　よのつねのあら藥にくらぶれば　ならびなき功の外のぞしところくてあるべし　ふくろくへ包うちにあるせり

精製奇應丸　上茶色をえらみ家傳の加げんによりてそのこうのつねのきぐすり丸にまされる上藥也〇大包二百粒餘入代弐朱　中包三十六粒入代壱匁五分　小包十粒入代五分

婦人つぎ虫妙藥　ふじん毎月つぎ虫にてなやむにもちひてわづらひのぞくこと妙なり又産後によろし　一包代六十四文　半包代三十二文

熊膽黒丸子　くまのゐの正しきものをえらみ製方家秘の加げんをつくせりされば熊膽のけをのぞきよくそのかをましそのこう多し　一包代五分

製藥并弘所　江戸元飯田町中坂下南側四方みそ店向　瀧澤氏

神田明神下山本町筋同朋町東新道

取次所　江戸芝神明前いづみや市兵衛　〇大坂心斎橋筋かどや町南へ入河内屋太助

〇婦人用ひろめ仙女香一包四十八文〇黒油美艶香　同江戸京橋南傳馬町　坂本氏

〇金匱救命丸　江戸林氏製　こゝ取次所　處々にあり　弘所　江戸大傳馬町二丁目丁子屋平兵衛　元飯田町中坂下よもの店[illegible]

天保十二年辛丑春正月吉日發行

發販
書行

京都　河内屋藤四郎

同　大文字屋仙藏

大阪　河内屋太助

同　河内屋直助

同　河内屋茂兵衛

江戸大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛板